

Historical Site OMURO Tumuli Cluster

国史跡 大室古墳群

史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書

－ エントランスゾーンB～D区 遺構編 －



March, 2007

2007（平成 19）年 3 月

NAGANO City & NAGANO City Board of Education

長野市・長野市教育委員会

Historical Site OMURO Tumuli Cluster

国史跡 大室古墳群

史跡整備事業にともなう遺構確認調査概要報告書

－ エントランスゾーンB～D区 遺構編 －

March, 2007

2007（平成 19）年 3 月

NAGANO City & NAGANO City Board of Education

長野市・長野市教育委員会



大室古墳群大室谷支群遠景（平成7年 撮影）

序

大室古墳群は、長野県長野市松代町大室に所在する、5世紀前半から8世紀にかけて築造された大規模な古墳群です。奇妙山から派生する3つの支脈尾根上と、それにはさまれた2つの谷部に立地し、約2.5km平方という限られた範囲に約500基もの古墳が密集して分布しています。

この古墳群には、土を盛る代わりに石を積みあげた「積石塚」や、石棺や石室の天井石を三角屋根形に架構した「合掌形石室」が多く存在しており、全国的にも他に例をみない貴重な古墳群であるとして、平成9（1997）年7月28日に古墳群の一部約16haが国史跡に指定されました。

大室古墳群は、これら積石塚や合掌形石室の存在により、古くから学術的に著名な古墳群でしたが、それに対して一般市民の認知度は決して高いといえませんでした。その理由としては、盗掘や崩落・風化・草木の繁茂などにより、古墳群をとりまく環境が本来の姿を失っていることが第一に挙げられます。さらに、現地における公開施設を含む情報の希薄さ、交通アクセスの不便さ、便益施設の不足なども挙げられましょう。

そこで長野市では、古墳群の詳細な研究調査を実施し、その成果に基づいた保存修理を図るとともに、周辺部の情報提供施設や便益施設の建設など、歴史的背景を体感できる史跡公園として整備し、広く公開・活用することを目的として、史跡指定地の公有化と史跡整備事業に着手いたしました。

本書は、史跡整備事業の適切な遂行に必要な古墳群の諸情報を得るために実施した、エントランズゾーンにおける古墳範囲確認調査の概要報告書であります。本書に所収されている諸情報に基づき、文化庁および長野県教育委員会のご指導を仰ぎながら、史跡整備事業を進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが当市の文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに確認調査実施に際して多大なご尽力を賜りました、文化庁ならびに長野県教育委員会の皆様、史跡大室古墳群整備委員会の先生方、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、またご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶に代えさせていただきます。

2007（平成19）年3月

長野市長 鷲澤 正一

例 言

- 1 本書は、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金および長野県の文化財保護事業補助金を受けて長野市が実施した、史跡大室古墳群保存整備事業にともなう遺構確認調査の概要報告書である。
- 2 調査地は、長野県長野市松代町大室 254 番地 3 ほか に所在する。
- 3 現場における遺構確認調査は、文化庁および長野県教育委員会、ならびに史跡大室古墳群整備委員会の指導を得て、長野市教育委員会が 1998 ～ 2006（平成 10 ～ 18）年度に実施した。
- 4 本書の編集は、長野市教育委員会文化財課専門員清水竜太が担当し、執筆分担は下記のとおりである。
時 信 武 史 第Ⅲ章
飯 島 哲 也 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章
- 5 遺構確認調査の実施および本書の編集に際し、下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し、明記するものである。（2006 年度現在、敬称略）
文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 小 野 健 吉、文化財調査官 白 崎 恵 介
主任文化財調査官 本 中 眞
長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課 指導主事 西 山 克 己
史跡大室古墳群整備委員会 委員長 小林三郎（明治大学文学部教授）
同 委 員 大 塚 初 重（明治大学名誉教授）、岩 崎 卓 也（松戸市立博物館長）
佐々木邦博（信州大学農学部教授）、笹 澤 浩（長野市地方文化財保護審議会委員）
小 林 秀 夫（学識経験者）
同 特別委員 須 田 和 雄（大室古墳群保存会長）
同 調査部会 佐々木憲一（明治大学文学部助教授）
坂城町教育委員会 生涯学習課文化財係 学芸員 時 信 武 史
- 6 調査によって得られた諸資料は、ガイダンス施設「大室古墳館」にて保管している。

凡 例

本書では、遺構確認調査によって得られた諸情報のうち、特に遺構に関する基礎的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 調査は、史跡入口部分(エントランスゾーン)に所在する 24 基の古墳、26～29 号墳・31～33 号墳・235 号墳・237～247 号墳・A～D 号墳・ハ号墳の、墳丘範囲の確認と、改変状況の把握など、整備に必要な諸情報を得ることを目的として実施した。

本書ではこのうち、A 区(243・244 号墳)と E 区(31～33 号墳)を除く、エントランスゾーン B～D 区に位置する 19 基について、その概要を報告するものである。

- 2 古墳の名称は栗林紀道氏の分布調査をもとに長野市教育委員会が命名したものを使用した。なお、A 号墳と B 号墳は明治大学の調査によって新発見された古墳で、それぞれ従来 26A 号墳、26B 号墳と呼称されていたものである。また C 号墳と D 号墳は史跡整備にともなう長野市教育委員会の調査で新発見された古墳で、それぞれ従来 26C 号墳、? 号墳と呼称されていたものである。

- 3 本書には、範囲確認調査において確認したエントランスゾーン B～D 区におけるすべての遺構について掲載したが、出土遺物については掲載していないため、遺物編を後日刊行する予定である。

- 4 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査地における座標北からの真北方向角は約 $0^{\circ} 9' 41''$ であり、また磁北は真北より西へ約 $6^{\circ} 40'$ の偏差がある。

- 5 基準点測量および墳丘トレンチの遺構測量は、平面直角座標系(国家座標)の第Ⅷ系(東経 $138^{\circ} 30' 00''$ 、北緯 $36^{\circ} 00' 00''$)の座標値と日本水準原点の標高を基準としている。墳丘測量および遺構測量の一部は、株式会社フジテックに委託して行った。

- 6 各トレンチの遺構測量は、基準点測量を基に開放トラバースを設定し、現場にて調査員・調査補助員により 1/10 ないしは 1/20 の縮尺で基本原図を作成した。

本書にて掲載している縮尺は基本的に、墳丘測量図 1/150、積石実測図 1/80、調査成果図 1/150、トレンチ個別図 1/60 として統一してある。

- 7 本書で用いる古墳に関する用語のうち、特に左右の表現については、石室の奥壁を背にして入口を向いた表現を基本としている。

また、「積石塚」および「合掌形石室」等の、現在までに学術的な用語規定に関する定義付けが行われていない用語については、本書ではこれまでどおり慣例的な使用にとどめるものとする。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 大室古墳群の概要……………	1	第5節 235号墳……………	54
第1節 地理的環境……………	1	第6節 237号墳……………	59
第2節 大室古墳群の現況……………	4	第7節 238号墳……………	63
第3節 研究略史と調査歴……………	10	第8節 239号墳……………	68
第4節 考古学的環境……………	14	第9節 240号墳……………	74
第Ⅱ章 史跡整備事業の概要……………	25	第10節 241号墳……………	80
第1節 事業の目的……………	25	第11節 242号墳……………	85
第2節 事業の方針……………	26	第12節 245号墳……………	90
第3節 事業の体制……………	28	第13節 246号墳……………	94
第4節 事業の経過……………	30	第14節 247号墳……………	99
第5節 エントランスゾーンの整備概要…	31	第15節 A号墳……………	101
第Ⅲ章 調査成果……………	37	第16節 B号墳……………	105
第1節 調査概要……………	37	第17節 C号墳……………	109
第2節 26号墳……………	41	第18節 D号墳……………	113
第3節 27号墳……………	46	第19節 ハ号墳……………	117
第4節 28・29号墳……………	51	第Ⅳ章 結 語……………	121

写真図版
報告書抄録
奥 付

第 I 章 大室古墳群の概要

第 1 節 地理的環境

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積 738.51km²、人口約 38 万 3 千人、約 14 万 6 千世帯の地方中核都市である（平成 19 年 3 月 1 日現在）。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、通称西山と呼ばれる西側の西部山地、通称河東山地と呼ばれる東側の東部山地に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約 1,000 万～200 万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約 40km、最大幅約 10km、標高 330～360 m である。第四紀中ごろに形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や、千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

大室古墳群は、長野盆地南東の長野市松代町大室地区を中心とした、同町東寺尾から若穂川田に至る山丘地帯に位置する。この山丘地帯は、松代町と若穂との境をなす標高 1,099 m の奇妙山から 3 支脈に分岐している。西側の支脈は標高 781 m の尼巖山から金井山へと至り、中央支脈は大室集落を眼下に見る霞城に至る。東側の支脈は若穂川田との境界にあたる標高 544 m の大星山から関崎へと至る。あたかもリアス式海岸を連想させる複雑な地形であり、山地からの土砂の運搬と山際を流れていた千曲川の浸食作用によるものと考えられる。現在、古墳群の立地する山丘地帯と千曲川との間には、小島田・牧島・大室集落が立地する各自然堤防とその後背湿地が展開しているが、1936（昭和 11）年に刊行された『長野県町村誌』によれば、1742（寛保 2）年 8 月のいわゆる「戊の満水」を契機として千曲川の流路が変わっているという。それ以前は、各集落が立地する自然堤防の南側を派生尾根に沿って蛇行しながら流れており、そのことは地形図・土地利用図からも読みとることができる。金井山の突端に位置する柴集落には、旧流路の痕跡である河跡湖（三日月湖）として金井池が残っており、また旧河道も、各集落が立地する自然堤防側で 1～1.5 m、古墳群の位置する丘陵側で 2.5～3 m の崖高を有して窪んでいる。

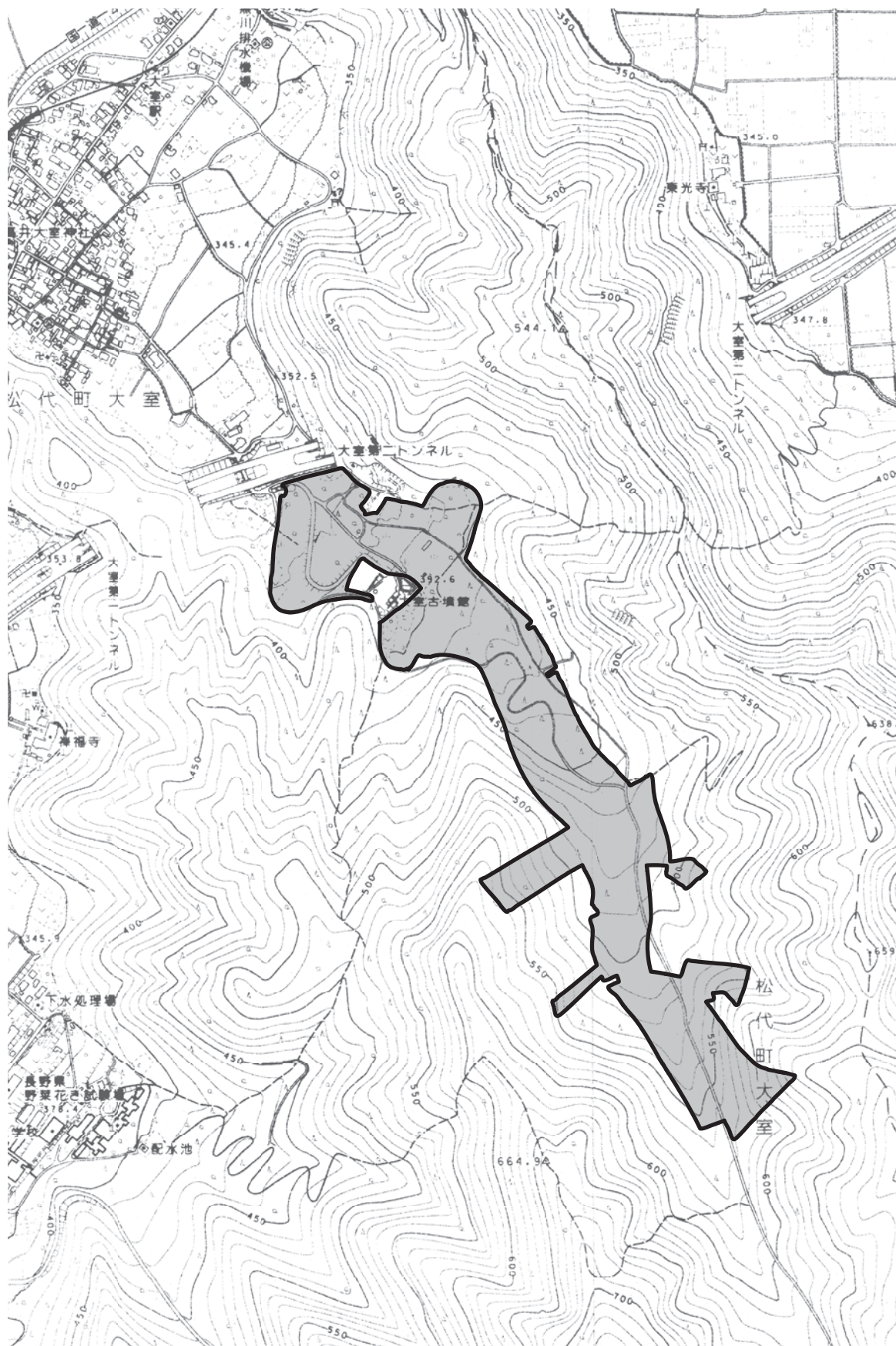
ちなみに小島田・牧島・大室の各集落が立地する自然堤防上には、大規模な集落遺跡が展開していることが発掘調査例の蓄積によって判明しており、原始・古代から日常生活域として選地されていたことを物語っている。大室古墳群は、3 支脈の尾根頂上部とそれにはさまれた 2 つの谷筋の平坦面および斜面に分かれて群集しており、現在の集落および集落遺跡の立地する自然堤防上とは、旧千曲川河道をはさんで対峙する位置関係にある。つまり、日常の生活域とは隔絶した空間を形成しており、こうした地形環境としての特質は、古墳群の形成過程を考えるうえできわめて重要な要因の一つとなろう。

引用・参考文献

和田 博 1993 「松原遺跡周辺の環境」『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第 40 集 長野市教育委員会
長野県町村誌刊行会 1936 『長野県町村誌』北信編
長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第 1 巻 自然編 長野市



図1 調査地位置図 (1/100,000)



この地図は、長野市長の承認を得て長野市発行の 10,000 分の 1 長野市白図を複製したものである。(承認番号 18 都第 252 号)

図 2 史跡指定範囲と周辺地形図 (1/10,000)

第2節 大室古墳群の現況

大室古墳群は、長野市南部の松代町大室に所在する、5世紀前半から8世紀にかけて築造された総数約500基を数える大規模な古墳群である。奇妙山から派生する3つの支脈尾根上とそれにはさまれた2つの谷部に立地し、約2.5km平方の範囲に密集して分布している。

古墳群全体は、分布状況とその地形条件などから大小5つの支群に大別されており、以下支群ごとに概述する。なお、古墳番号などの基本的な情報は、1981（昭和56）年に長野市教育委員会（以下、長野市教委）が発行した『長野・大室古墳群分布調査報告』に基づいている。

大室古墳群の最大の特徴は、石積み墳丘をもつ「積石塚」と、埋葬主体部の天井石を屋根形に架構する「合掌形石室」という特異な埋葬施設の存在であろう。古墳総数約500基のうち約330基が積石塚といわれ、また合掌形石室は約40基ほどが知られている。ただし、慣例的に使用されてきたこれらの用語には、実は明確な定義が存在していないのである。本書では、学術的な用語規定に関しては後に譲るとして、これまでどおり慣例的な使用にとどめるものとする。

1 各支群の概要

1 北山支群（きたやましぐん）

長野市の若穂地区と松代地区の境となる、奇妙山から大星山を経て関崎に至る派生尾根を中心に立地し、総数22基で構成される。

大室集落の北東方約500mの地点、奇妙山から派生する尾根の最突端、標高370～380m付近には5～8・イ号墳の5基が立地している。基本的には直径10m規模の盛土円墳であり、川原石が散乱してる点の特徴である。さらに尾根を上がった標高435～460m付近は扇平と俗称されており、直径10mないしはそれ以下の円墳である9～17・ロ号墳の10基が分布している。

さらに大星山方向の標高490m付近の尾根頂部には18号墳が立地している。1951（昭和26）年に明治大学生が墳丘測量を実施しており、全長56mの前方後円（方？）墳とみられる。大室滝辺山双子塚と称されるこの古墳は18号という番号を冠しているものの、墳丘の規模や形態、若穂側の平地を意識した立地など、大室古墳群とは性格が異なる古墳である可能性が考えられるため、将来的には再考が必要となるだろう。18号墳付近には、19・20号墳という直径15m規模の円墳が立地している。これら尾根上の古墳についてはいずれも埋葬主体部が不明であるが、立地や墳丘規模から竪穴系の小さな埋葬施設が想定されよう。

派生尾根麓の八幡神社付近には、横穴式石室を埋葬主体部とする直径10m規模の1～4号墳が立地している。尾根上の古墳とは明らかに性格が異なっている点、注意を要する。

支 群	古墳の数		古墳の立地		特 徴	
	栗林調査	確認数	谷部・扇状地	山腹・尾根	積石塚	合掌形石室
北山支群	22 基	21 基	2 基	19 基	3 基	0 基
大室谷支群	241 基	224 基	192 基	32 基	176 基	27 基
霞城支群	16 基	13 基	0 基	13 基	5 基	0 基
北谷支群	208 基	179 基	162 基	17 基	138 基	12 基
金井山支群	18 基	17 基	0 基	17 基	2 基	0 基
合 計	505 基	454 基	356 基	98 基	324 基	39 基

表1 大室古墳群の構成（長野市教委 1981 より）

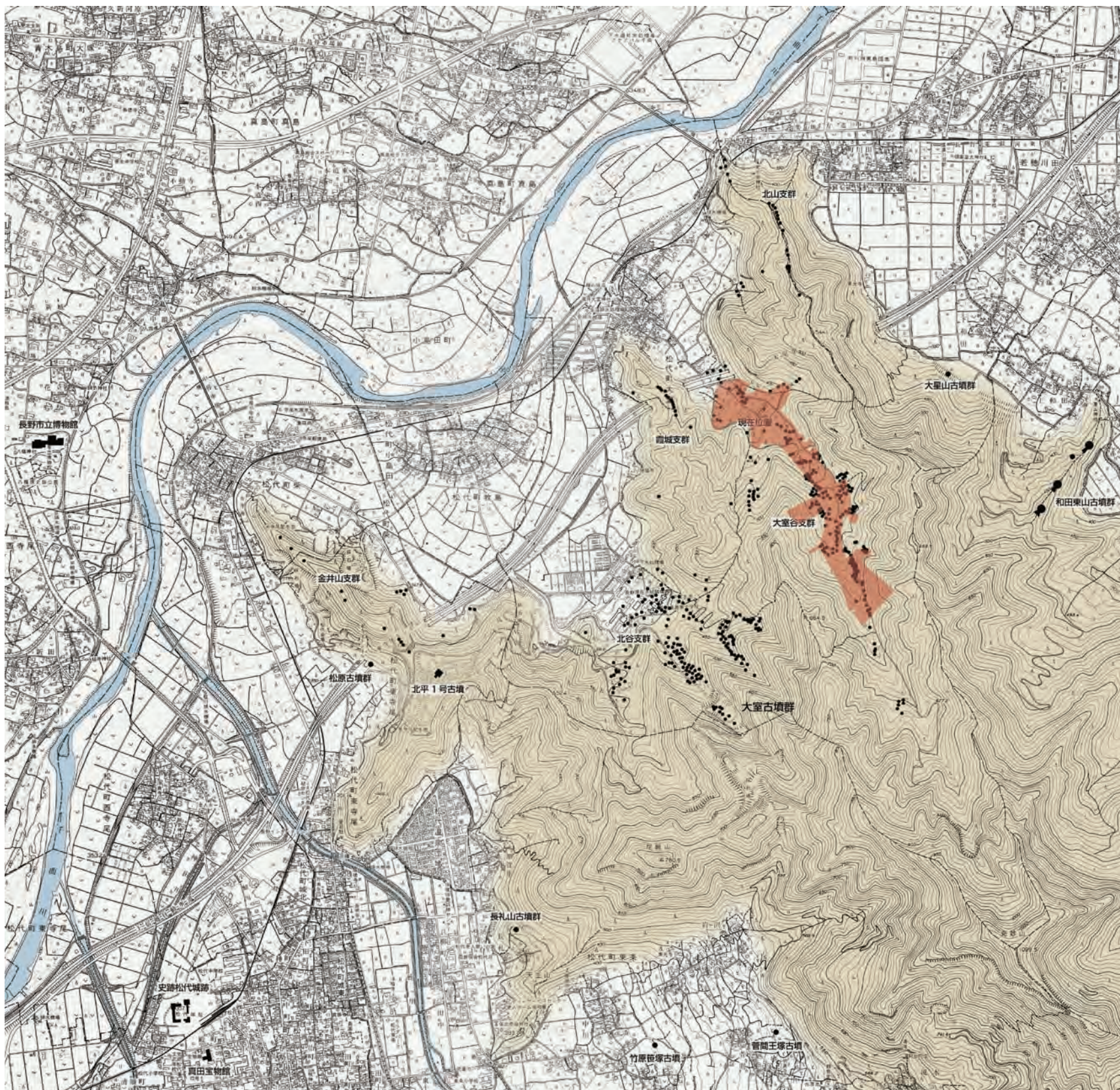


図3 大室古墳群の古墳分布と史跡指定範囲 (1/25,000)

2 大室谷支群（おおむろだにしぐん）

東側の支脈と中央支脈とはさまれた谷部に分布し、古墳数 241 基を数える。古墳の分布範囲は谷入口の標高 360 m から最深部の 660 m 地点までの総延長約 2km に達し、著しく細長い帯状の分布を示している。明治大学考古学研究室による継続的な学術発掘調査や上信越自動車道建設にともなう緊急発掘調査が実施された区域であり、うち 163,043㎡ が国史跡に指定された。

通称清水尻（シミッチリ）と呼ばれている大室谷の最下部にあたる標高 360 ～ 380 m 付近は、村東単位支群としてグルーピングされている緩斜面である。東側に 21 ～ 29、249 号墳の 14 基が、西側には 236 ～ 247 号墳の 13 基が分布している。これらのうち、244 号墳は別に將軍塚とも大塚とも呼ばれ、大室古墳群のなかでは最大規模の横穴式石室が開口している。高さ 8 m を超える腰高な印象を与える墳丘は、大室谷支群への入口にあってシンボリックである。標高 390 ～ 420 m 付近は通称ヨーメと呼ばれ、現在はガイダンス施設の大室古墳館が史跡指定地外に建設されているが、以前は養鶏場による大規模な地形改変が著しい場所であった。北側斜面には鳶岩単位支群として 30 ～ 36 号墳の 6 基が分布している。

ここからさらに谷の奥へは、植林されたスギ林となり鬱蒼とした雰囲気となる。通称ムジナゴロと呼ばれる標高 430 ～ 500 m 付近は、たくさんの積石塚が密集する大室古墳群を代表する地域であり、ムジナゴロ単位支群とされている。特に 168 号墳は別称大平塚とも呼ばれ、合掌形石室が以前より知られている。ここからさらに谷をのぼった標高 480 ～ 495 m 付近の通称八丁ノ沢、標高 510 ～ 535 m 付近は通称丸山と呼ばれ、さらに最奥地となる標高 640 ～ 660 m 付近には 112 ～ 117 号墳の 6 基が分布している。

ヨーメから南へ延びる支谷筋は通称小林と呼ばれており、大石単位支群として 218 ～ 230 号墳の 15 基が分布している。221・225 号墳は尾根上に築かれた積石塚で合掌形石室を内蔵している。

3 霞城支群（かじょうしぐん）

奇妙山から派生する中央支脈先端部の尾根頂部、標高 360 ～ 410 m 付近に分布している。現大室集落にもっとも近い位置にあり、250 ～ 263、472、473 号墳の 16 基の古墳により構成されている。先に指摘した北山支群および金井山支群の立地ときわめて共通しており、おそらく他の特徴も近似していると思われる。なお、中世山城の霞城が構築されたため、一部の地形が大幅に改変されている。

4 北谷支群（きただにしぐん）

大室谷支群とともに古墳密集度の高い地域であり、中央支脈と尼巖山の支脈である金井山（標高 495 m）とはさまれた谷部に位置し、全長約 1km の谷あいには古墳総数 208 基を数える。支群内はさらに、大道東山手地区の扇状地上と、北谷・中谷・臼窪と呼ばれる 3 つの谷に分岐しているが、大室谷支群ほど垂直分布は激しくない。

谷裾部の扇状地上には 266 ～ 430 号墳の 80 基が分布しているが、このうち 1969（昭和 44）年に県農業大学校建設工事に関連する 43 基が調査対象とされ、うち 19 基が現状保存された。北谷には標高 465 ～ 500 m 付近に 286 ～ 347 号墳の 27 基がある。さらに谷奥の東側となる標高 455 ～ 500 m 付近の通称チガヤ窪には、321 ～ 333 号墳の 14 基が分布している。

墳丘の残存状態が良好な古墳が多い中谷には、標高 400 ～ 500 m 付近で、356 ～ 420 号墳の 64 基が分布している。古墳群の分布状態が良好に観察できる場所であるが、谷奥にある採石場へ至る作業道が建設されており、ダンプカーの往来が激しい。このうち、356・357・394・395・396・399 号墳の 6 基が合掌形石室といわれている。臼窪の谷には 437 ～ 453 号墳の 22 基がある。

5 金井山支群（かないやましぐん）

奇妙山から南東～北西方向に派生する金井山の尾根頂部標高 400 ～ 495 m 付近を中心として分布している。近世北国街道谷往還ルートであった鳥打峠周辺を含めて 18 基の古墳により構成されている。

金井山の突端付近には 456 ～ 458 号墳の 3 基が立地し、中世山城が築かれた頂部には 459 ～ 460、455 号墳がある。北山・霞城支群と同様に、尾根上に立地する 3 支群の古墳の多くが盛土墳であることは、共通の特徴として抽出できよう。鳥打峠には 461 ～ 464 号墳の 4 基があり、道沿いに東側に下った標高 370 m 付近には 465 ～ 467 号墳がある。1993（平成 5）年には、鳥打峠線林道改良工事に先立って 466 号墳の緊急発掘調査が長野市埋蔵文化財センター（以下、市埋文センター）によって実施された。

また、北山支群の八幡神社周辺に分布している一群と同様に、金井山の東裾標高 355 ～ 365 m 付近には、468 ～ 471 号墳の 4 基が分布しているが、金井山の裾部は柴石の産地として採石場となっており、地形は大規模に改変されているため、既に湮滅した古墳は相当数あったものと考えられる。

2 大室古墳群の学術的価値

これまでの発掘調査、研究論文など、先学の貴重な研究成果をふまえ、大室古墳群の特徴を抽出するならば、以下の 5 点が挙げられよう。

(1) 約 500 基の古墳が、谷あいなどの狭い範囲に密集していること。

特に大室谷・北谷支群では、集落などの生活域から隔絶された狭く細長い谷間に、それぞれ約 200 基以上の古墳が密集している。それ以前に築造された古墳の多くは、集落などの生活域を望む丘陵や尾根の頂部に位置しており、明らかに立地条件が異なっている。また、総数約 500 基という古墳築造数は、東日本では最大規模の古墳群である。

(2) 積石塚が古墳群内の多くを占めていること。

日本全国にある古墳の総数は 15 ～ 20 万基といわれ、そのうち積石塚は 1,500 ～ 2,000 基程度であり、その割合は 1% にすぎない。そもそも積石塚の定義すら定まっていない現状ではあるが、特異な埋葬形態であることは間違いなくであろう。大室古墳群では、総数約 500 基の古墳のうち約 330 基ほどが積石塚と分類されている。きわめて稀有な存在である積石塚が、これだけ多く密集する古墳群は他に存在しない。

(3) 合掌形石室という特異な埋葬施設が存在すること。

石棺や石室の天井部に、板状の石材を三角形の切妻屋根形に組み合わせて架設した、いわゆる合掌形石室と呼ばれる埋葬施設は、全国で約 60 例ほどしか知られておらず、その多くが長野盆地に集中分布している。しかも約 40 基が大室古墳群内に存在しており他に例をみない。

(4) 馬匹生産や古代大室牧との関連性が考えられること。

長野県は馬具を副葬する古墳の数が多く、全国でもトップクラスである。大室古墳群でも馬具・馬骨・土馬等の遺物が断片的ながら出土しており、馬匹生産に関係する可能性も考えられる。また古墳群の所在する大室という地名が、平安時代に記された『延書式』にある信濃十六牧の一つ「大室牧」と符号することから、大室古墳群の存在が古代官牧の発生に何らかの影響を与えた可能性も考えられる。

(5) 渡来系集団との関連性が考えられること。

上記 4 つの特徴を勘案すれば、前代までの古墳築造の概念とは大きく異なる成立要因を考えることが可能である。また、積石塚と合掌形石室は、朝鮮半島にも類例が検索できることから、渡来系集団との関係を指摘する意

見もある。前代より渡来系集団の存在の痕跡が認められる長野盆地において、馬匹生産に関与する渡来系集団との関連性が強く示唆されるといっても過言ではないだろう。

以上の特徴をふまえ、1997（平成9）年7月28日に大室古墳群の一部が国史跡の指定を受けた際の、文化庁が監修する『月刊文化財』平成7年8月号に掲載された紹介文を引用することで、大室古墳群の学術的価値を位置付けたい。なお、積石塚の数や類例についての当時の数値には、現状と異なる部分があるため注意されたい。

新指定の文化財 大室古墳群

文化庁文化財保護部

大室古墳群は長野市街の南東約6キロメートルに所在し、前方後円墳1基を含む5世紀前半から8世紀にかけて築かれた合計500基以上の古墳からなる。古墳は、千曲川の南側の丘陵から派生する三つの尾根上と、それに挟まれた二つの谷部に立地し、標高は350から700メートル、約2.5キロメートル平方の範囲に分布する。古墳群は、西から金井山、北谷、霞城、大室谷、北山の大小五つの支群に分かれ、さらに各支群は、十数基あるいは数十基の小支群に細分される。今回指定する大室谷支群は、約240基の古墳で構成され、支群としては最大の規模を持ち、発掘調査によってその内容が判明している。

本古墳群は、大規模であることに加えて、二つの大きな特徴をもつことで学界では著明である。その一は、墳丘を石を用いて構築した、いわゆる積石塚が古墳群中の大半を占めていることである。昭和20年以降、栗林紀道が精力的に行った基礎的な分布調査と、昭和45年から長野市が実施した分布調査の結果によると、総数505基の古墳のうち、積石塚は400基以上存在し、特に谷部にある北谷支群、大室谷支群に集中して分布することが明らかとなった。積石塚の墳形は、ほとんどが直径10メートル程度の円墳であるが、長方形墳の形態をとるものも存在する。わが国では極めて稀な存在である積石塚が、これだけ多く密集する古墳群は国内では他に存在しない。

その二は、埋葬施設として横穴式石室あるいは箱式石棺が主体をなす本古墳群の積石塚のなかに、合掌形石室と呼ぶ特異な構造を備えたものが存在することである。石棺・石室の天井部に板状の石を三角形の切妻屋根型に組み合わせて架設した合掌形石室は、全国で40例ほどしか知られておらず、1基を除くすべてが長野県の善光寺平に分布する。しかも25基が大室古墳群に集中している。

昭和59年から、明治大学考古学研究室は、特に大室谷支群を調査対象区域として、約30基の古墳の発掘・測量調査を実施してきた。その結果から、各小支群には合掌形石室をもつ古墳が1基から2基含まれると推定されている。また、出土遺物の検討からは、合掌形石室墳の築造は5世紀の中葉には始まっており、小支群を構成する古墳のなかでは、最初に採用された墳墓形態であることも明らかになった。

出土遺物は、土師器・須恵器・珠文鏡・短甲・馬具・鉄鏃・刀子・玉類・馬骨等で、なかでも馬具が多いことは本古墳群の特色といえる。馬骨は頭骨のみであり、横穴式石室の前庭部に多量の土師器・須恵器と共に土坑に埋納されていた。

このように、大室古墳群は日本最大の積石塚古墳群として重要である。また、積石塚は高句麗の墓制と、特徴的な合掌形石室は百済の墓制との関係を指摘する意見もある。

さらに、馬具・馬骨等の馬に関係する出土遺物が多いことは、本古墳群の被葬者が古代の馬匹生産に深く関わっていたことを示唆し、『延書式』にある信濃十六牧のひとつ「大室牧」の存在とも符合するとともに、古代の官牧の発生に関しても貴重な資料を提供した。よって、史跡に指定し、その保存を図ろうとするものである。

第3節 研究略史と調査歴

1 これまでの調査歴

大室古墳群に関する記述は、古く江戸時代まで遡るが、学術研究の題材としては明治時代から登場する。明治政府のお雇い外国人であったウィリアム・ゴerland（William Gowland）は、在日中の16年間にわたり日本全国の横穴式石室を踏査し、帰国後の1897（明治30）年にイギリスの学術雑誌に研究論文を発表している。その中で3基の石室データが掲載されているが、残念ながら日本人の目に触れることはほとんどなかった。国内における本格的な研究は、1949（昭和24）年以降の栗林紀道氏による分布調査に始まるといってよいだろう。寺尾中学校の生徒たちとの地道な踏査により、1952（昭和27）年の冬までに501基の古墳が確認されたのである。以来、明治大学後藤守一教授の指導による発掘および測量調査や、北谷支群においては長野県農業大学校等建設工事にともなう緊急発掘調査も行われた。長野市教委が実施した詳細分布調査は、その実働を駒澤大学倉田芳朗教授に依頼し、同大学考古学研究室の学生諸氏によって、454基が確認された。その後、明治大学大塚初重教授による発掘調査や、上信越自動車道建設工事および林道鳥打峠線道路改良工事に先立つ緊急発掘調査が実施され、1997（平成9）年に国史跡に指定された翌年からは、史跡整備事業にともなう発掘調査が開始されたのである。

過去に大室古墳群を取りあげた議論の多くは、特徴的な積石塚や合掌形石室の類例が朝鮮半島に存在すること、平安時代初期の文献である『延喜式』に「大室」「高井」といった官牧の記載があることなどから、馬匹生産に従事した渡来人たちの墓制であるとの被葬者論争が主であった。また、各古墳の築造時期も8世紀代ないしは遡っても7世紀後半とみられていたようである。

現存する古墳のほとんどが盗掘を受けているものの、約500基のうち、記録が残っていない過去の調査を含めてこれまでに約100基が発掘され、徐々にその実態が解明されてきている。例えば、約500基の古墳の多くが横穴式石室を主体部にもつ後期古墳であることや、石積み墳丘と合掌形天井を有する埋葬主体部がセットとなる古墳が5世紀の中ごろまで遡る可能性をもつことなど、地道な調査の成果が蓄積しつつある。以下、特に調査の経緯について年表形式でまとめるが、他にも論文等に記載された例は枚挙に暇がない。

（18世紀前半）	『つちくれかゝみ』（落合保著）に記述あり。
（慶応年間）	『松栄風土記』（寸竜著）に「大室に100有余の塚穴ありて、中には曲りたるものあり」という記述がみられる。
（明治10）年代	このころに William Gowland が調査におもむいたか？
（明治20）年代	このころ、塚掘六兵衛に代表される古墳の盗掘が頻発する。
1897（明治30）年	William Gowland が雑誌『Archaeologia』に「日本の古墳とその築造者達」を発表。
（大正初め頃）	大室史蹟保存会が発足する。
1916（大正5）年	皆神山山麓参考館に大室古墳群からの出土品が陳列される。
1923（大正12）年	埴科教育会による43号墳の発掘。
1924（大正13）年	埴科教育会により、2基の発掘と、289基に番号杭の設置が行われる。またこの年の9月17日に長野県史跡に指定されるが、1965（昭和40）年に失効。
1926（大正15）年	大室史蹟保存会・大室青年会による265基の分布調査。
1929（昭和4）年	『松代町史』に大平喜間多氏の記載。

1949（昭和24）年～	栗林紀道氏による分布調査。501基を確認。
1951（昭和26）年	明治大学後藤守一教授の指導の下、地元寺尾中学校を中心とした調査。107・358号墳を発掘するなど、計16基を調査している。
1965（昭和40）年	大室区に古墳監視委員会が発足する。
1968（昭和43）年	文化庁亀井調査官が現地視察し、国史跡の重要候補と指示される。
1969（昭和44）年～	長野県農業大学校等建設工事に先立つ北谷支群の緊急発掘調査。
1970（昭和45）年～	長野市教委の依頼による駒澤大学の分布調査で、1972（昭和47）年までに505基が数えられ、不明なものを除くと454基が確認された。
1976（昭和51）年	文化庁稲田調査官が現地視察。
1981（昭和56）年	地元で大室古墳群保存会が発足する。
1984（昭和59）年	大塚初重教授を中心とした明治大学による調査が始まる。以降、1996（平成8）年の14次調査まで、32基の古墳が対象となった。
1989（平成元）年～	長野県教委による上信越自動車道建設工事に先立つ緊急発掘調査。翌年までに21・22・23・24・25・ニ号墳の6基が調査され、23号墳のみ移築復元された。
1993（平成5）年	鳥打峠線林道改良工事に先立ち、金井山支群の466号墳が市埋文センターにより緊急発掘調査された。
1995（平成7）年	大室谷支群が市史跡に指定される。
1997（平成9）年	大室谷支群の約16haが、国史跡に指定される。
1998（平成10）年	長野市教委による史跡整備にともなう遺構確認調査が開始される。

2 明治大学による学術発掘調査

1951（昭和26）年、明治大学後藤守一教授の指導の下、寺尾中学校が中心となって大室谷支群107号墳と北谷支群358号墳の2基が発掘調査され、他に16基の古墳について墳丘測量と石室実測が行われた。調査には大室古墳保存会・寺尾村青年団員・学校職員・村民有志、そして明治大学生が参加し、調査中の夜には後藤教授による講演会も開催されている。

この調査にも参加した大塚初重教授を中心とする明治大学考古学研究室では、東国における積石塚古墳群の歴史的性格を追及する研究活動の一環として、1984（昭和59）年度から大室古墳群の発掘調査に着手した。調査はその後小林三郎教授に引き継がれ、文部省科学研究費および明治大学人文科学研究所研究費の助成と、長野市教委の協力を受け、1996（平成8）年度に至るまで、第1～14次にわたって継続された。

1984（昭和59）年度は主に村東単位支群を調査し、1985（昭和60）年度から1987（昭和62）年度にかけては大石単位支群、1988（昭和63）年度から1996（平成8）年度には、ムジナゴーロ単位支群の調査が行われ、対象古墳32基、延べ44基の古墳が調査された。うち、ムジナゴーロ単位支群以外は発掘調査報告書が刊行されている。

3 開発行為に先立つ緊急発掘調査

大室古墳群ではこれまで、開発行為にともなう緊急発掘調査が3回実施されている。学史的にも古くから注目され学術的評価の高い大室古墳群にあって、その保護協議には細心の注意が必要である。実際、長野県農業試験場用地内の調査報告書には、困難を極めた保護協議の状況がづづられている。3回と数こそ少ないとはいえ、開

発行為を起因とする記録保存の後、滅失した古墳も存在するのである。

(1) 長野県農事試験場等用地内の緊急発掘調査

長野県農業試験場（長野県農業大学校等）の移転候補地として大室が内定したのは1967（昭和42）年頃で、その後長野県農政部や農協中央会などの開発側と長野県教育委員会（以下、県教委）との間で、開発偏重の時代背景のなか担当者の苦労がうかがえる保護協議が重ねられた。長野県考古学会会長藤森栄一を会長とする大室古

調査	年度	単位支群	古墳名	調査内容	報告書
第1次	1984年 昭和59年	村東	23号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			26号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			239号墳	墳丘測量・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			240号墳	墳丘測量・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			243号墳	墳丘測量・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			244号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			ニ号墳	墳丘測量・石室実測	刊行済（Ⅰ）
第2次	1984年 昭和59年	村東	244号墳	発掘	刊行済（Ⅰ）
		大石	248号墳	墳丘測量・石室実測	刊行済（Ⅰ）
			220号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅱ）
第3次	1985年 昭和60年	大石	222号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅱ）
			224号墳	墳丘測量・積石実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
			225号墳	墳丘測量・積石実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
			227号墳	墳丘測量・積石実測	刊行済（Ⅱ）
第4次	1986年 昭和61年	大石	221号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	刊行済（Ⅱ）
			226号墳	墳丘測量・積石実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
			227号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
第5次	1987年 昭和62年	大石	222号墳	発掘	刊行済（Ⅱ）
			223号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
			224号墳	石室実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
			230号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測・発掘	刊行済（Ⅱ）
第6次	1988年 昭和63年	ムジナゴーロ	196号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			197号墳	墳丘測量・積石実測	整理中
			198号墳	石室実測	整理中
第7次	1989年 平成元年	ムジナゴーロ	186号墳	積石実測・発掘	整理中
			189号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			195号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			195-A号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			195-B号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
第8次	1990年 平成2年	ムジナゴーロ	185号墳	積石実測・発掘	整理中
			186号墳	石室実測	整理中
第9次	1991年 平成3年	ムジナゴーロ	200号墳	積石実測・石室実測	整理中
			201号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
第10次	1992年 平成4年	ムジナゴーロ	200号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			201号墳	石室実測・発掘	整理中
第11次	1993年 平成5年	ムジナゴーロ	168号墳	墳丘測量	整理中
第12次	1994年 平成6年	ムジナゴーロ	168号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
第13次	1995年 平成7年	ムジナゴーロ	155号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測	整理中
			156号墳	グリット設定	整理中
			165号墳	墳丘測量・積石実測・石室実測・発掘	整理中
			168号墳	測量・積石実測・発掘	整理中
第14次	1996年 平成8年	ムジナゴーロ	155号墳	石室実測・発掘	整理中
			156号墳	積石実測・石室実測・発掘	整理中
			165号墳	石室実測・発掘	整理中
	延べ調査古墳数		44基		
	実質調査古墳数		32基		

表中（Ⅰ）…大塚初重・小林三郎・石川日出志編 1993 『信濃大室積石塚古墳の研究Ⅰ—大室古墳群・村東単位支群の調査—』東京堂出版

表中（Ⅱ）…大塚初重・小林三郎編 2006 『信濃大室積石塚古墳の研究Ⅱ—大室谷支群・大石単位支群の調査—』東京堂出版

表2 明治大学の発掘調査歴

墳群調査会が組織され、大室古墳群発掘調査団の団長には米山一政氏、副団長に倉田芳朗氏が就任した。実際の調査は1969（昭和44）年12月8～26日に実施され、駒澤大学関係者のみによる第2次調査が翌年の2月21日～3月3日に実施された。

約23haの用地内には、調査最終時に43基の古墳ないしは石積みが確認され、そのうち現状保存された古墳は275、276、348～350、353、354、412、415、427、430、433、434、437、ツ、A～D号墳の19基、記録保存された古墳は351、419、425、429、435、436、438号墳の7基、調査の結果古墳ではないと判断された石積みは279、280、413、414、416～418、420～424、426、428、431、432、E号墳、他の18箇所である。

この調査で現状保存された425号墳は、畑地耕作により墳丘の1/3が削平されていたため、石室の構築や墳丘の積み上げに深く関与する、石室の裏込め控え積みや内回り石積み列が観察され、積石塚の墳丘構造研究に大きな影響を与えている。

（2）上信越自動車道建設にともなう緊急発掘調査

1988（昭和63）に上信越自動車道建設の具体的な計画が示され、その範囲内に存在する21～25、二号墳の6基に関する記録保存のための発掘調査が、県教委より明治大学考古学研究室に委託された。新規に発見された古墳（SM-04）と土坑（SK-88）および古墳時代以外の遺構、すなわち村東山手遺跡としての調査は、財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）にて実施されている。また、墳丘が失われ主体部のみ石垣に組み込まれた状態の249号墳も、調査区外であったが明治大学によって測量調査が実施された。

発掘調査は1989（平成元）年に1次調査、1990（平成2）年に2次調査が実施され、築造時期として25号墳が6世紀後半、ニ・23号墳が7世紀前半、24号墳が6世紀後半～7世紀中頃、21号墳が7世紀中頃～後半と推定された。また、24号墳とSM-04から8世紀前半の須恵器が出土しており、奈良時代までの追葬あるいは石室の再利用が推定されている。

また、地元大室古墳群保存会から要望のあった古墳の移築保存について、記録保存後に破壊される6基のうち遺存状態のよい23号墳のみ対象となり、1989（平成元）年に日本道路公団より長野市が事業を受託し、石室の解体から移築、復元まで長野市立博物館が担当して、現史跡指定地内である244号墳の隣接地に移築復元された。

（3）鳥打峠線林道改良事業にともなう緊急発掘調査

高速道路関連事業として浮上した林道鳥打峠線改良事業は、現在の林道を拡幅し、傾斜を整えるものであったが、金井山支群の466号墳が拡幅部分に該当したため、1993（平成5）年に市埋文センターが緊急発掘調査を実施した。隣接する467号墳は予定区域からはずれているため現状保存されている。

小さな尾根上の突端部に位置し、近世鳥打峠開削にともない半壊状態となったらしく、墳丘は古墳の形状をとどめない。おそらく土石混合の盛土に外表面を角礫で被覆した石積み墳丘の古墳と考えられる。横穴式石室は左側壁の平石状の基底石のみ残存し、玄室内は縦積み、羨道部は横積みである。石室内からの出土遺物には7世紀末から8世紀初頭にかけての土師器・須恵器や、勾玉1・切子玉2・管玉2・白玉小玉多数、馬具の飾金具や鉄製品などがある。

第4節 考古学的環境

大室古墳群の所在する長野市松代町大室地区周辺の遺跡分布状況について時代別に概観し、後に大室古墳群との関連性が考慮できる古墳と集落遺跡について特記する。

縄文時代以前

大室谷の縁辺部の村東山手地籍には、縄文時代の集落遺跡である村東山手遺跡が存在する。高速道路建設に先立つ発掘調査では、縄文時代中期の敷石住居跡などが発見され、一帯ではこの時期の遺物が多く採集されている。さらに先土器時代石器も大室谷の上部の宮ノ入地籍で採集されており、縄文時代以前より大室谷が人々の生活の場として利用されていたことがうかがえる。尾根を隔てた保科川扇状地には、縄文時代中期末から晩期にいたる宮崎遺跡が存在している。特にサメ椎骨製耳飾りとトレンチ内から出土した銚頭は、海岸部の人々との交流を物語る重要な資料である。

弥生時代

古墳群前面の千曲川沿い自然堤防上に大室遺跡があるが、発掘調査されていないため詳細は不明である。千曲川の後背湿地における水田開発とその経営にともなって、榎田遺跡や松原遺跡・四ツ屋遺跡など、自然堤防上に大規模な集落遺跡が発達する。特に弥生時代中期の松原遺跡では、単なる集落ではなく流通機能をもった「市」としての性格も併せ持っていたと考えられている。3世紀後半に比定されている北平1号墳は、主軸長14mを測る前方部が未発達な前方後方形の墳丘墓で、主体部からは東海系のひさご壺と在地の櫛描文系土器（御屋敷段階）とが共伴する出土例を提供している。

古墳時代

長野盆地では4世紀から5世紀前半にかけて、盆地を見下ろす山丘尾根上に集中して前方後円墳が築造される。南西部では千曲市の森將軍塚古墳や市内の川柳將軍塚古墳などの大型の前方後円墳がそれぞれ分布し、また南東部の若穂地域にも和田東山古墳群が築かれる。5世紀から6世紀にかけては、積石塚や合掌形石室の登場に代表される、新たな古墳築造の動きが発生する。大室古墳群の成立は、まさにこの動きのなかで発露したものであろう。6世紀後半以降、松代・若穂地区の諸扇状地には、長原古墳群をはじめとした多くの中小規模な古墳群が形成される。長野盆地ではこれまで、古墳時代中～後期の大規模な集落は確認されていなかったが、榎田遺跡において該期の住居跡500軒以上が検出され、また川田条里遺跡では小区画水田跡が発見されており、資料が蓄積しつつある。

奈良・平安時代

千曲川自然堤防上の松原遺跡・高野遺跡・南条遺跡などで、平安時代を中心に大規模な集落遺跡が調査されている。千曲川上流にあたる屋代遺跡では7世紀第3四半期から8世紀の前半の木簡が出土している。また川中島扇状地上の南宮遺跡では、10～11世紀を中心におよそ1,000軒以上の住居跡が調査され、『和名類聚砂』記載の斗女郷の中心地と推定されている。

中・近世

中世期における山城の構築は、大室周辺にも著しい。派生尾根上に立地する古墳群とほぼ範囲を同じくする、霞城・金井山城などは古墳を破壊して山城が築かれている。松代町の中心地である城下町は、1553（天文22）年頃に海津城が築城され始めた頃から人口の流入が著しくなり、1622（元和8）年に松代藩初代藩主となる真田信之（1566～1658）が松代に移封された頃には、松代藩の政治的拠点として整備されたものと考えられる。

1 古 墳

6 八丁鎧塚 1・2 号墳 [須坂市教委 2000]

須坂市大字八町字鎧塚に所在する積石塚古墳群である。鮎川が形成した扇状地の扇頂部である鮎川右岸の段丘縁辺に立地している。鮎川扇状地には、鮎川古墳群・鎧塚古墳群・塚の越古墳群・天神古墳群など計 43 基の古墳があり、その多くが積石塚と考えられている。1965（昭和 40）年に 1・2 号墳が長野県史跡に指定され、1994（平成 6）年に史跡整備にともなう発掘調査が実施された。1・2 号墳ともに鮎川の川原石を高く積みあげ、直径 25.5 m・高さ 3.5 m を測る同じ規模・構造をもった双子のような円墳である。築造時期は 1 号墳で 4 世紀後半、2 号墳は 5 世紀後半とみられている。1957（昭和 32）年の埋葬施設の発掘では、1 号墳から南海産の貝でつくられた貝釧、2 号墳からは鍍銀銅製獅頭文鍔板が発見された。特に鍔板は、大韓民国忠清南道公州市の宋山里 2 号墳出土例と近似していたことから、石積み墳丘であることと併せて関連づけられ、積石塚の系譜論に大きな影響を与えてきた。

7 和田東山古墳群 [長野市教委 1995]

長野市若穂保科の扇状地をのぞむ奇妙山からの派生尾根上に立地する古墳群である。1984（昭和 59）年に長野市教委によって前方後円墳 3 基と円墳 2 基が確認された古墳群で、1990（平成 2）年からの 2 年間で明治大学による墳丘測量調査が実施された。標高 414 m 付近に位置する 1 号墳は全長 38 m、標高 447 m 付近に立地する 3 号墳は全長 46 m、標高 472 m 付近に位置する 4 号墳は全長 43 m を測る。長野市教委により明治大学を中心とする調査団が結成され、1992（平成 4）年から 1994（平成 6）年までの 3 年間、3 号墳の発掘調査が実施された。墳丘トレンチからは多量の円筒埴輪片が出土し、後円部からは主体部直上にて壺・高杯・器台などの土器片が出土している。埋葬主体部は未盗掘の竪穴式石室で、天井石が架構されておらず、木材による天井蓋の可能性が指摘できる。内部より倣製内行花文鏡 1、大刀 1、鉄剣 1、鉄槍 3、鉄鏃 19、やりがんな 2、鉄斧 2、砥石 1、ガラス小玉 40、管玉 8 が出土している。3 号墳の築造時期は、出土遺物から当地域における古墳出現期に遡る可能性が指摘されており、1 号墳はそれに先行、4 号墳が後続するものと推定されている。

8 大星山古墳群 [県埋文センター 1996]

長野市若穂川田地区に所在した大星山古墳群は、高速道路建設にともなう土取り造成に先立ち、県埋文センターにより発掘調査された、円墳 1 基、方墳 3 基の古墳群である。大室古墳群とは尾根の反対側に位置する東側の派生尾根上に立地し、直下の水田面からは約 40 m の比高差がある。4 世紀第 3 四半期の 3 号墳に始まり、4 世紀第 4 四半期の 1 号墳、5 世紀初頭の 4 号墳、5 世紀第 2 四半期の 2 号墳の順に築造されたことが発掘調査により判明している。このうち 4 号墳は、尾根上に並んだ他 3 基とは若干離れた山腹に位置し、また唯一の石積み墳丘である。埋葬主体部である竪穴式石槨は地山掘り込みによって構築され、斜面下方側には比較的大型の石材が一行に配されている。合掌形石室が 3 号墳南裾の附属埋葬施設と 2 号墳の埋葬主体部に認められ、特に 2 号墳は箱形石棺状の基部構造上天井部が一部残存しており、小形の板石を何枚も持ち送り状に重ねて切妻屋根形にしていることが想定されている。

9 長原古墳群 [長野市教委 1968]

長野市若穂保科地区の、保科川扇状地の扇端部に立地する積石塚古墳群である。もともと保科川扇状地には 70 基近くの古墳があったといわれているが、現在は 5～6 基から 10 基ほどのまとまりで長原古墳群・白塚古墳群などが残存しているにすぎない。若穂団地造成工事に先立って実施された 1967（昭和 42）年の発掘調査は、長原古墳群の範囲ほぼすべてが発掘された。直径 10 m、高さ 2～3 m 前後の積石塚円墳が主体で、報告書によ

ると土は全く用いられず石塊のみで積み上げられているという。埋葬主体部はすべて横穴式石室とみられており、築造時期は7世紀中頃以降、そして8世紀後半ごろまで追葬されていたものと考えられている。直径12 m規模の7号墳からは須恵器の平底細頸壺が出土しており、形態のみ着目すれば朝鮮半島の百濟地域で出土する瓶形土器を想起させる。現在は1・7・10・14・16号墳の5基が団地内の公園などに現状保存されている。

長原古墳群の消滅した古墳のなかにはニカゴ塚がある。金鎧山古墳の報文の中で略測図が示されており、2基併設された埋葬施設の内の1基である。写真を見る限り、長側壁として大型の板石をおそらく縦位に立て、天井石はその上端に載せられており、形態的には韓国公州市の柿木洞1号墳例が類似するかもしれない。石室は大きくはないが、横穴式石室ないしは横口式石槨状を呈する可能性が考えられる。

10 北平1号墳 [県埋文センター 1996]

1991（平成3）年に上信越自動車道建設の際の土取り場として、県埋文センターにより緊急発掘調査された古墳である。尼厳山系から北行する尾根支脈の頂部に位置し、松原遺跡のある千曲川沖積地との比高差は150 mある。主軸長14 mを測る前方部が未発達な前方後方形墳丘墓で、単独墓である。埋葬主体部としては2基の石槨状石積みが発見され、小口痕から箱形の木棺が想定されている。土器は棺内に落ち込むような状況で出土し、東海系のひさご壺が在地の櫛描文系土器（御屋敷段階）と相伴していた。また墓壇構築面からは数点のガラス小玉が出土している。報告者は3世紀後半に比定している。

11 松原1号墳 [県埋文センター 2000a]

1991（平成3）年に上信越自動車道のトンネル入口部にて県埋文センターにより発掘調査された後期円墳である。北平1号墳のある尾根支脈からさらに北西にのびる金井山山麓の西側急斜面、標高360 m付近に位置し、調査区外にもう1基存在するらしい。急斜面のため、墳丘盛土と横穴式石室の天井石と羨道部を流失していた。山側斜面を切土して平坦面を造成し、直径約13 mの外護列石を配置している。列石は2重で、さらに石室につながる内廻り石列が構築されている。現存する石室玄室の規模は全長3.9 m、最大幅2 mでやや胴張り傾向である。床面は拳大の角礫を敷いてあり、下部には石組みの排水溝が設置されている。石室床面から金環・銀環・勾玉・管玉・ガラス小玉・直刀・轡・鉄鏃などの遺物とともに7体分の人骨も発見された。墳丘裾部からは須恵器の大甕、土師器の高杯が出土しており、7世紀前半の築造時期が推定されている。

12 長礼山2号墳 [長野市教委 1981b]

1974（昭和49）年に採石業者からの通報により発見された古墳で、急遽長野市教委が2号墳を緊急発掘調査している。直径20 mの盛土墳で竪穴式石室と考えられる1号墳と、古墳か否か不明な3号墳は現状保存された。急峻な尼厳山の南西尾根の緩斜面、標高395 m付近の山腹に築造されており、水田域との比高差は約40 mである。直径16.6 mの円墳で一見積石塚を思わせる葺石で覆われている。円筒、朝顔形埴輪は墳丘全面から出土しているが、墳頂部墓壇付近からは土偶状・動物・水鳥・堅魚木のある家形・盾形などの形象埴輪も出土している。円筒埴輪は、外面調整はタテハケの後B d種ヨコハケで、窖窯焼成と考えられることから川西編年Ⅳ期に相当する資料である。埋葬主体部は全長5.15 m、幅4.2 mの隅丸方形墓壇の中に組合式箱形石棺が構築されている。全長1.9 m、幅45～58 cm、床面までの深さ約40 cmを測り、等高線に対し平行に主軸をもつ。扁平で大きい天井石2枚の裏側は赤色塗彩されていた。石棺内からは金製釧2点と鉄鏃1点のみが出土している。築造年代は5世紀後半に求められている。

13 菅間王塚古墳 [長野市誌 2003]

奇妙山と尼厳山の山麓、松代町東条の西向き斜面に所在する、長野県最大規模を誇る直径34 m、高さ6.7 mの、石塊のみで積み上げられた積石塚である。埋葬主体部は正式な調査を経ず、また情報も交錯しており



図 4 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

不明としかいえないが、墳頂表面に横穴式石室と思われる埋葬施設が露出している。写真も図も存在しないが、墳丘表面から約1.2 m下に赤色塗彩された合掌形石室があるといわれており、長側壁に左右4枚、短側壁に2枚ずつの厚みのある板石を並べて基部とし、天井石として長側壁側3枚、短側壁側2枚ずつの板石を内傾させて立てかけ寄棟屋根形に組み合わせているようである。1965（昭和40）年に長野県史跡に指定された。

隣接して山手側にはほぼ同規模の古墳が1基あり、他にも周辺には、菅間1～4号古墳・下岩沢古墳・熊の沢古墳・瀬関古墳・寄塚古墳など、多くの古墳の名前が『遺跡地名表』には記載されているが、現存する古墳は数基のみである。

14 竹原笹塚古墳 [長野市誌 2003、松尾 1987]

菅間王塚古墳と同じ南西麓斜面に立地する直径26 m、高さ3.6 mの円墳で、現状で視認できる範囲では土石混合墳丘である。おそらく西前山古墳と同様な墳丘構造をもつものと推測できる。埋葬主体部は、合掌形の天井構造をもち、一部破壊され積み直されているものの羨道が残存する横穴式石室で、赤色塗彩の痕跡が認められ、合掌形石室としては最大規模である。玄室の長側壁は厚さ30cm程度の石材を1～2段に横長に据えて天井石の基部とし、右側壁から4枚、左側壁から3枚、羨道部の側壁にも左右1枚ずつの板石を内傾させ合掌屋根形に組み合わせている。奥壁の鏡石も若干ではあるが内傾させており、破壊された羨道部の閉塞状況によっては寄棟屋根形となる可能性がある。羨道から玄室へは框石を境として一段下がる、いわゆる上がり框の構造をもち、框石と奥壁鏡石の基台の高さが同じレベルである。伝出土遺物として馬具の轡1・雲珠1・鉸具2や鉄鏃が知られており、これらから6世紀中頃の年代観が推測されている。1967（昭和42）年に長野市史跡に指定された。

15 西前山古墳 [長野市教委 1998a]

長野県長野市松代町東条字前山の、溶岩ドームの独立山塊である皆神山北麓の傾斜変換地に立地している。市埋文センターにより1997（平成9）年に新たに発見された古墳で、一部緊急発掘調査後に削られたものの多くが現状保存された。墳丘は大規模に改変されていたが、長径24 m・短径22.4 mの楕円形で、現存高6 mを測る。多くが現状保存されたために墳丘内部の構造は不明であるが、急傾斜を利用した造成作業により主体部構築のための平坦面を造り出し、斜面下方側の墳端には大型の石材を配置して、掌大から人頭大の輝石安山岩のみを厚く積み上げたものと考えられる。菅間王塚古墳と同様の構造を持つものと推測できよう。墳丘上には円筒・人物・家形等の埴輪が樹立し、山側の墳裾には幅2 m・深さ50cmの周溝状の区画溝が掘られていた。墳丘中心に位置する埋葬主体部は、腰石を立て上部を小口積みにする横穴式石室であり、おそらく善光寺平における初現的な横穴式石室の一つと考えられる。また隣接して横穴式石室の床面状遺構も確認されている。出土遺物には土師器・須恵器、鉄鏃・刀子、鉸具・飾金具、耳環・白玉・管玉・土玉等があり、遺物の示す年代は6世紀後半から7世紀初頭であるが、築造はさらに遡るものと考えられる。周囲には屋地古墳群3基が存在する。

16 桑根井空塚古墳 [長野市誌 2003]

松代町豊栄の桑根井集落のある扇状地上に立地する古墳で、現在は墓地として利用されているため原形を損ねているが、直径17 m、高さ3.4 mの土石混合墳丘の円墳である。合掌形天井の横穴式石室が南に開口しており、全長6.1 m、玄室長4.2 m、幅1.5 mの長方形で、玄室の規模は竹原笹塚古墳より小さい。羨道入口の残存状態は良好であり、両側壁として板石を横長に立てかけた80cmほどの横口状を呈している。玄室側壁は厚さ80cm程度の石塊を並べて石室基底石とし、右側壁からは4枚、左側壁からは3枚、羨道に左右1枚ずつの板石を縦長に組み合わせて合掌形にし、奥壁も若干内傾させている。竹原笹塚古墳同様、羨道から玄室へは上がり框の構造となっているが、奥壁鏡石の基台の高さより框石の高さが若干低い。1924（大正13）年に瑠璃製勾玉1・

碧玉製管玉1・糸切り底の須恵器1個の出土を『松代町史』[松代町役場 1929]は伝えるが現在行方不明である。1965（昭和 40）年に長野県史跡に指定された。

17 桑根井鎧塚古墳群 [長野市教委 1997]

桑根井空塚古墳と同じ扇状地上に立地する古墳群で、1996（平成 8）年に長野南農協による宅地造成事業にともない市埋文センターが発掘調査した古墳群である。開発予定地内には古墳 5 基とヤックラ 6 基が存在したが、保護協議の結果保存状態の良い 3 基は公園内に取り込んで現状保存することになり、このうち第 1 期造成分として仮 4 号墳の全面発掘調査と仮 1 号墳の保存にともなう破壊範囲の確認調査を実施した。全壊の仮 5 号墳は石室構築材が散乱する程度の痕跡のみで、外護列石などの検出も不可能であった。仮 4 号墳は全壊寸前の横穴式石室で、側壁基底石の一部が残存していたにすぎない。直径 8 m 前後の円墳と推定する。仮 1 号墳でも横穴式石室の入口を確認し、外護列石・内廻り石垣列を検出した。直径 15 m、現存高 2 m の積石塚状を呈する円墳である。両古墳とも出土遺物は 7 世紀末から 8 世紀初頭の土師器・須恵器の土器類のみで、埴輪や鉄製品などは出土していない。現状保存する仮 1 号古墳は土嚢・保護シートなどによって埋め戻し、積石墳丘を良質土と芝で覆い公園内の築山として保存してある。

この他、皆神山周辺には数多くの古墳が知られている。現在は完全に削平され痕跡すらとどめていないが、直径 18 m の積石塚とされている**観音塚古墳（18）**は、当時の土地所有者柳沢伝治氏により 1875（明治 8）年に発掘され、六鈴鏡 1・勾玉 8・切子玉 3・耳環 9・丸玉 7・ガラス小玉 20・鉄鐔 1・鉄鏃 12・雲珠 1・辻金具 3・轡 1・甲冑破片数片などが出土したらしい。牧内集落内の畑地内にある**牧内 1 号墳（19）**は、直径 13 m・高さ 3.5 m の円墳で、横穴式石室が南に開口している。石室は全長 6.6 m・幅 1.75 m・高さ 2.2 m を測る狭長な短冊形であり、石室内の天井は奥壁側が一段低くなっている。出土遺物には金環・勾玉・雲珠・鉄鏃の記載があるが行方不明である。皆神山南側の標高 530 m 付近の山腹に位置する**南大平古墳（20）**は、直径 18 m、高さ 6.2 m の盛土墳で、南側斜面に開口する両袖式の横穴式石室をもつ。石室は全長 7.7 m、玄室長 3.94 m、奥壁幅 2 m、玄室の高さ 2.25 m を測る平面長方形を呈している。皆神山山頂の標高 560 m 付近に立地する**小丸山古墳（21）**は、直径 30 m、高さ 4.6 m の盛土墳で、周溝を巡らせている。明治年代に発掘されかけたらしく、堅穴式石室と推測され、円筒埴輪の出土があったらしい。皆神山西側の関屋川扇状地の**宮崎古墳（22）**は、1983（昭和 58）年に宅地造成事業にともない市埋文センターが発掘調査した古墳である。主体部は全壊寸前の横穴式石室で、出土遺物には直刀・刀子・鉄鏃・辻金具・鞍金具・丸玉・ガラス小玉などがある。

23 舞鶴山 1・2 号墳 [長野県史 1982]

1952（昭和 27）年に米山一政氏が石室清掃調査を実施し、1976（昭和 51）年に東京教育大学によって墳丘測量および石室清掃調査された古墳である。1 号墳は標高 514.5 m の舞鶴山山頂にある直径 32.7 m、高さ 5.5 m を測る二段築成の大型円墳で、墳頂および段築付近から少量の埴輪片が出土している。墳頂平坦面には全長 5.3 m、幅 70cm の割石を小口積みした堅穴式石室と、木棺直葬と思われる全長 3.6 m、幅 90cm の掘り込みを検出している。掘り込みからは珠文鏡 1 面が出土している。2 号墳は 1 号墳より距離にして約 30 m、約 8 m 下位の山頂北西縁に築造された全長 36.5 m、後円部径 19 m、同高さ 3 m、前方部幅 18 m を測る前方後円墳である。主体部は主軸に並行する堅穴式石室で、全長 5.3 m、幅 70cm を測る。大型円墳が山頂で前方後円墳が下位という古墳立地が特徴であり、築造年代は 1 号古墳が 5 世紀後半、2 号古墳が 5 世紀後半～6 世紀初頭に比定されている。1978（昭和 53）年長野市史跡に指定された。

24 土口将軍塚古墳 [長野市・更埴市教委 1987]

古墳の盗掘を契機として長野市と更埴市（現千曲市）の両教委により、1982（昭和 57）年からの 5 年間に重

要遺跡確認緊急調査事業として発掘調査が実施された前方後円墳である。妻女山から西方へ突出する薬師山の標高 450 m 付近に立地し、沖積面との比高差は約 100 m である。全長 67.7 m、後円部径 40.5 m、前方部幅 30.5 m を測る二段築成の前方後円墳で、葺石を貼り、川西編年Ⅲ期に相当する円筒・朝顔形埴輪を巡らせている。また埴輪の中には平行状、格子状のタタキ痕跡やヘラ状工具による線刻をもつものがある。後円部中央には主軸に並行して 2 基の竪穴式石室が構築されている。大半は盗掘による破壊を受けているが、同時構築の 2 基併葬例とみられている。石室内からは鉄鏃 26 本と三角板革綴短甲片数枚が出土した。後円部墳頂からは高杯を中心とする土師器が約 40 個体出土している。5 世紀初頭～前半の築造時期が考えられる。1973（昭和 48）年長野県史跡に指定され、その後 2007（平成 19）年 2 月 6 日に史跡埴科古墳群土口將軍塚古墳として国史跡に指定された。

25 倉科將軍塚古墳 [更埴市教委 2002]

森將軍塚古墳をはじめとする善光寺平南域の前方後円墳群のなかで最も標高の高い、標高 550 m の尾根上に築かれている。全長 83 m を測る二段築成の前方後円墳で、前方部の先端が山城の掘り切りにより土塁状に土が盛り上げられ変形をうけているが、左右対称な墳丘が良く残っている。2000（平成 12）年度からの 2 年間に、更埴市（現千曲市）教委からの依頼により東京学芸大が発掘調査を実施した。後円部中央には、墳丘主軸に並行する方向に、長さ 6.3 m・中央部幅 72cm の狭長な竪穴式石室が、前方部のほぼ中央にも長さ 5.45 m・中央部幅 93 cm を測る竪穴式石室が設けられている。出土遺物は、墳丘から円筒・朝顔・家形埴輪があり、後円部石室から緑色凝灰岩製管玉 7、ガラス製小玉 21、貝釧片、鉄鏃片、三角板革綴短甲片、針状鉄製品など、前方部石室からは鉄鉾 1、鉄鏃 8、三角板革綴短甲片、鐮子状鉄製品 1、針状鉄製品 2 などがある。

また、後円部裾に 2 号墳、前方部の丘尾切断部山側に 3 号墳の 2 基の小古墳が確認された。特に 2 号墳は東西 8.4 m・南北 12.5 m の長方形の古墳で、埋葬施設は石英閃緑岩の板状の石を小口積みした竪穴式石室であり、副葬品には人骨片と共に三角板革綴短甲 1、鉄刀 1、鉄剣 1、蛇行剣 1、鉄鉾 1・同石突 1、鉄鏃 9 がある。

築造年代は、出土遺物から 5 世紀初頭～前半と考えられ、森將軍塚古墳→川柳將軍塚古墳→有明山將軍塚古墳→倉科將軍塚古墳→土口將軍塚古墳という序列の想定が可能となってきた。1973（昭和 48）年長野県史跡に指定され、その後 2007（平成 19）年 2 月 6 日に史跡埴科古墳群倉科將軍塚古墳として国史跡に指定された。

26 杉山古墳群・27 矢ノ口古墳群 [更埴市史 1994]

千曲市倉科の山中、尾根にはさまれた谷間の斜面に所在する杉山古墳群 22 基と矢ノ口古墳群 13 基は、多くが石積み墳丘と考えられる。両古墳群ともに径 7～10 m の円墳が主体であり、竪穴式石室と箱形石棺および横穴式石室が混在するようである。杉山古墳群には、現存していないが合掌天井の埋葬施設が 18 号墳に存在したとの伝承がある。また古墳分布域の奥の急斜面には、閃緑岩の岩脈が崩れた岩場があり、長さ 1.7 m、幅 80cm、深さ 30cm 前後の小型埋葬施設が数多く存在している。

矢ノ口古墳群は未調査であるが、杉山古墳群では 2004（平成 16）年から千曲市教委の依頼による東京学芸大の発掘調査が行われた。縦 10.0 m・横 9.5 m・積み上げた石の高さ 1.5 m 前後の、石積み六角形墳が発見され、横穴式石室を内蔵し、出土遺物から 7 世紀ごろの築造が想定されている。また、全長 4.6 m ほどの竪穴式石室を埋葬主体部にもつ古墳から出土した土器から、古墳群の初現が大室古墳群よりも先行する可能性も浮上してきた。詳細は報告書等待つ他はないが、立地条件や内部主体など大室古墳群との類似点も多く認められ、今後注意を要する。

2 集落遺跡

28 榎田遺跡 [県埋文センター 1999b]

上信越自動車道建設にともない、1989（平成元）年から1992（平成4）年度まで県埋文センターによって発掘調査された、弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。約45,500㎡が調査され、住居跡1,115軒以上が検出されている。特に古墳時代は、中・後期を主体に893軒の住居跡が確認された長野盆地における該期の大規模集落であり、土器類の膨大な出土量に基づく土器編年試案が発表されている。弥生時代の集落とは連続せず、5世紀前半に新たに集落が形成され、5世紀後半には爆発的に住居軒数がふえている。その90%にカマドが構築されていることや、一辺およそ7～8mの大型住居も分散した状況で確認されるなど、中心的な集落遺跡と考えられる。また千曲川氾濫原という立地上、農工具や紡織具、建築部材などのほか、鞍の未製品や黒漆の弓・壺鐙などといった、古墳時代中期以降の多種多様な木製品の出土が目を引く。

29 川田条里遺跡 [県埋文センター 2000b]

上信越自動車道建設にともない1990（平成2）年～1991（平成3）年に県埋文センターによって発掘調査された水田遺跡である。現在も表層条里が遺存しているが、発掘によって弥生時代中期～近世の水田跡が重層的に検出された。古墳時代前期の水田は、弥生後期と同様に大小の畦畔によって区画されているが、古墳時代後期になると小区画畦畔が登場する。前期の大畦畔の道路状遺構の盛土内からは珠文鏡が1面出土している。

30 村東山手遺跡 [県埋文センター 1999a]

大室谷扇状地の扇端付近に位置する縄文時代～中世までの複合集落遺跡である。上信越自動車道建設にともない、県埋文センターによって1989（平成元）～1990（平成2）年に調査された。縄文時代では草創期から晩期の遺物が検出され、中期末葉と後期前半については居住施設も確認された。また、弥生時代後期では土坑墓・円形周溝墓が複数検出され、古墳群形成以前より墓域として利用されていた状況が推測できる。なお、調査地内には栗林紀道氏命名による既知の古墳6基が存在しており、調査ではさらに1基の古墳が発見された。これら7基の古墳は調査終了後破壊されたが、23号墳については長野市教委によって現在の位置に移築復元された。

31 松原遺跡 [長野市教委 1993、県埋文センター 2000a]

金井山をはさんで背面に位置する東寺尾地籍には、弥生時代中期と平安時代の巨大集落である松原遺跡がある。1989（平成元）～1991（平成3）年の県埋文センターによる高速道地点の調査や、市埋文センターによる周辺関連工事にともなう調査が継続的に実施された。弥生時代中期後半の竪穴住居跡はおよそ300軒を超え、平地住居跡も100軒以上、掘立柱建物跡も多数検出され、武器形祭器の石戈をはじめとする石器出土数も7000点以上という全国でもトップクラスの出土量で、この時期としては東日本で最大規模の集落といえよう。特に大型蛤刃石斧は、石材の産地に近い若穂の榎田遺跡から未製品を搬入し、磨いた完成品を北陸や南関東までの広い範囲に流通させていたようである。このことから当時の松原ムラが、単なる集落ではなく流通機能をもった「市」としての性格も併せもっていたと考えられている。平安時代にも大規模な集落が営まれ、仰向伸展葬の壮年男性を埋葬した木棺墓が検出されている。11世紀初頭と考えられる9個の土師器が副葬されており、出土状況から埋葬にともなう儀礼が想定される。この時期の木棺墓は住居軒数に比べてきわめて少ないことから、古代松原ムラの有力者の墓とも考えられよう。また16世紀前半の内耳土器やカワラケなどが多量に廃棄された溝跡2条も確認された。

32 屋地遺跡 [長野市教委 1990]

1976（昭和51）年に日本窯業史研究所による皆神台団地造成、1989（平成元）年には蛭川改修事業にとも

なって発掘調査された集落遺跡である。弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代中～後期・奈良～平安時代までの住居跡や土坑・甕棺墓・土器焼成遺構などが確認され、土器以外の遺物としては、刀子・鉄斧・紡錘車などの鉄製品のほか、耳環・白銅の釧片・銅製丸軛・皇朝十二銭の富壽神宝・石製模造品・鹿角製品なども出土している。

33 中条遺跡 [長野市教委 1989b]

関屋川が開折した扇状地上に立地する中条遺跡では、1987（昭和 62）年に松代高校体育館建設にともなう発掘調査が市埋文センターによって実施されている。弥生時代後期から平安時代にかけての住居跡などが確認され、古墳時代後期の 10 号住居跡では、カマドに据えられた長胴甕とともに杯や椀、甑などが出土している。また灰釉陶器や緑釉陶器も出土している。

34 四ツ屋遺跡 [長野市教委 2002]

松代町清野の道島から象山口までの、自然堤防上約 1.3km にわたって帯のように細長く展開する集落遺跡である。1976（昭和 51）年以降の清野小学校の校舎やプール、清野保育園などの改築工事にともなう発掘調査により、主に弥生時代後期から古墳時代前期の集落が小学校周辺を中心に展開していることが判明してきた。特筆すべき遺物として、弥生時代後期の占骨・銅製指輪・銅鏃、古墳時代前期の土器群などがあり、さらに平安時代では「松井」の文字が刻書された須恵器も出土しており、文献に記されている英多荘松井の存在を裏づける貴重な資料である。

35 秦河原遺跡 [長野市教委 1998b]

県道長野真田線改良事業にともない 1992（平成 4）～1993（平成 5）年度に市埋文センターが発掘調査した、古墳時代後期から平安時代の集落遺跡である。調査面積 2,000㎡から、平安時代後半が主体の 55 軒の住居跡と礎石建物跡などが検出され、灰釉陶器の出土量が多く、緑釉陶器や奈良三彩も出土している。

36 田中沖遺跡 [長野市教委 1992]

犀川によって形成された川中島大規模扇状地が、千曲川沖積地に接する辺りの微高地に立地し、松代の山々からは望観できる位置にある。古墳時代後期から平安時代にかけての複合遺跡で、主体は 7 世紀代と思われる。1978（昭和 53）年度から国道 18 号線篠ノ井バイパス建設事業にともない 1,800㎡の発掘調査が実施され、住居跡 30 軒、土坑 8 基、溝跡 3 本、柱穴群などが検出された。その後 1988（昭和 63）年および 1989（平成元）年度に長野市神明広田土地区画整理事業にともなう 4,100㎡の発掘調査が行われた。古墳時代後期から平安時代の住居跡 106 軒のほか、溝跡 29 本、柱穴群 13 か所を確認している。さらに、1994（平成 6）年度から主要地方道長野真田線道路改良事業にともなう発掘調査が実施された。大室古墳群成立の背景として、報告者は当遺跡を関連、位置付けている。また、平安時代後期に比定される住居跡より獣脚付鼎形土製羽釜が出土しており、松代町村北遺跡からも同様のものが出土していることも注目され、馬具の鍔金具や八稜鏡も出土している。

引用・参考文献

- 飯島哲也 2003a 「合掌形天井の埋葬施設について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集 帝京大学山梨文化財研究所
飯島哲也 2003b 「科野における石積み墳丘の古墳」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
岩崎卓也 1989 『長野県史』通史編 1 原始・古代 長野県史刊行会
大塚初重 1969 「長野県大室古墳群」『考古学集刊』第 4 巻第 3 号 東京考古学会
大塚初重 1990 「歴史手帖 積石塚の再検討」『日本歴史』第 510 号 日本歴史学会編 吉川弘文館
大塚初重 1992 「東国の積石塚古墳とその被葬者」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 国立歴史民俗博物館
大塚初重・小林三郎・石川日出志 1993 『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』－大室谷支群・村東単位支群の調査－ 東京堂出版
大塚初重・小林三郎 2006 『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅱ』－大室谷支群・大石単位支群の調査－ 東京堂出版
大室古墳群調査会 1970 『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』－長野県農事試験場等用地内古墳調査－

- 風間栄一 2001 「信濃善光寺平における後期古墳の様相」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会資料集
- 桐原 健 1980 「積石塚の地域相－中部山岳地方」『月刊考古学ジャーナル』No.180 特集・積石塚 ニュー・サイエンス社
- 桐原 健 1989 『積石塚と渡来人』U P 考古学選書 [10] 東京大学出版会
- 栗林紀道 1952 『大室古墳群畧図』
- 更埴市教育委員会 1992 『史跡 森將軍塚古墳』保存整備事業発掘調査報告書
- 更埴市教育委員会 2002 『更埴市内前方後円墳範囲確認調査報告書 －有明山將軍塚古墳・倉科將軍塚古墳－』
- 更埴市史編纂委員会 1994 『更埴市史』第1巻 古代・中世編 更埴市
- 小林三郎 2002 「大室 168 号墳」『続日本古墳大辞典』大塚初重・小林三郎編 東京堂出版
- 小林秀夫 1975 「善光寺平における積石塚古墳の諸問題」『長野県考古学会誌』第21号長野県考古学会
- 小林秀夫 1978 「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 小林秀夫 2000 「信濃の古墳文化」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会 東京堂出版
- 小林秀夫 2005 「列石を巡らす古墳と積石塚古墳」『長野県考古学会誌』108 長野県考古学会
- 斎藤 忠 1944 「屋根型天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』第34巻第3号 日本考古学会
- 斎藤 忠 1964 「積石塚考」『信濃』第16巻第5号 信濃史学会
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料』第1巻 信濃考古総覧
- 須坂市教育委員会 2000 『長野県史跡 八丁鎧塚』史跡公園整備に先立つ範囲確認調査報告書
- 長野県考古学会 1969 「特集 積石塚をめぐる諸問題」『長野県考古学会誌』第6号
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』通史編 第2巻
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史』考古資料編 全一卷（一）遺跡地名表
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全一卷（二）主要遺跡（北・東信）
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物
- 長野県埋蔵文化財センター 1991 『大室古墳群』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 長野県埋蔵文化財センター 1996 『大星山古墳群・北平1号墳』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 長野県埋蔵文化財センター 1999a 『村東山手遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 長野県埋蔵文化財センター 1999b 『榎田遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 『松原遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 『川田条里遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10
- 長野県企業局・日本窯業史研究所 1977 『長野県松代 屋地遺跡』日本窯業史研究所報告第4冊
- 長野市誌編さん委員会 2000 『長野市誌』第2巻 歴史編 原始・古代・中世 長野市
- 長野市誌編さん委員会 2003 『長野市誌』第12巻 資料編 原始・古代・中世 長野市
- 長野市・更埴市教育委員会 1987 『長野県史跡 土口將軍塚古墳』
- 長野市教育委員会 1968 『信濃・長原古墳群 －積石塚の調査－』長野市の埋蔵文化財第1集
- 長野市教育委員会 1980 『田中沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第7集
- 長野市教育委員会 1981a 『長野・大室古墳群』－分布調査報告書－
- 長野市教育委員会 1981b 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集
- 長野市教育委員会 1988 『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集
- 長野市教育委員会 1989a 『大室23号墳移築復原の記録』
- 長野市教育委員会 1989b 『中条遺跡』長野市の埋蔵文化財第32集
- 長野市教育委員会 1990 『屋地遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第36集
- 長野市教育委員会 1992 『田中沖遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第42集
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集
- 長野市教育委員会 1994 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.5 長野市埋蔵文化財センター
- 長野市教育委員会 1995 『和田東山古墳群』－和田東山古墳群第3号墳発掘調査概報－
- 長野市教育委員会 1997 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.8 長野市埋蔵文化財センター
- 長野市教育委員会 1998a 『西前山古墳』長野市の埋蔵文化財第90集
- 長野市教育委員会 1998b 『藁河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第93集
- 長野市教育委員会 2002 『四ツ屋遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第100集
- 西山克己 1993 「信濃の積石塚古墳と合掌形石室」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集
- 西山克己 2000 「科野の積石塚古墳と合掌形石室」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』頌寿記念会 東京堂出版
- 土生田純之 1994 「横穴式古墳構築過程の復元」『専修史学』第26号 専修大学歴史学会
- 土生田純之 1997 「信濃における横穴式石室の受容」『信濃』第49巻第4・5号 信濃史学会
- 土生田純之 2000 「積石塚古墳と合掌形石室の再検討 －大室古墳群を中心として」『総合研究所報』第240号 福岡大学総合研究所
- 松尾昌彦 1987 「善光寺平南部の飾り馬具」『比較考古学試論』増田精一編 雄山閣出版
- 松代町役場 1929 『松代町史』上巻 (株)臨川書店 1986年復刻
- 森嶋 稔 1978 「古墳時代 －生活遺跡」『更科埴科地方誌』第2巻原始古代中世編 更科埴科地方誌刊行会
- 森本六爾 1926 『金鎧山古墳の研究』雄山閣
- 矢澤頼道 1924 「屋根型天井の石櫛を有するケールン」『長野県大正十三年史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 長野県教育委員会
- 山梨県考古学協会 1999 『東国の積石塚古墳』山梨県考古学協会 1999年度研究集会資料集
- 米山一政 1978 「古墳時代 －古墳」『更科埴科地方誌』第2巻原始古代中世編 更科埴科地方誌刊行会

第Ⅱ章 史跡整備事業の概要

第1節 事業の目的

大室古墳群は、長野県長野市松代町大室を中心に、その数約 500 基と東日本で最大規模を誇る古墳群である。当古墳群は大規模であることに加えて、墳丘の構築に石を用いた「積石塚」が多くを占めていること、それらの積石塚の中に「合掌形石室」と呼ばれる埋葬施設を備えたものが存在することから、古くより学界において著名であり稀少性に富む特異な古墳群として、1997（平成 9）年 7 月 28 日に大室谷支群の主要部分 163,043.45㎡が国の史跡に指定された。以来、学術的な発掘調査が継続的に実施され、その結果古墳の分布や単位支群の構成などは部分的に明確になってきており、学界の注目度も増してきている。

しかし、このような学術的な評価の高まりに対し、一般市民の認識は残念ながら深まっているとは言い難い状況である。その理由としては、古墳群をとりまく環境が、盗掘や経年変化による崩落や風化、草木の繁茂などにより本来の姿が失われていることが第一に挙げられる。さらに、現地における公開施設を含む情報の希薄さ、交通アクセスの不便さ、便益施設の不足なども理由となっている。

そこで長野市では、古墳群の詳細な研究調査を実施し、その成果に基づいた保存整備を図るとともに、周辺部の情報提供施設や便益施設の建設など、歴史的背景を体感できる史跡公園として整備し、広く公開・活用をめざすことを目的として史跡整備事業に着手した。1999（平成 11）年 3 月に『大室古墳群史跡整備基本計画』を策定し、また第 1 期の整備エリアの一つであるエントランスゾーンについては、2001（平成 13）年 3 月に『史跡大室古墳群エントランスゾーン保存整備基本設計書』を作成している。

大室古墳群の所在する千曲川右岸には、千曲市の「史跡埴科古墳群」と「科野の里歴史公園」、真田十萬石の城下町「松代」、蔵の町「須坂」、葛飾北斎美術館のある「小布施」など、県内でも有数の観光地が連続している。北信濃ロマン街道とも呼ばれるこの観光ルートに位置しているという立地条件も、積極的に利用する必要がある。周辺の道路が改善され、観光客も増加傾向にある状況の中で、一般市民をはじめ観光客など多くの人々に大室古墳群の存在をまずは知ってもらうこと、そして古墳群のもつ歴史的な特性を肌で感じてもらうことが重要である。そのためには、各古墳を適切で良好な形で伝えるための空間形成をはじめ、広場や園路・駐車場などの充実や、修景植栽による訪れやすい空間を創出し、憩いの場・学習の場・歴史体験の場として整備・活用することは、きわめて重要かつ意義深い事業である。

第2節 事業の方針

1 整備の理念と方針

大室古墳群の整備理念は、古墳などの遺構を修理・復元することによって古代の空間を表現するとともに、自然環境と調和した新たな地域的景観の創造を目指すことにある。そのためには、大室古墳群の評価を十分に行い、その特性を明確にしたうえで、整備の目的・方針を定めることが重要である。

史跡の構成要素である古墳はもとより、古墳群を取り囲む周辺景観も適切に保全し、そのうえで土地そのものがもつ特性を活かした、質の高いデザインによって豊かな風景を創出する必要がある。また、管理運営手法を十分検討したうえで、古墳群の特性を表現するように努めなければならない。さらに、地域の資産であるという認識のもとに、整備過程から地域住民の声を積極的に取り入れる必要もある。

そこで、こうした整備理念に沿って、遺構・遺物・環境に着目しながら、以下の5つの整備方針を設定し、大室古墳群を保存しつつ、わかりやすく表現し、学習・研究の拠点づくりを進める。

(1) 調査・展示・保存が連動した野外博物館として位置づける。

保存が図られた古墳はいうまでもなく、発掘が進む状態や復元される古墳の様子が確認でき、いつ訪れても新しい発見をすることができる場所とする。

(2) 歴史と自然が調和したくつろぎの場を作る。

自然にとけ込んだ古墳を顕在化することにより、見学者が思い思いに空想を巡らせる場、自由に散策できるくつろぎの場を作る。

(3) 楽しみながら学べる体験学習の場を提供する。

遺構や遺物を見て、触れて、楽しみながら、また発掘調査や古墳築造や祭祀の体験を通して、古墳時代の歴史を学ぶことのできる体験学習の場を広く提供する。

(4) 古墳群を見渡す眺望点をつくる。

大室古墳群の広がりや分布とその立地する地理的環境を鳥瞰的に確認できるような眺望点を設ける。

(5) 地域住民の文化活動の拠点をつくる。

地元住民や保存団体などによる文化活動や啓発の場として、また憩いの場として整備する。

2 ゾーニング

大室古墳群は史跡指定範囲が約16.3haと広範囲なため、遺構の分布・地形・植生等に応じて整備要素を抽出し、公有化状況や整備効果を考慮して、以下の7区分のゾーンを設定している。第1期として、史跡指定地内の公有化をほぼ終了し、現在は史跡入口に当たる施設整備ゾーンとエントランスゾーンの整備事業を実施している。その後、第2期として遺構復元整備ゾーンに着手し、第3期としてこれらの間に位置する自然散策ゾーンと歴史景観保全ゾーンを、第4期として山林修景ゾーンと眺望ゾーンを段階的に整備することとした。

エントランスゾーン

エントランスゾーンは大室古墳群全体の屋外ガイダンスとして、古墳の復元や展示の手法にバリエーションを持たせて公開し、模型や説明施設を有効に配置することにより、楽しみながら学べる場をつくる。また、大室古墳群の導入口として中央園路（車両通行可能な園路）と、子供や高齢者や身障者でも気軽に散策できる園路を整備する。大室古墳群の概要を紹介するためのガイダンス施設に対し、エントランスゾーンは実物の遺構を現地で

見ることができる、大室古墳群の野外ガイドランスとして連携を図る。

施設整備ゾーン

国史跡指定地外となるこの場所は、後世の削平により遺構が存在しないため、公開に必要な諸施設を建設する。学校教育の利用を考慮し大型車の収容可能な駐車場、広場、便所、休憩施設を配置し、展示室を併設した史跡地全体の管理施設を建設する（平成14年7月7日大室古墳館開館）。

自然散策ゾーン

大室谷の自然に触れ、当時の環境を体験できる場をつくる。現植生を生かしながらも部分的に潜在自然植生を復元し、有用植物を使った体験学習を行ったり、虫や野鳥を観察できるような散策路を整備する。

歴史景観保全ゾーン

樹林の中に点在する古墳を見ながら歩くことで、墓域空間へのタイムスリップの場として位置づける。園路沿いの古墳を顕在化し、遺構復元整備ゾーンへ見学者を誘導するとともに、区域内の古墳の保存を図る。

遺構復元整備ゾーン

大室古墳群を特徴づけている合掌形石室と積石塚の公開の場とする。エントランスゾーンの整備が古墳に親しみ、楽しむことを目的とするのに対し、ここは学術研究の場として精度の高い復元を目指す。また、すべての古墳を復元・公開するのではなく、継続的に調査・研究・整備を行い、情報を公開するとともにその成果を折り込みながら徐々に整備範囲を広げる。

山林修景ゾーン

樹林としての修景を行い、森林浴やトレッキングの場として整備する。密植されている杉は生育不良で遺構の保存上も、防災上も良好でないことから間伐を行い、必要に応じて林相の改造も行う。

眺望ゾーン

遺構上の樹木を伐採するとともに眺望点からの視界を確保する。林道沿いの古墳の崩落と石材の散逸防止により遺構を養生するとともに遺構部への車両の進入を防止する。

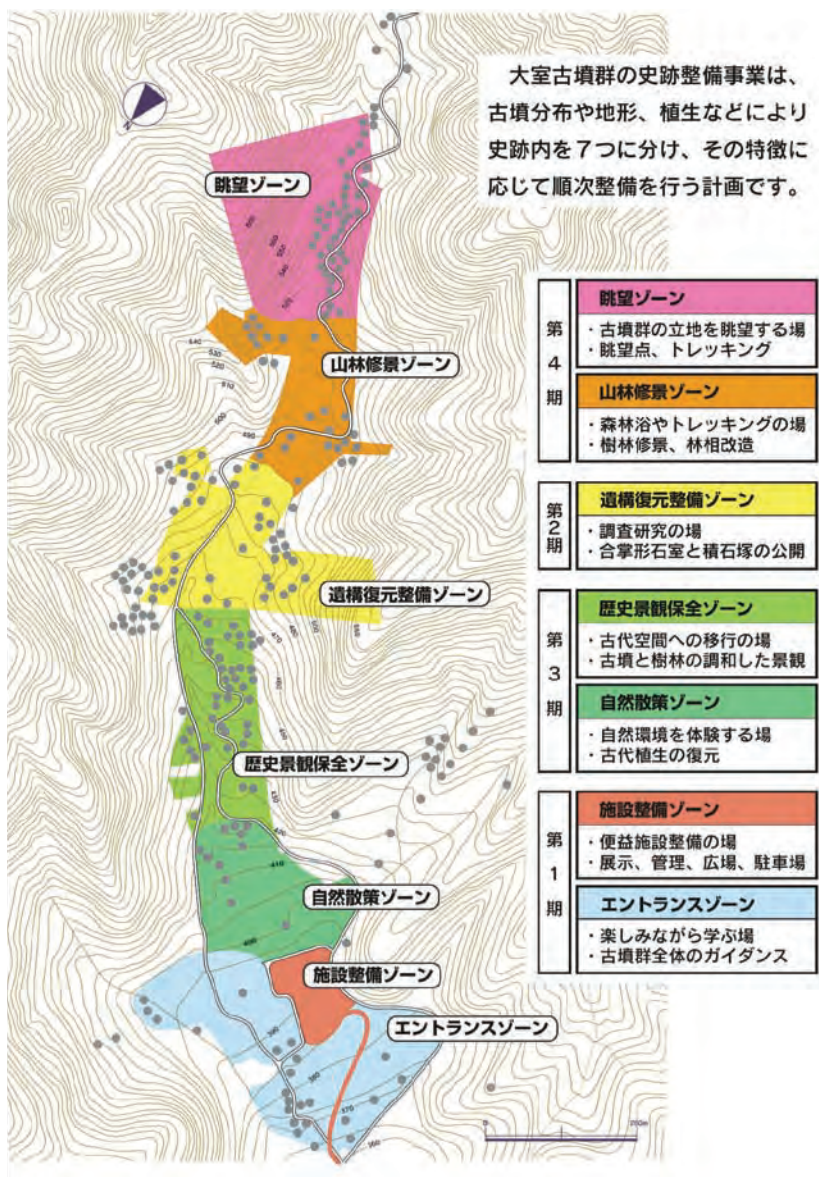


図5 ゾーニング図 (1/10,000)

第3節 事業の体制

長野市では、1997（平成9）年度から着手した史跡整備事業に対し、専門的な見地から適切かつ有効な指導・助言を得るため、同年6月17日に史跡大室古墳群整備委員会を設置した。委員長には、明治大学が実施する学術的発掘調査の指揮を執っていた明治大学文学部教授の小林三郎氏が就任し、委員には下記各氏が委嘱された。また、地元の意見や要望を聴取するため特別委員を設置しているが、2004（平成16）年度からは大室古墳群保存会の会長に就任を依頼している。さらに必要に応じて専門部会を設置しており、これまでに古墳調査部会、環境調査部会が設置された。

整備委員会はこれまでに10回開催しており、整備基本計画の策定から個々の古墳調査の考古学的知見、および整備工事の詳細に至るまで指導を受けている。

また史跡整備事業の事務局は、長野市教育委員会文化財課が担当している。

史跡大室古墳群整備委員会 2006（平成18）年度現在

委員長	小林 三郎（明治大学文学部教授）
委員	大塚 初重（明治大学名誉教授）
	岩崎 卓也（松戸市立博物館長）
	佐々木 邦博（信州大学農学部教授）
	笹澤 浩（長野市地方文化財保護審議会委員）
	小林 秀夫（学識経験者）
特別委員	須田 和雄（大室古墳群保存会長）
専門部会 古墳調査部会長	小林 三郎（明治大学文学部教授）
古墳調査部会員	佐々木 憲一（明治大学文学部助教授）
環境調査部会長	佐々木 邦博（信州大学農学部教授）

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
年度	1997年度 平成9年度	1997年度 平成9年度	1998年度 平成10年度	1999年度 平成11年度	2000年度 平成12年度	2001年度 平成13年度	2002年度 平成14年度	2004年度 平成16年度	2005年度 平成17年度	2006年度 平成18年度
開催日	6月17日	11月28日	7月10日	7月27日	7月21日	8月23日	10月17日	8月31日	12月2日	9月22日
会場	長野市役所	長野市役所	サンホールマツシロ	サンホールマツシロ	サンホールマツシロ	長野市役所	長野市役所	永保荘	長野第一ホテル	長野第一ホテル
指導 (担当)	文化庁文化財保護部記念物課					文化庁文化財部記念物課				
	本中 眞	本中 眞	本中 眞	本中 眞	本中 眞	本中 眞	本中 眞	小野健吉	小野健吉	小野健吉
	長野県教育委員会									
	平林 彰	平林 彰	平林 彰	平林 彰	平林 彰	出河裕典	出河裕典	西山克己	西山克己	西山克己
史跡大室古墳群整備委員会										
委員長	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎	小林三郎
委員	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重	大塚初重
〃	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也	岩崎卓也
〃	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博	佐々木邦博
〃	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩	笹澤 浩
〃	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫	小林秀夫
特別委員	中村 功	中村 功	中村 功	中村 功	中村 功	中村 功	中村 功	神戸直日	神戸直日	須田和雄
	特別参加									
					北村 保		神戸直日			
							梅崎 武			

表3 史跡大室古墳群整備委員会の経緯

	1997 年度 平成 9 年度	1998 年度 平成 10 年度	1999 年度 平成 11 年度	2000 年度 平成 12 年度	2001 年度 平成 13 年度	2002 年度 平成 14 年度	2003 年度 平成 15 年度	2004 年度 平成 16 年度	2005 年度 平成 17 年度	2006 年度 平成 18 年度
	特別職									
市 長	塚田 佐	塚田 佐	塚田 佐	塚田 佐	塚田 佐	鷺澤正一	鷺澤正一	鷺澤正一	鷺澤正一	鷺澤正一
〃					鷺澤正一					
助 役	山岸 勲	市川 衛	市川 衛	市川 衛	市川 衛	市川 衛	市川 衛	市川 衛	市川 衛	酒井 登
〃	久保田隆次	久保田隆次	久保田隆次	久保田隆次				酒井 登	酒井 登	
収入役	徳永治雄	徳永治雄	徳永治雄	徳永治雄	伊藤克昭	伊藤克昭	伊藤克昭	伊藤克昭	伊藤克昭	伊藤克昭
教育長	滝澤忠男	滝澤忠男	久保 健	久保 健	久保 健	立岩睦秀	立岩睦秀	立岩睦秀	立岩睦秀	立岩睦秀
〃		久保 健								
	教育委員会									
委員長	新井好仁	新井好仁	新井好仁	新井好仁	新井好仁	久保 健	久保 健	久保 健	久保 健	久保 健
委 員	河原悠二	河原悠二	河原悠二	松浦節子	柳澤幸一	柳澤幸一	柳澤幸一	柳澤幸一	柳澤幸一	柳澤幸一
〃	松浦節子	松浦節子	松浦節子	柳澤幸一	野口 修	野口 修	野口 修	金物佳子	金物佳子	金物佳子
〃	井田寛行	井田寛行	柳澤幸一	野口 修	金物佳子	金物佳子	金物佳子	中寫実香	中寫実香	中寫実香
〃		柳澤幸一	野口 修	金物佳子			中寫実香			夏目 潔
	教育委員会事務局									
教育次長	早水清美	早水清美	今井克義	今井克義	今井克義	小池公雄	小池睦雄	島田政行	島田政行	島田政行
〃	窪田雅武	窪田雅武	窪田雅武	小池公雄	小池公雄	小池睦雄	小泉敬治	小泉敬治	玉川隆雄	玉川隆雄
	社会教育課		文化課					文化財課		
課 長	片岡久晴	宮澤 博	宮澤 博	滝澤仁恵	小林伯子	小林伯子	塩澤一郎	塩澤一郎	北村真一郎	北村真一郎
主 幹	宮本幸明									
〃	宮沢 博									
課長補佐	宮本幸明	近藤 守	近藤 守	上原邦男	宮下春夫	宮下春夫	宮下春夫	山崎幸孝	山崎幸孝	山口 明
〃	宮沢 博	森田浜男								
〃	近藤 守									
係 長	近藤 守		青木和明	青木和明	青木和明	青木和明	千野 浩	千野 浩	千野 浩	春原一男
担 当	青木和明	青木和明	前島 卓	飯田 茂	飯田 茂	飯田 茂	久保田泰	久保田泰	飯島哲也	飯島哲也
〃	前島 卓	前島 卓	吉岡亜記	前島 卓	小出 明	小出 明	池田 匠	宿野隆史	久保田泰	石坂公人
〃	河野聡子	吉岡亜記	中村大輔	小出 明	池田 匠	池田 匠	宿野隆史	篠原靖志	篠原靖志	篠原靖志
〃	中村大輔	中村大輔	宿野隆史	吉岡亜記	吉岡亜記	宿野隆史	平林身和子	平林身和子	平林身和子	平林身和子
〃		宿野隆史		宿野隆史	宿野隆史	平林身和子				
専門員			勝田智紀	春名理史	小林育英	小林育英	小林育英	小林育英	時信武史	海野 修
〃					時信武史	時信武史	時信武史	時信武史	海野 修	清水竜太
	都市開発部					都市整備部				
部 長	宮原政嘉	宮原政嘉	白澤健太郎	白澤健太郎	白澤健太郎	酒井利治	酒井利治	中村治雄	中村治雄	中村治雄
	公園緑地課									
課 長	酒井利治	酒井利治	鈴木康夫	鈴木康夫	伝田耕一	伝田耕一	伝田耕一	高見澤裕史	高見澤裕史	高見澤裕史
兼務職員	田原章文	田原章文	田原章文	田原章文	駒村哲一	駒村哲一	平澤 智	平澤 智	平澤 智	平澤 智
〃				駒村哲一	丸山信幸	丸山信幸	丸山信幸	西山 猛	西山 猛	西山 猛
〃				丸山信幸						
	建設部									
部 長	西沢清一	西山治雄	西山治雄	太田志郎	新保哲二	新保哲二	中山一雄	中山一雄	中山一雄	和田 智
	建築課									
課 長	溝口孟俊	山本員也	中村 信	小島竹一	小島竹一	栗原健爾	栗原健爾	栗原健爾	栗原健爾	永井敦司
〃										返町洋三
兼務職員			内山卓太郎	内山卓太郎	内山卓太郎	内山卓太郎	小林竜太	小林竜太	小林竜太	滝澤秀人

表 4 事務局体制の経緯

第4節 事業の経過

長野市では、1997（平成9）年7月28日に国史跡指定を受け、即座に史跡整備事業に着手した。まずは用地取得事業として、文化庁の史跡等買い上げ事業による補助を受けながら、1997（平成9）年度から直接買い上げによる公有地化をすすめ、1999（平成11）年度からは特別会計による先行取得に移行し、2002（平成14）年度までに154,220㎡の用地取得を完了している。

史跡整備事業の指針となる『大室古墳群史跡整備基本計画』は、1999（平成11）年3月に策定した。この基本計画に基づき、第1期事業としてエントランスゾーンと施設整備ゾーンから着手している。

施設整備ゾーンでは、史跡指定範囲外となる養鶏場跡地に便益施設を建設するべく、施設建設事業に着手した。地域総合整備事業債ふるさとづくり事業を援用し、1999（平成11）年度に造成工事、2000（平成12）年度から翌年度まで便益施設の建設工事を実施している。幅員7m、延長350mの園内道路、1,500㎡の駐車場、4,400㎡の広場を建設し、ガイダンス施設である大室古墳館（平屋250㎡）を、2002（平成14）年7月7日に開館させた。大室古墳館には博物館的な機能は付加せず、あくまで大室古墳群全体が野外博物館であるとの基本方針に基づき、古墳見学の手助けとなる事前情報の提供を主目的としている。入館者数は、2002（平成14）年度は4,865人、2003（平成15）年度3,669人、2004（平成16）年度3,548人、2005（平成17）年度2,756人、2006（平成18）年度2,608人となっており、近隣小学校の遠足地としても利用されている。

エントランスゾーンについては、2001（平成13）年3月に『史跡大室古墳群エントランスゾーン保存整備基本設計書』を作成した。この基本計画に基づき、2000（平成12）年度までに区域内の古墳に関する予備調査を終了し、また並行して進められた各古墳の範囲を確認するための試掘調査や発掘調査は、2006（平成18）年度まで継続実施している。調査の詳細については次章を参照されたい。

この調査結果を基に、個別古墳の保存修理工事にも着手している。石室が露出し一部崩壊している246号墳については、さらなる崩壊の危険性が憂慮されたことから優先的に保存修理することとして、2004（平成16）年度に実施した。また、同じく石室が露出している235号墳についても2006（平成18）年度から着手している。

2007（平成19）年度からは、個別古墳の保存修理工事に加えて、各種の環境整備工事に着手し、2011（平成23）年度までの予定で、エントランスゾーン全体の整備を進めていく予定である。

第5節 エントランスゾーンの整備概要

1 エントランスゾーンの現況

エントランスゾーンは大室谷入口の標高 360 ～ 400 m 付近にあたり、南東側には傾斜面を削平して造られた 4 ～ 5 m の段差を有する大きな 2 つの平坦面がある。この造成地は、すでに古墳などの遺構が存在しないことが明らかであり、国指定史跡の範囲から除外し、長野市指定史跡地内の便益施設整備ゾーンと位置づけ、2002（平成 14）年 7 月 7 日に大室古墳館を開館させている。

現在のエントランスゾーンの地形は、階段状の比較的緩やかな勾配の敷地に造成され、石垣で土留めが施されている。石垣は、樹木や雑草の繁茂で隠れているものの、地形自体は古墳築造時とはかなり異なっている。この石垣には、古墳を破壊もしくは既に崩落していた古墳の石材を利用して構築したり、墳丘を石垣の一部に組み込むなど遺構保存上の問題個所も多く、また、盛土を施したために地盤面が上り墳裾が土中に埋没し、現状のままでは本来の遺構の範囲を確認できない個所も見られる。計画地内の雨水は、地下に浸透するか、敷地の勾配に沿って南東から北西に向けて地表を流れ、一部は音無川に流れ込む。草で覆われた地表面はその抵抗により流速が落ちるため、雨裂や流土等は見られない。砂利舗装された道路部は浸透性が低く、表層水が加速して土を洗掘することにより、轍が著しく陥没している。地盤構成が確認されていないため、不透水層及び地下水位面は不明であるが、1989（平成元）年度に移築復元した 23 号墳付近から、豪雨時に多量の水が噴出することが確認されており、浸透した雨水が地下水と合流して流れ出している可能性が高い。

エントランスゾーンの古墳は、分布する地区により 5 つのグループに大別される。各古墳について平成 10 年度から測量と試掘確認調査を実施しており、徐々に遺構の状況が判明しつつある。墳丘は自然崩壊や人為的削平により土石の散逸が多く見られ、築造当時の形状や規模をほぼ完全な状態で維持しているのは 244 号墳のみである。また、石室についても石組崩落後の墳丘土砂流入によって確認が難しいものや、封土（石）が散逸し石組が不安定な状態で露出しているものが数多く存在する。

大室古墳群への導入は、大室集落から高速道路下をくぐり、計画地北西部からの 1 方向に限定される。整備前の見学者の動線としては、計画地北西部の 244 号墳付近に駐車してその周辺を見学してから、林道を使用してムジナゴロに至る経路であった。園内道路整備後の現在は、駐車場およびガイダンス施設である大室古墳館のある南東部が始点であり、終点ということになる。この園内道路の建設により、古墳群内は大型バスの通行が可能となったが、大室集落から現地までのアクセス道路は幅員が狭く通行に適していないため、この整備も考える必要がある。

現在、エントランスゾーンはかなりの密度で中高木が茂り視界を遮っているために、群としての分布状態を視覚的に把握することは難しい。また、夏季には地表面だけでなく墳丘上にも蔓系植物が繁茂し、敷地全体が緑に覆われるために、古墳自体の確認も困難である。敷地北西部は密生したケヤキの大木群があり良好な自然樹林を形成しているが、ここは古墳も重なり合うように高密度に築造された場所で、墳丘や石室の石材間に入り込んだ樹木の根が、石積の攪乱や崩壊を招いている。エントランスゾーン東側及び施設整備ゾーン一帯には中高木は少なく、地表がヨモギやササ類などに覆われている程度で、計画地の中では最も標高が高いこともあり、眺望が開けた場所となっている。

2 エントランスゾーンの整備方針

エントランスゾーンは、短期的には大室古墳群唯一の遺構公開展示の場であり、将来的にも史跡の導入部として見学者が必ず立ち寄る重要な場所となる。また、既にほぼ整備を終了した施設整備ゾーンは、見学者の駐車場であり、遺構を実際に目にする前のガイダンスの場として、エントランスゾーンとの関連性を重視して整備してきた。

施設整備ゾーンでは、展示施設・便益施設・駐車場・ガイダンス広場などを整備した。駐車場は、遺構が存在しない施設整備ゾーンにある2段の平坦面のうち、史跡の入口に近い下段に配置した。古墳群の整備は学校教育との連携を図る必要があることから、大型バス5台の駐車枠を優先的に確保し、一般車は30台内外の配置が可能である。身障者用の駐車スペースもここに設けるため、上段部分へ至る法面には車椅子用の斜路を設けている。展示施設および便益施設である大室古墳館は、大室古墳群を見学する前に、古墳や自然などの情報や知識を得るためのガイダンス施設として位置づけ、見学者の動線を考慮して駐車場上段平坦面に配置した。見学に来る小中学校の児童生徒は季節によっては一度に4クラス（160人）程度が想定されるが、この人数を収容できる施設を建設するのは景観上非常に問題であった。そこで団体が説明を聞いたり、体験イベントなど学習する場としては施設前面に設けたガイダンス広場を利用するものとし、施設では遺物や写真パネルなど屋内でなければ行えない展示と管理スペース、便所程度に抑えた。施設の高さは、周辺景観を考慮し建設地上段の敷地レベルを越えないことを前提とし、また、エントランスゾーンの古墳部分から見えにくいように東側の法尻に沿って建設している。

エントランスゾーンでは、バラエティに富んだ遺構の展示、ビューポイントや休憩施設の配置、楽しみながらゆっくりと見学できる動線等を整備し、史跡に対する興味を抱かせつつ、地形や周辺景観、植生の修景などをおして大室古墳群の立地や独特の雰囲気伝える必要がある。

エントランスゾーンの主たる整備要素は遺構（古墳）であるが、この他にも古墳の立地環境を示す地形や植栽、眺望点、これらの整備ポイントと駐車場や大室古墳館を結ぶ園路、説明施設などが挙げられる。以下、各項目の整備方針を挙げる。

遺 構

古墳は石室と墳丘の遺構残存状況に応じ、復元、遺構露出展示、埋め戻しなどの展示方針を決定する。さらに、5つのグループそれぞれに他とは異なる見せ場をつくり、見学者を飽きさせず、楽しみながらエントランスゾーン全体を見学できるようにする。エントランスゾーンには合掌形石室が確認されていないが、これは積石塚とともに大室古墳群が特異な古墳群とされる所以でもある。そこで、遺構復元整備ゾーンに存在する合掌形石室の状況や積石塚の墳丘との関係等の解説は、展示施設において行う。

地 形

現在、古墳の範囲と重なっている石垣や、石垣を墳丘の一部として土留めに利用している個所、造成による盛土で墳裾が埋まっているところは、遺構保存上問題であることから石垣及び盛土の除去を行う。エントランスゾーン中央部の園内道路と既存の道路ではさまれた範囲には古墳が存在しないが、古墳に囲まれた空間という点から、整備に当たって非常に重要なポイントとなる。現在は、階段状の地形に改変されて梅林となっているが、旧地形を復元し視界を確保する。計画地内を流れる音無川は、2004（平成16）年の台風23号にともなう集中豪雨によって発生した土石流のため、護岸の崩壊など甚大な被害を被ったことから、2005（平成17）年度に護岸



図6 エントランスゾーン周辺地形図 (1/2,000)

改修工事を行っている。

植 栽

エントランスゾーン一帯は大室古墳群の中では比較的緩いとはいえ傾斜地であり、洗掘や現在ゾーン全体に繁茂する蔓系植物の繁茂防止、維持管理を考慮し、芝張で仕上げる。植物（特に中高木）は、緑陰を形成するまでには長い年月を要するため、既存自然樹木は整備のなかでも活用する。ただし、全体に均等に残すのではなく、視野を広く確保すべきところ、外部との遮蔽上必要な場所などを勘案し、メリハリを持たせる。なお、エントランスゾーン北側のケヤキ林は良好な緑の空間を形成しているが、遺構を攪乱しているところも多く、墳丘上と遺構に近接するものに関しては伐採する。現在ほとんど高木がない施設整備ゾーンは、古墳時代に人々が食用に利用していた実のなる植物を主に植栽を行い、古代景観の形成に努める。

園 路

エントランスゾーンへの見学者のアプローチは、園内道路・駐車場整備により現在とは逆の西側からとなる。ここから古墳分布域をくまなくまわれるような遊歩道を整備する。舗装材は、凍上や滑りが生じにくい歩行安定性の高い素材を選定する。エントランスゾーン全体を見学すると歩行距離が1km近くになり、高低差もあることから、園路脇の数箇所に休憩のためのベンチを設置する。

眺望点

エントランスゾーンの古墳分布を鳥瞰的な視線で見ることのできるゾーン東端の235号墳付近に眺望点を設ける。ここは駐車場や展示施設に近接し、エントランスゾーンの古墳群の入口にあたることから、身障者や高齢者、遺跡に興味薄い人でも気軽に立ち寄れる場として整備する。

説明施設

235号墳付近にはエントランスゾーンの各グループの位置関係と見所をイラストなどで明示した総合案内板を設置する。また、古墳群で数少ない、遠くの山々まで展望が開けた場所であることから山や施設などの名称を記載したパノラマ説明板も組み込む。各古墳分布域に1箇所の野外説明板を配するほか、特記すべき遺構や特殊な整備手法については別途説明を追加する。



図7 エントランスゾーン整備計画案 (1/2,000)

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査概要

史跡大室古墳群においては、史跡指定を受けた翌年の1998（平成10）年度に策定した整備基本計画に基づき、史跡指定地の保存と活用をめざす整備事業を推進するために、同年度から史跡入口部（エントランスゾーン）の遺構確認調査に着手し、古墳の保存修理および周辺環境整備に関する基礎資料の収集を継続して実施してきた。

調査対象は、エントランスゾーンに所在する24基の古墳である。大室古墳群大室谷支群村東単位支群の26～29号墳・235号墳・237～247号墳・A～D号墳・ハ号墳と、鳶岩単位支群の31号墳・32号墳・33号墳であり、2006（平成18）年度までに調査した延べ古墳数は66基、総面積は2,979㎡である。

本章ではこのうち、A区（243・244号墳）とE区（31～33号墳）を除く、B区（245・246号墳）、C1区（26・A～D・ハ号墳）、C2区（27～29・241・242号墳）、C3区（237～240号墳）、D区（235号墳）に位置する19基を調査し確認できたすべての遺構について報告する。

なお、遺構確認調査はその目的や性格別に大きく3つに区分した。草刈り清掃や墳丘測量など現況調査を目的とした予備調査と、各古墳の墳端確認を主目的とした試掘調査、そして改変状況や墳丘構造の確認などを目的とした発掘調査である。

1998（平成10）年度

史跡指定後、本格的な調査が開始された年であり、各古墳の基礎的データを収集するために予備調査から開始した。予備調査を実施した古墳は、エントランスゾーンの北西部分に位置する村東単位支群の26・27・242・243・244・A・B・D・ハ号墳の9基（5,700㎡）である。各古墳の範囲や残存状況を確認するための試掘調査も、26・27・242・243・244・B号墳の6基（110㎡）で着手している。なお、ガイダンス施設大室古墳館への園内道路施工に先立って路線範囲内の分布調査（3,000㎡）も実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。

1999（平成11）年度

前年度に引き続き、予備調査と試掘調査を実施した。測量を実施した古墳は、エントランスゾーンの北東部分と南西部分に位置する28・29・237・238・239・240・241・245・246・247・C号墳の11基（5,500㎡）である。試掘調査を実施した古墳は26・29・241・243・244・246・A・C・ハ号墳の9基（170㎡）である。また、246号墳北東において発見された大型の石と礫の集積箇所に関して、遺構の可否を確認するための試掘調査を実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。

2000（平成12）年度

未着手であった鳶岩単位支群の31・32・33号墳と235号墳の4基（5,500㎡）の予備調査を実施し、エントランスゾーンに分布する古墳の予備調査は終了した。試掘調査を実施した古墳は27・28・29・237・238・239・240・241・245・246・247・D号墳の12基（170㎡）である。

2001（平成13）年度

試掘調査を実施した古墳は31・32・33・235号墳の4基（60㎡）である。これをもって、エントランスゾーンに分布する古墳の試掘調査は終了した。また、保存修理本格着手へ向けての発掘調査に着手するため、244号墳の古墳外表施設である石積みの遺存状況を記録するため、写真測量（400㎡）も実施した。

2002（平成 14）年度

前年度に着手した 244 号墳の発掘調査（600㎡）を継続し、古墳外表面および墳丘内部の検出遺構を記録するために、立面図などの写真測量も併せて実施した。

2003（平成 15）年度

244・243 号墳の 2 基（770㎡）について発掘調査を実施した。244 号墳では、これまでの検出遺構を記録するため平面図などの空撮測量を実施した。本年度をもって、244・243 号墳の発掘調査は一応の区切りをつけた。また、構造調査の基礎資料として、横穴式石室の実測調査を 33・200・235・246 号墳で実施している。

2004（平成 16）年度

235・237・238・239・240・246 号墳の 6 基（380㎡）について発掘調査を実施した。246 号墳は、保存修理工事にともなって実施した遺構確認調査であり、また石室側壁体が露出して崩壊の危機に瀕している 235 号墳も範囲確認を目的に実施した。また、構造調査の基礎資料として、横穴式石室の実測調査を 26・184・137 号墳で実施している。

2005（平成 17）年度

26・27・28・29・241・242・A・B・C・D・ハ号墳の 11 基（260㎡）について発掘調査を実施し、本年度をもってエントランスゾーンに分布する古墳の発掘調査を終了した。また、先年度に台風による被害を受けた音無川の改修工事に先立ち、古墳を含めた遺構の有無を確認するために 3 箇所の特レンチによる試掘調査を実施したが、古墳などの遺構は確認されなかった。

2006（平成 18）年度

現状で古墳の存在が確認されていないエントランスゾーン中央部に位置する芝生広場予定地部分について、古墳の痕跡などの有無について確認するための試掘調査（375㎡）を実施した。

本年度をもってエントランスゾーンにおける遺構確認調査は終了となる。ただし、整備工事の施工範囲や古墳の可能性が考えられる箇所についての遺構確認調査は、今後も適宜継続していくこととする。

年 度	対象古墳	調査面積	測量面積	調査期間（下段は実質調査日）			調査員等人数		
				着手日	完了日	日数	調査員	補助員	作業員
1998 年度 (平成 10 年度)	9 基	110 ㎡	5,700 ㎡	7 月 1 日 7 月 7 日	3 月 26 日 9 月 30 日	265 日間 83 日間	5 人	28 人	20 人
1999 年度 (平成 11 年度)	16 基	170 ㎡	5,500 ㎡	7 月 1 日 7 月 12 日	3 月 24 日 9 月 30 日	263 日間 78 日間	6 人	17 人	18 人
2000 年度 (平成 12 年度)	16 基	170 ㎡	5,500 ㎡	7 月 3 日 8 月 1 日	3 月 30 日 9 月 14 日	267 日間 43 日間	6 人	24 人	18 人
2001 年度 (平成 13 年度)	5 基	60 ㎡	400 ㎡	7 月 2 日 7 月 31 日	3 月 29 日 11 月 16 日	267 日間 106 日間	8 人	38 人	25 人
2002 年度 (平成 14 年度)	1 基	600 ㎡	208 ㎡	7 月 1 日 8 月 1 日	3 月 28 日 12 月 11 日	267 日間 130 日間	8 人	34 人	29 人
2003 年度 (平成 15 年度)	2 基	770 ㎡	1,100 ㎡	7 月 1 日 8 月 1 日	3 月 31 日 12 月 1 日	270 日間 120 日間	12 人	33 人	26 人
2004 年度 (平成 16 年度)	6 基	380 ㎡	100 ㎡	7 月 12 日 7 月 15 日	3 月 30 日 12 月 24 日	258 日間 159 日間	14 人	36 人	24 人
2005 年度 (平成 17 年度)	11 基	260 ㎡	100 ㎡	7 月 12 日 7 月 29 日	3 月 30 日 12 月 12 日	258 日間 133 日間	9 人	43 人	21 人
2006 年度 (平成 18 年度)	0 基	375 ㎡	459 ㎡	9 月 15 日 9 月 15 日	3 月 30 日 12 月 6 日	195 日間 81 日間	12 人	0 人	36 人
合 計 (延べ数)	66 基	2,895 ㎡	19,067 ㎡			2,310 日間 933 日間	80 人	253 人	217 人

表 5 年度別調査の諸元表



図8 エントランスゾーン古墳分布図 (1/2,000)

			1998 年度	1999 年度	2000 年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度
			平成 10 年度	平成 11 年度	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度
A 区	243 号墳	調査整備	予備・試掘	試掘				発掘			
	244 号墳	調査整備	予備・試掘	試掘		発掘	発掘	発掘			
	23 号墳 ※ 1	調査整備									
B 区	245 号墳	調査整備		予備	試掘						
	246 号墳	調査整備		予備・試掘	試掘				発掘 設計・工事		
	247 号墳 ※ 2	調査整備		予備	試掘						
C 1 区	26 号墳	調査整備	予備・試掘	試掘						発掘	
	A 号墳 (26-A)	調査整備	予備	試掘						発掘	
	B 号墳 (26-B)	調査整備	予備・試掘							発掘	
	C 号墳 (26-C)	調査整備		予備・試掘						発掘	
	D 号墳 (? 号墳)	調査整備	予備		試掘					発掘	
	ハ号墳	調査整備	予備	試掘						発掘	
C 2 区	27 号墳	調査整備	予備・試掘		試掘					発掘	
	28 号墳 ※ 2	調査整備		予備	試掘					発掘	
	29 号墳	調査整備		予備・試掘	試掘					発掘	
	241 号墳	調査整備		予備・試掘	試掘					発掘	
	242 号墳	調査整備	予備・試掘							発掘	
C 3 区	237 号墳 ※ 2	調査整備		予備	試掘				発掘		
	238 号墳	調査整備		予備	試掘				発掘		
	239 号墳	調査整備		予備	試掘				発掘		
	240 号墳	調査整備		予備	試掘				発掘		
D 区	235 号墳	調査整備			予備	試掘			発掘	養生・設計	工事
E 区	31 号墳	調査整備			予備	試掘					
	32 号墳	調査整備			予備	試掘					
	33 号墳	調査整備			予備	試掘					
その他			園内道路 分布調査	大岩試掘				石室実測	石室実測 地形確認試掘	排水路 試掘・工事	芝生広場 試掘

※ 1 1989（平成元）年に移築復元したものである。

※ 2 調査の結果、古墳ではないことが判明した。

表 6 古墳別調査／整備状況表

第2節 26号墳

1 立地と現状

26号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約366mに立地する。本古墳の北約12mにはA号墳、南東約30mには27号墳、同じく南東約26mには242号墳、南西約16mにはハ号墳、西約13mにはB号墳が近接する。本古墳は墳丘の上半部がかなり削平されており、横穴式石室の天井石がすでに露出・陥没していた。また、道路の敷設によって墳丘の南東側が大きく破壊されていた。

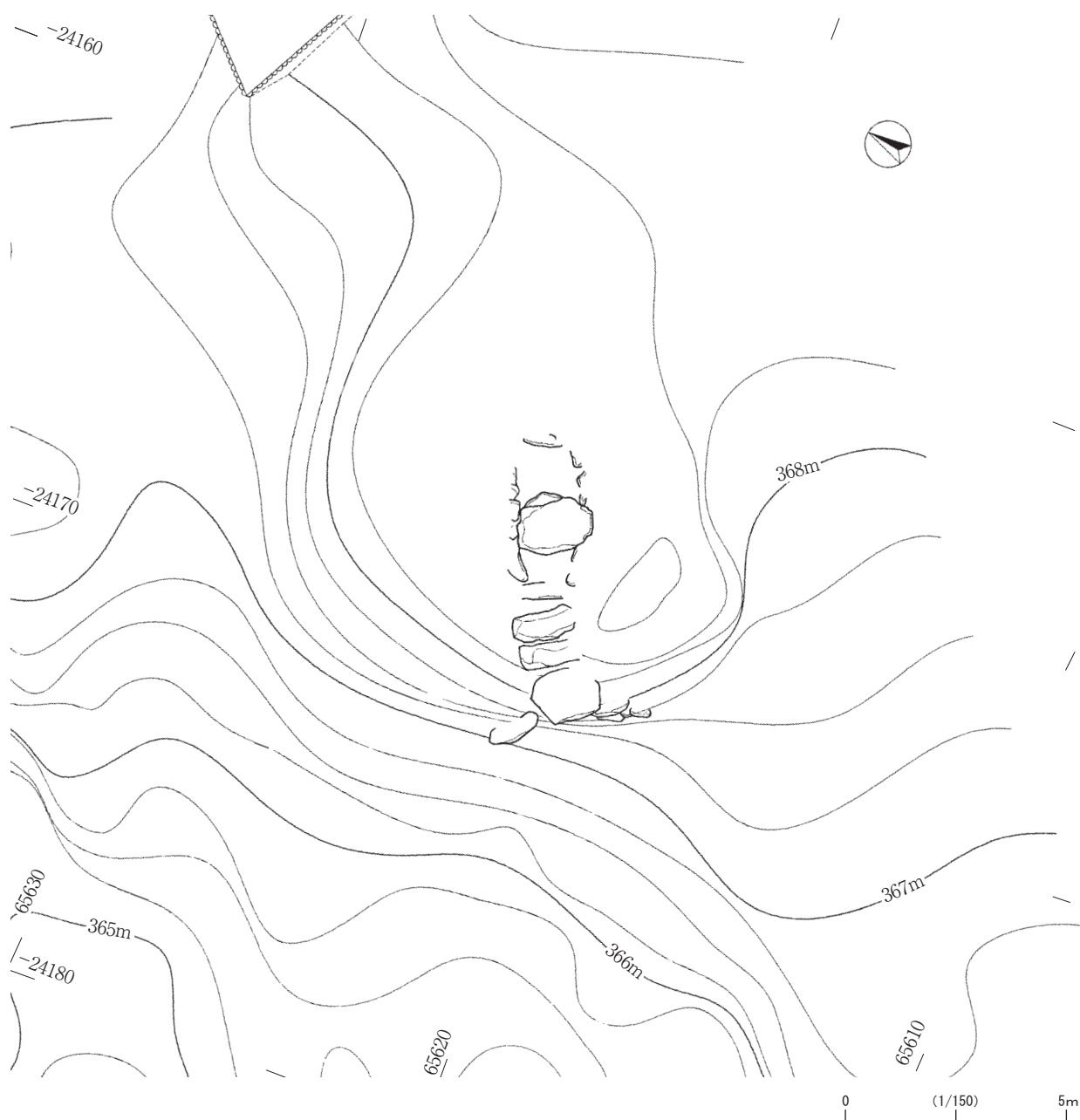


図9 26号墳墳丘測量図 (1/150)

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。墳丘の外表面には、墳丘構築時に並べられた石材が墳丘を取り巻くように露出している。また、石室開口部付近では緩やかな「ハ」字状に広がる石列が確認できる。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。石室内部は埋没しているため詳細は不明であるが、現状の観察から緩やかに胴の張る両袖式の横穴式石室とみられる。天井石は玄室部に1枚、羨道部に3枚が残存している。玄室の主軸は現状でN-76°-Eを測り、石室は南西に向けて開口しているが、玄室の主軸と羨道の主軸は若干のずれがある。

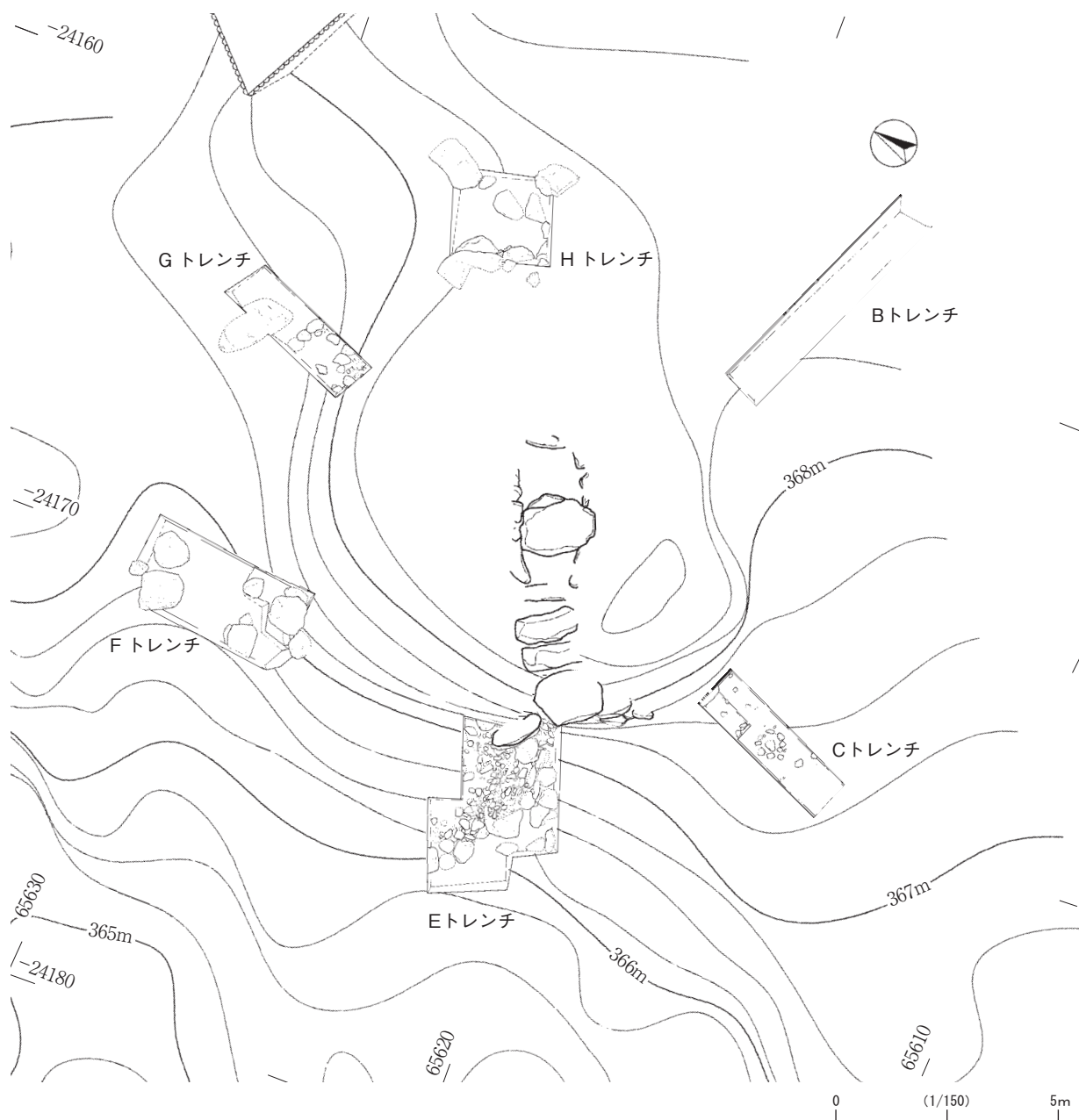
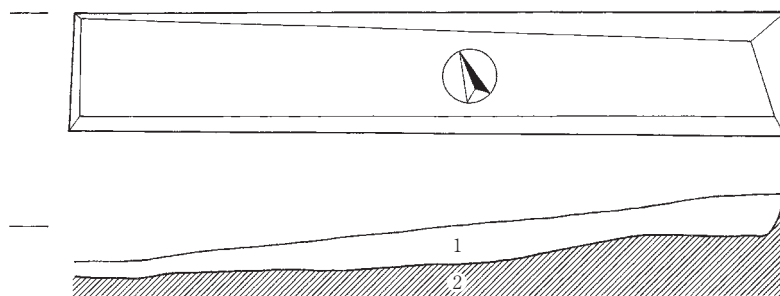


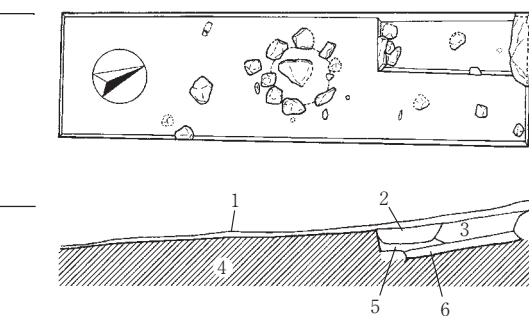
図 10 26号墳調査成果図 (1/150)



B トレンチ

- 1、暗黄褐色土層
砂利・碎石を多く含む（道路敷設の造成土層）
- 2、暗茶褐色土層
φ 10～20cmのクサレ礫・角礫を含む（地山層）

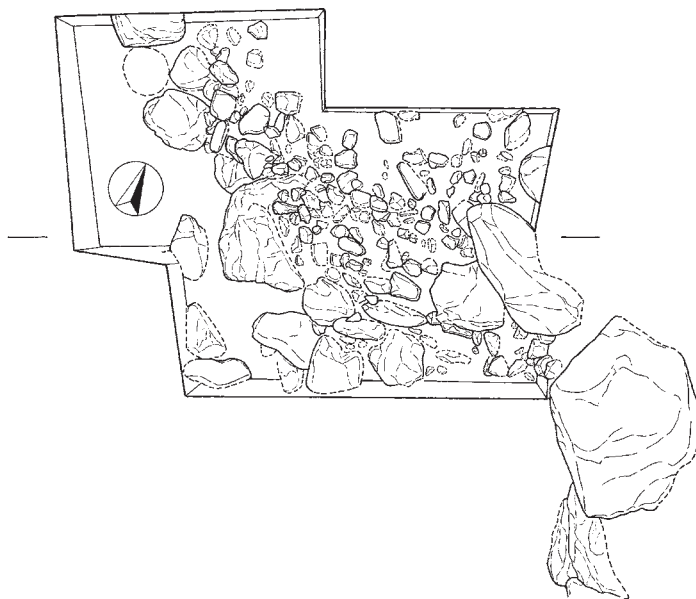
368.5m



C トレンチ

- 1、茶褐色土層（表土層）
- 2、黒褐色土層 プラスチックゴミを含む（攪乱層）
- 3、暗黄褐色土層 針金・磁器・空き瓶を含む（攪乱層）
- 4、暗褐色土層 炭化物を含む（炉址状遺構検出面）
- 5、暗茶褐色土層 φ 10cm程度の礫を含む（崩落土層）
- 6、明茶褐色土層 黒色土ブロックがマーブル状に混じる（墳丘盛土層）

367.5m



366.5m

E トレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、暗褐色土層 φ 10～20cmの礫を含む（墳丘盛土層）
- 3、黄褐色土層 φ 10～20cmの礫を含む（墳丘盛土層）
- 4、明黄褐色土層 φ 5～10cmのクサレ礫を含む（地山層）

0 (1/60) 2m

図 11 26 号墳トレンチ個別図① (1/60)

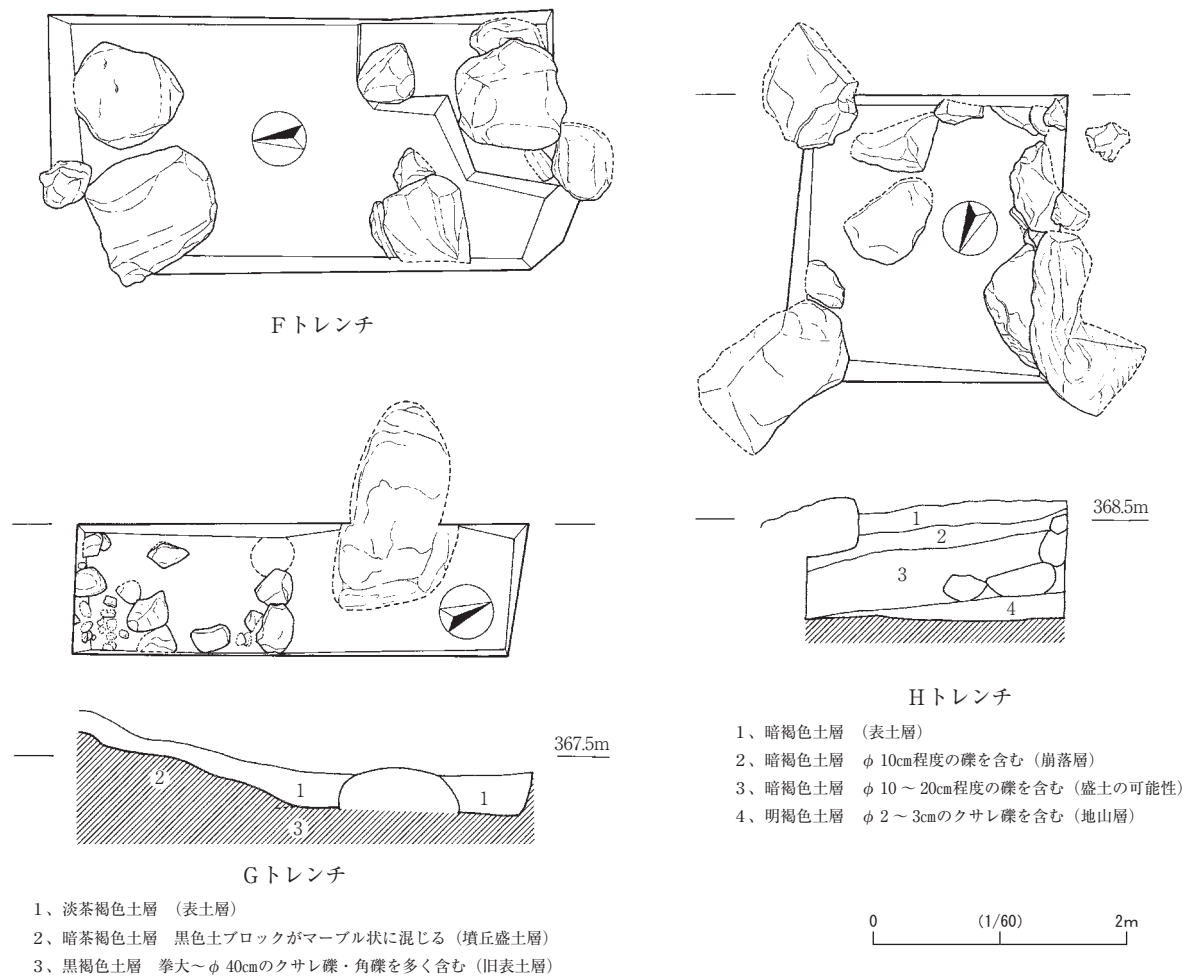


図 12 26 号墳トレンチ個別図② (1/60)

4 調査概要

本古墳は、1998（平成 10）年度に墳丘の測量および試掘調査を、1999（平成 11）年度に試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にとレンチを設定した。

B トレンチ

墳丘南東側の、道路造成のために削平されている部分である。調査の結果、地山面まで削平を行った後に路盤碎石を敷設していることが判明した。本トレンチからは古墳にともなう遺構は検出されなかった。

C トレンチ

墳丘南西側の、石室開口部付近に位置する。調査の結果、表土下わずか数 cm のところで石囲い炉と硬化面が検出された。土層の観察や周辺トレンチとの比高差などから古墳にともなう遺構とは考えられないが、詳細な時期の判定はできず、今回の調査では現状のまま保存することにした。トレンチ北端からは墳丘を構成していたと思われる石材が検出された。検出位置から考えて、墳丘外周の石列ではなく墳丘内部に構築された土留めの石列であろう。

E トレンチ

墳丘南西側の石室開口部に位置する。調査の結果、石室内から連続する羨道の側壁と墳丘外周の石列が検出された。これらは石室前面で連結しており、羨道平面形はわずかに北側に振れる。外周石列内側の墳丘部分は多く

の礫を含む盛土が施されていた。羨道部分には人頭大の礫が多く見られ、閉塞石の残欠と考えられた。石室開口部付近ということもあって土師器や須恵器の破片が多く出土した。

F トレンチ

墳丘北西側のA号墳に近接する部分である。調査の結果、旧表土層の上に設置された墳丘を構成する石列が検出された。E トレンチで検出された外周石列との位置関係から本石列は墳丘内部に埋め込まれた土留めの石列と考えられる。

G トレンチ

墳丘北側に位置するトレンチである。調査の結果、小型の石材が列をなしている状況が検出された。隣接トレンチの状況などから本石列を墳丘外周の石列と判断するのは困難であるが一応の可能性は指摘しておきたい。墳丘盛土は墳丘中心側ほど礫を多く用いているようである。

H トレンチ

墳丘北東側の石室裏側の部分である。トレンチ西端（墳丘側）から大型の石材を石垣状に積み上げた石列が検出された。本石列は周辺トレンチの石列検出状況から墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みであると判断した。

上記の調査結果から、本古墳は14 m内外の、土砂と石材を用いて築造された円墳であると考えられる。

第3節 27号墳

1 立地と現状

27号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約371mに立地する。本古墳の東約18mには29号墳、南約18mには241号墳、南西約22mには242号墳、北西約30mには26号墳が近接する。本古墳は墳丘の南東側がかなり削平されており、横穴式石室の側壁が露出していた。また、道路の敷設によって墳丘の南西側も破壊されていた。

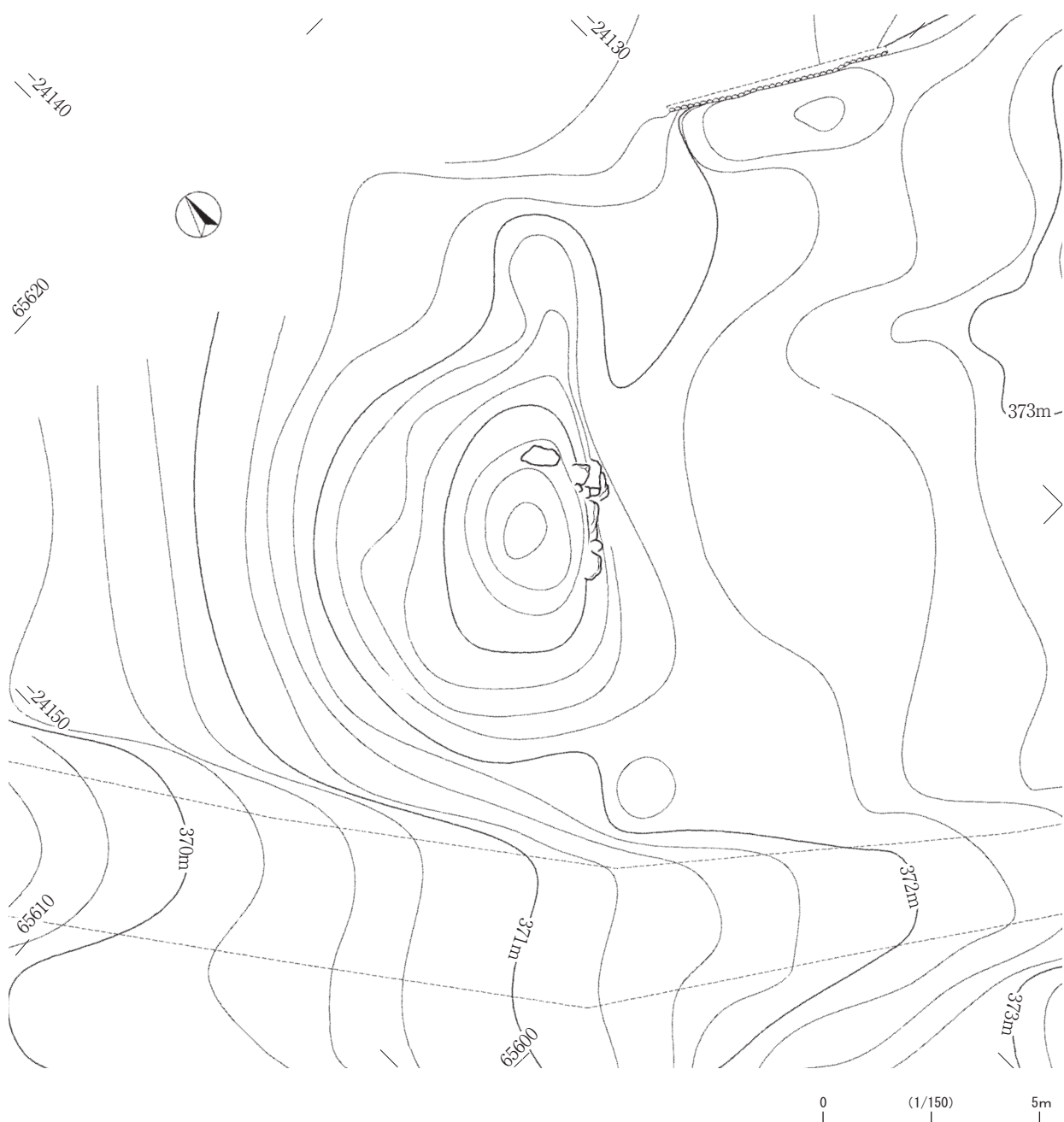


図13 27号墳墳丘測量図 (1/150)

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。墳丘を構成する石列などは外表面では観察できないが、墳丘が削平されているために横穴式石室の側壁や天井石が一部観察できる。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。石室内部は埋没しているため詳細は不明であるが、現状の観察から無袖式の横穴式石室と推測できる。天井石は玄室部に関しては原位置を保っているようである。玄室の主軸は不明であるが、石室は南西に向けて開口している。

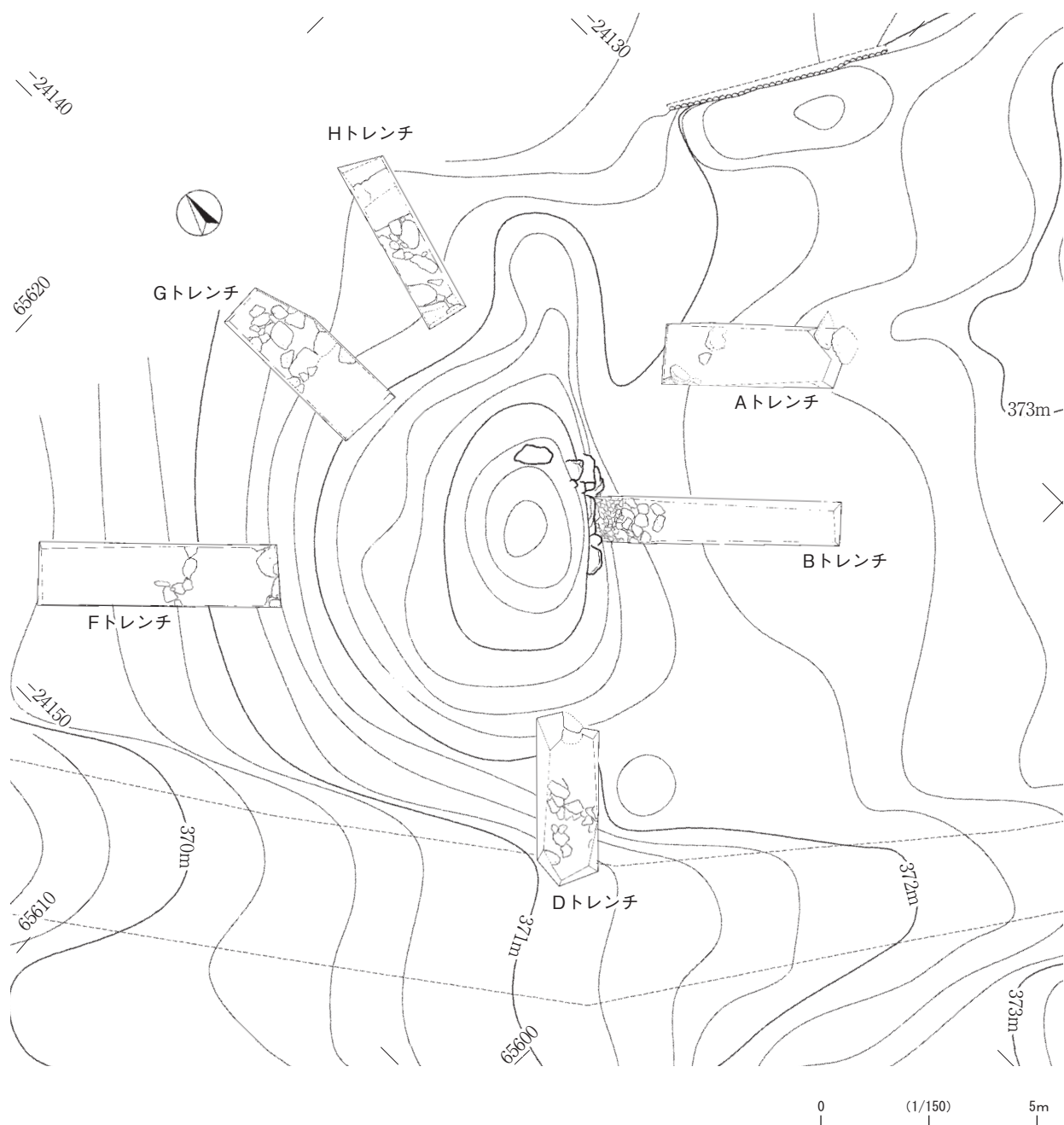


図 14 27号墳調査成果図 (1/150)

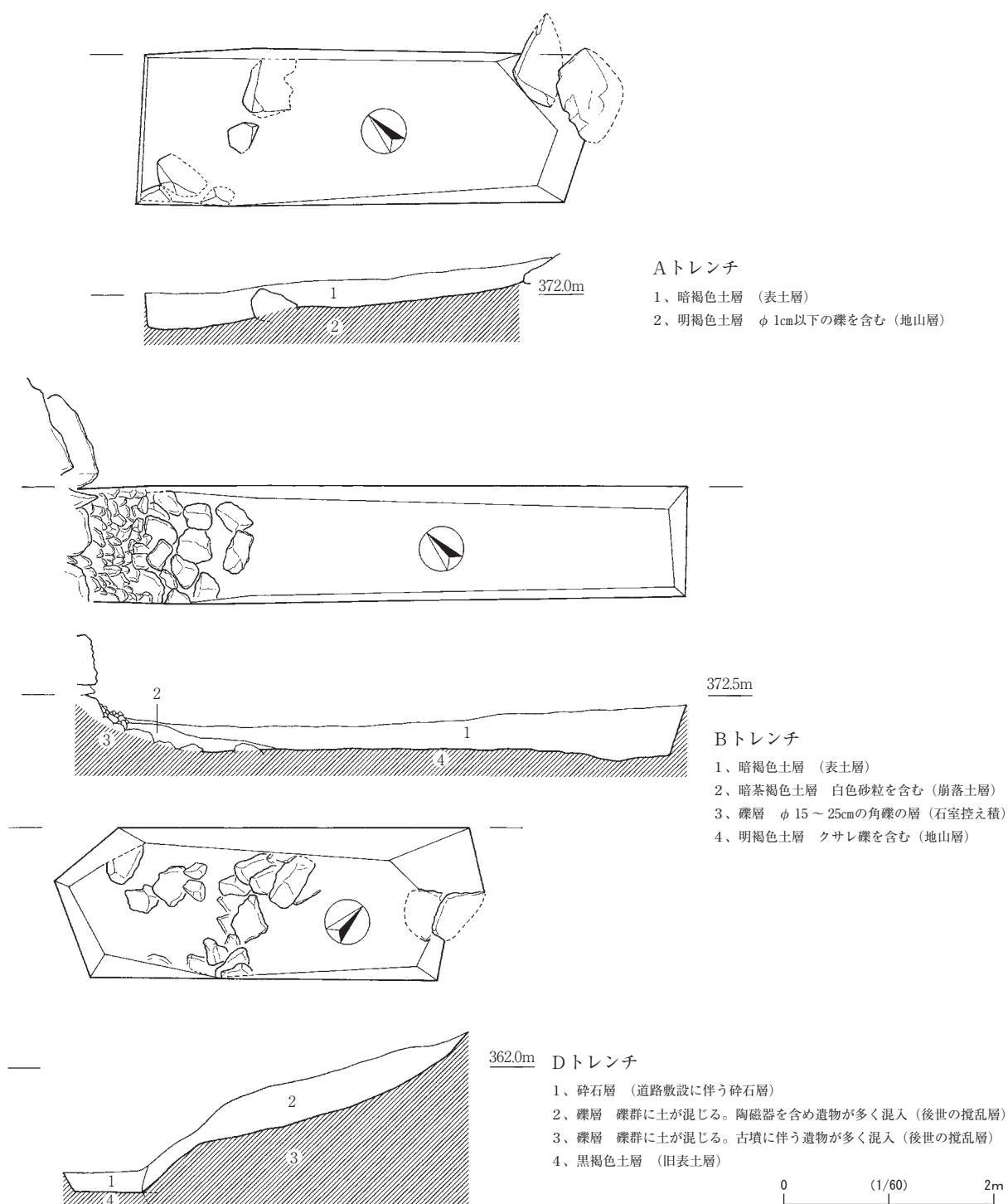


図 15 27号墳トレンチ個別図① (1/60)

4 調査概要

本古墳は、1998（平成 10）年度に墳丘の測量および試掘調査を、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にトレンチを設定した。

A トレンチ

この部分についての記述抜け

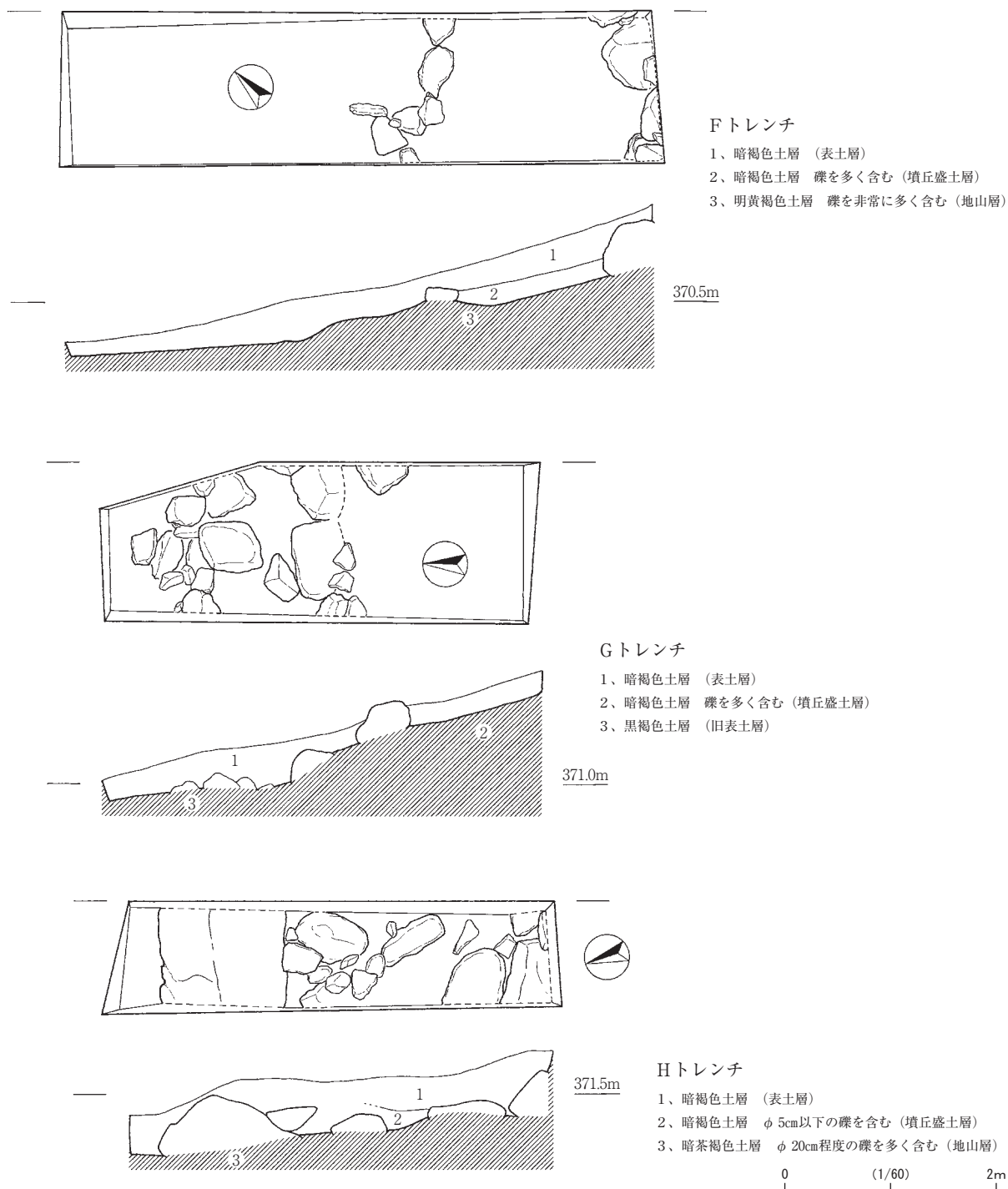


図 16 27 号墳トレンチ個別図② (1/60)

B トレンチ

墳丘南東側の、山側に位置するトレンチである。墳丘盛土は石室が露出するほどに削平されていた。調査の結果、削平は基盤層までおよんでおり、墳丘際で石室の控え積みがわずかに検出されただけであった。検出された石室の控え積みは、石室側に拳程度の礫を多く積み上げ、人頭大程度の石材を外側に配して押さえとするような構造であった。

D トレンチ

墳丘南西側の石室開口部に位置する。トレンチ北東端から石室側壁の一部が検出された。トレンチ中央付近か

らは閉塞施設に関連すると思われるやや大型の礫が検出された。石室開口部付近ということもあって土師器や須恵器の破片が多く出土した。

F トレンチ

墳丘北西側の、谷側にあたる部分である。平成 10 年度の試掘調査で、トレンチ東端から石垣状の石積みが発出され、墳丘の外周と考えられていた。しかし、墳丘外周としては中心からの距離が近いため、さらに外側に石列が廻ることも想定されたのでトレンチを北西側に拡張した。その結果、先に検出された石積みより外側約 1.5 m の所で石列が発出された。脆弱な石列であるが、隣接の G トレンチの調査所見と合わせて、この石列を墳丘外周と判断できよう。

G トレンチ

墳丘北側に位置するトレンチである。トレンチ中央付近から F トレンチで検出された墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みと連結する石列が発出された。また、この外側約 1 m の所からも墳丘の外周と思われる石列が発出された。

H トレンチ

墳丘北側に位置するトレンチである。トレンチ南端から、F・G トレンチで検出された墳丘内に埋め込まれた土留めの石列と連続すると思われる石列が発出された。墳丘外周を明瞭に示す石列は検出されなかったが、当該箇所には巨大な自然石が露頭しており、古墳築造にあたって墳丘裾として取り込んでいた可能性もある。

上記の調査結果から、本古墳は 12 m 内外の、土砂と石材を用いて築造された円墳であると考えられる。

第4節 28・29号墳

1 立地と現状

28・29号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約373mに立地する。本古墳の南約25mには240号墳、南西約24mには241号墳、西約18mには27号墳が近接する。28・29号墳ともに、相当の削平および改変がなされており、調査着手時には墳丘などは判然としない状況であった。

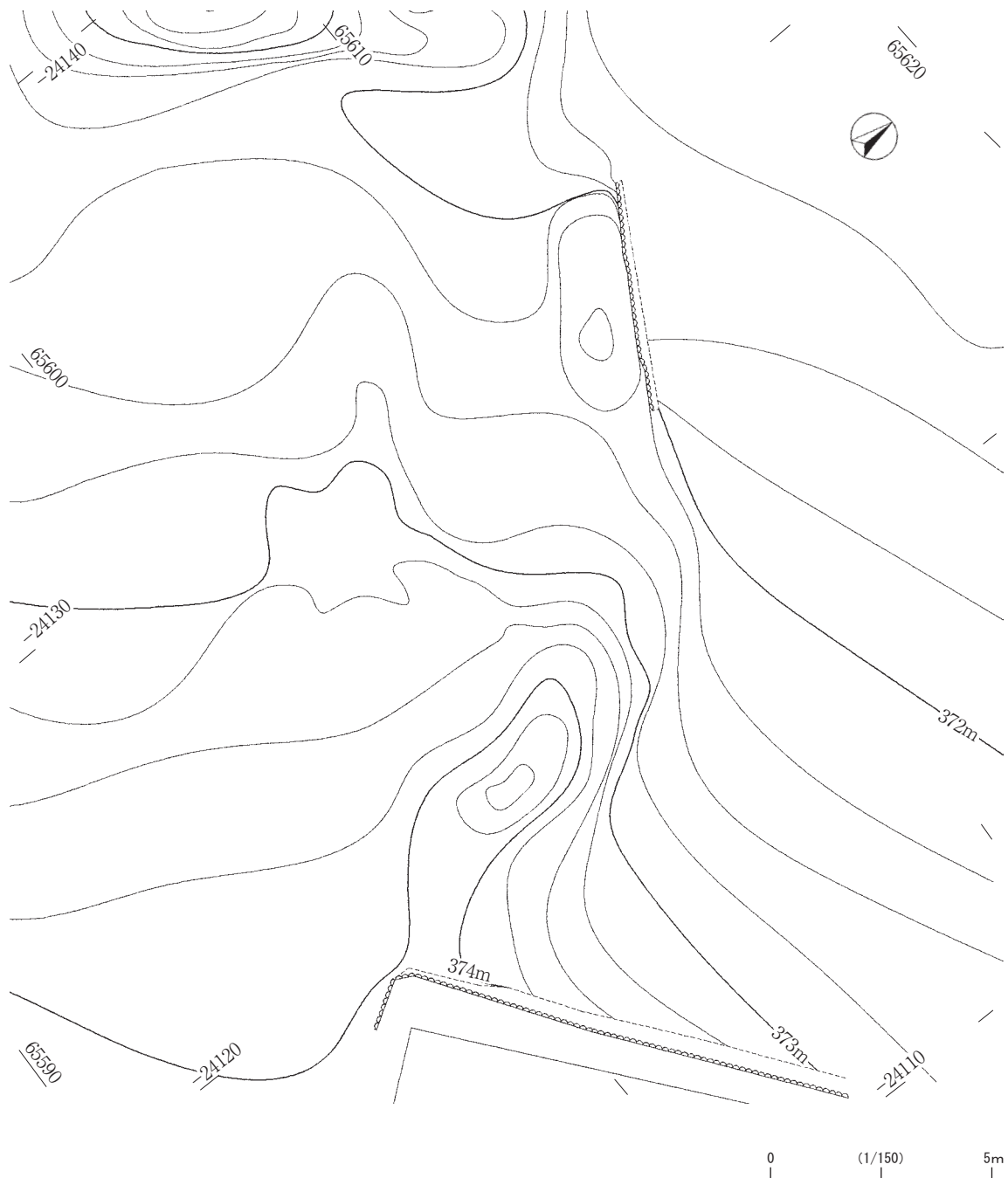


図17 28・29号墳墳丘測量図 (1/150)

2 墳丘・外部施設

調査着手時、28号墳は石垣状を、29号墳は集石状を呈しており、古墳としての外見は保っていなかった。

3 主体部・石室構造

28・29号墳ともに、主体部の種類や構造は不明である。

4 調査概要

28号墳は、1999（平成11）年度に墳丘の測量を、2000（平成12）年度に試掘調査を、2005（平成17）年度に

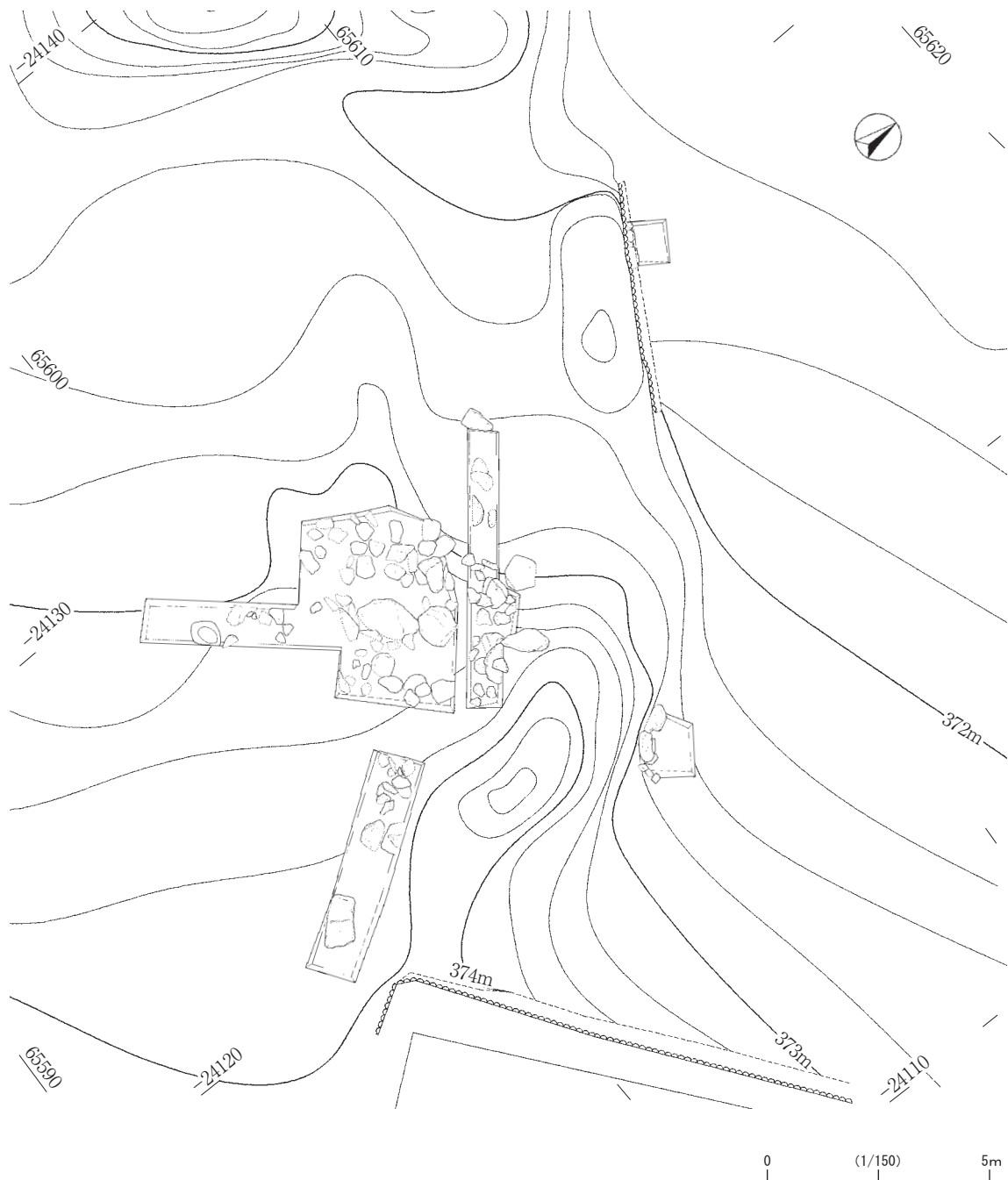


図18 28・29号墳調査成果図（1/150）

発掘調査を実施した。29号墳は、1999（平成11）年度に墳丘の測量および試掘調査を、2000（平成12）年度に試掘調査を、2005（平成17）年度に発掘調査を実施した。28・29号墳ともに墳丘・主体部の主軸方位が不明であったので任意にトレンチを設定して試掘調査を行った。

28号墳

本古墳は、27・29号墳の間に石垣状のわずかな高まりとしてのみ認識されるものである。石垣の北側にトレンチを設定して調査を行ったが、地山面まで削平を行った後に根石を据えて石垣を積み上げている状況が確認された。

史跡大室古墳群内では、畑造成のための石垣が多く作られているが、そのほとんどが同様の手法を用いて築かれているため、当該箇所の石垣も畑造成時に築かれた石垣と判断できる。よって、栗林紀道氏によって実施された分布調査において28号墳とされた本墳は古墳である可能性がなくなったと判断するにいった。

29号墳

29号墳は、北西側に隣接する27・28号墳と同様に栗林紀道氏によって古墳番号が付与されたものである。現状では東側の集石の高まりと、西側に低平に広がる大型の石材のまとまりとして認識できるのみである。西側の比較的大型の石材の散乱する部分を中心にトレンチを設定して調査を行った。

調査の結果、墳丘と認識されている高まりについて、埴輪などの遺物の散布状況から古墳であると判断することはできるが、今回の調査範囲では明確に古墳に関する遺構は検出することができなかった。調査区中央付近から比較的大型の板状の石材が検出され、かつて埋葬施設との関連が指摘されたが、詳細に観察した結果、地山層に含まれる自然石であることが判明した。

上記の調査結果から、28号墳は後世の石垣であることが判明した。29号墳は、詳細は不明ながらも古墳であることが確認できた。のみならず29号墳から出土した埴輪は5世紀代の特徴を持つとの指摘もあり、村東単位支群における積石塚築造の動向を探るうえで非常に重要な成果となった。

第5節 235号墳

1 立地と現状

235号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約392mに立地する。本古墳より南東側（山側）は沢地形となり傾斜がきつくなる。周辺に隣接



図 19 235号墳墳丘測量図 (1/150)

する古墳は現在確認されていないが、これはかつて大規模な造成が行われたためと考えられる。

本古墳は、墳丘の南東側がかなり削平されており、横穴式石室の天井石や側壁が露出していた。また、露出した壁体から石材の崩落が進み非常に危険な状況であった。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。墳丘外周を廻る石列が、石室開口部から連続しているのが現状で観察できる。

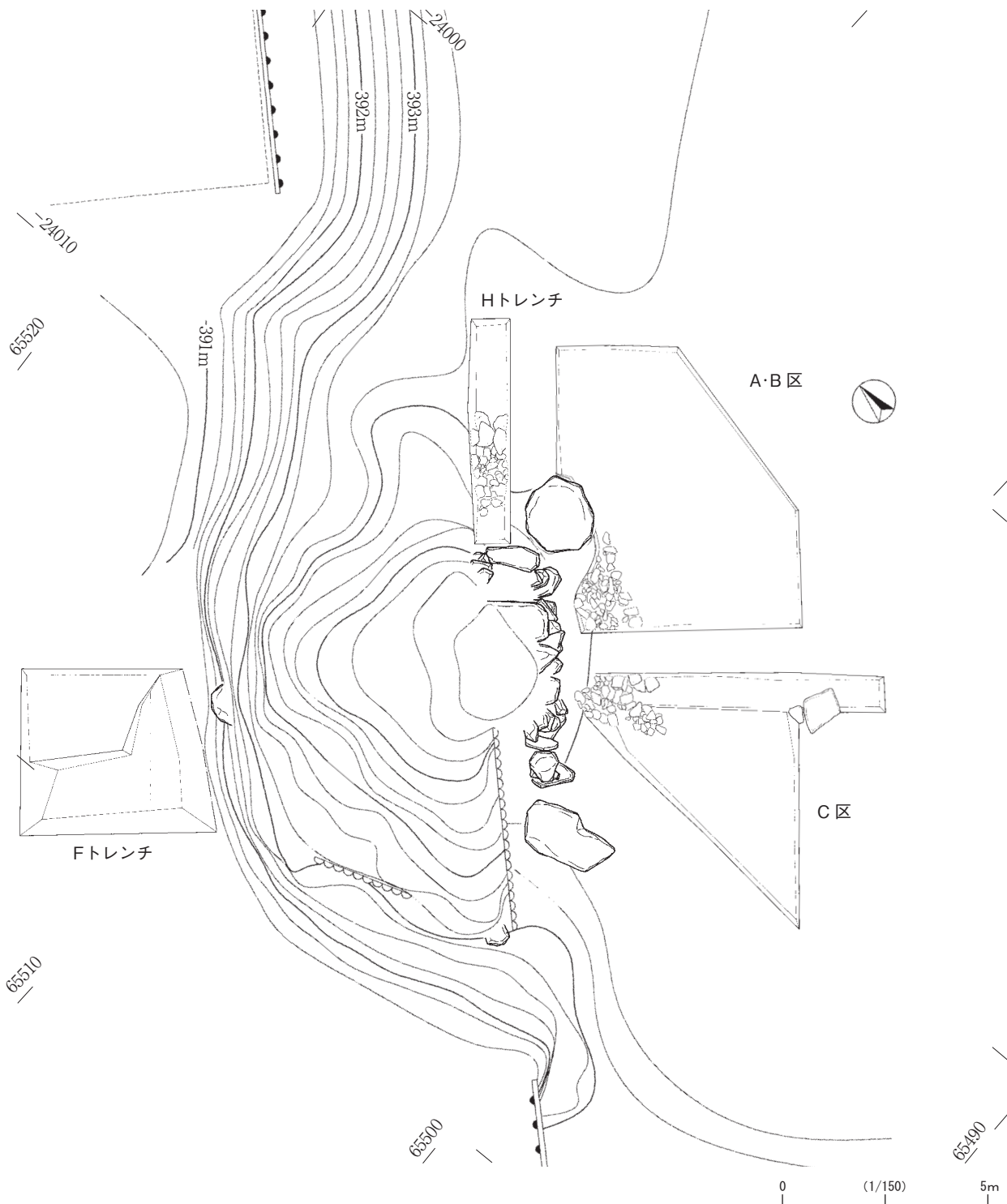
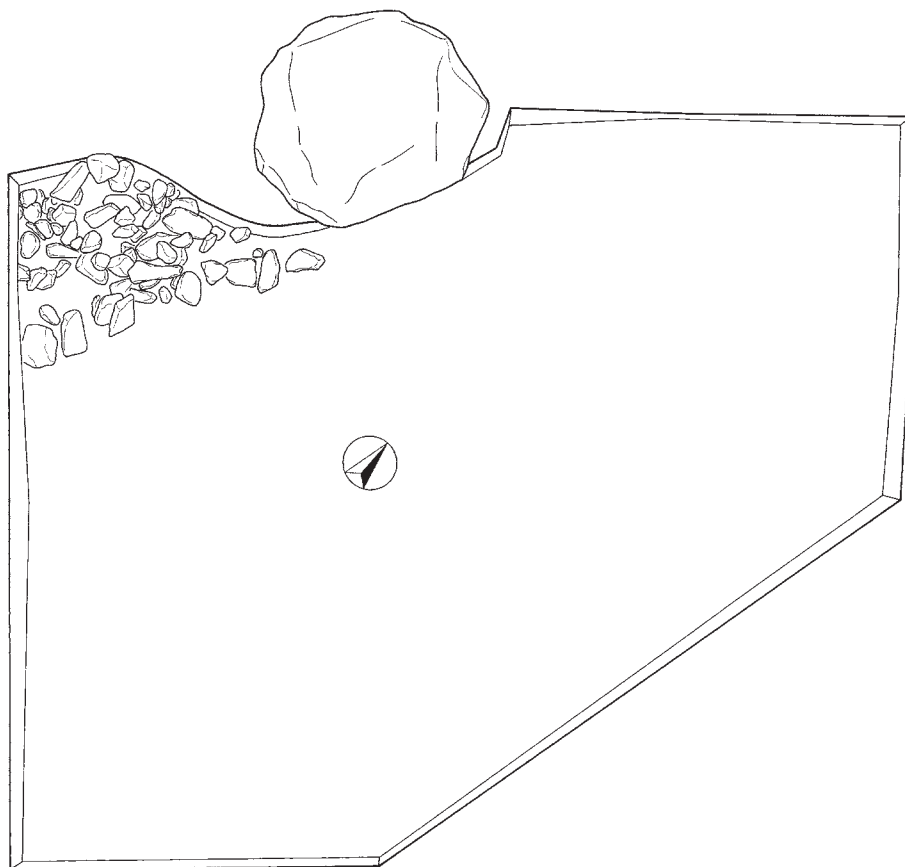
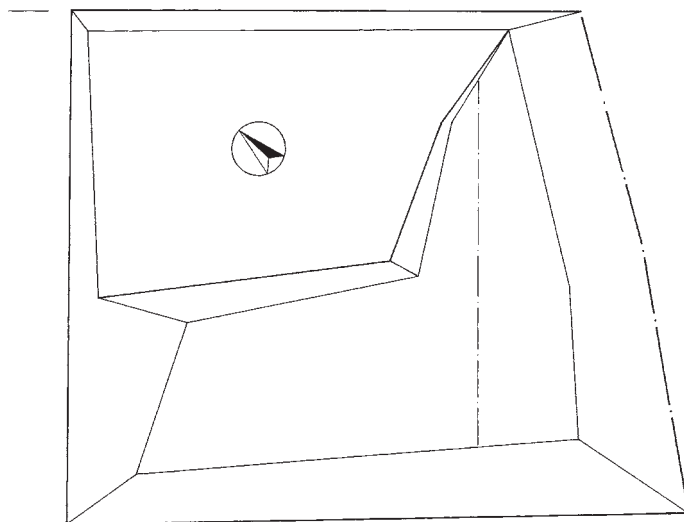


図 20 235 号墳調査成果図 (1/150)

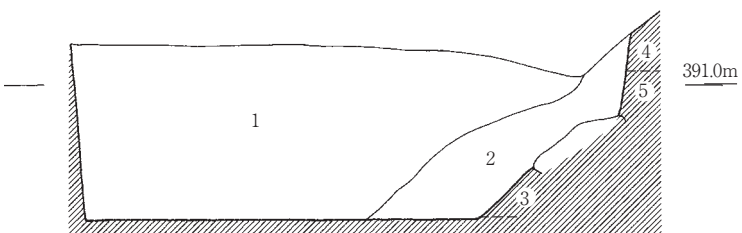


A・B区



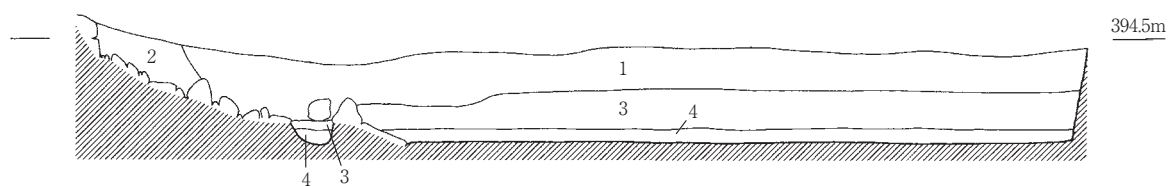
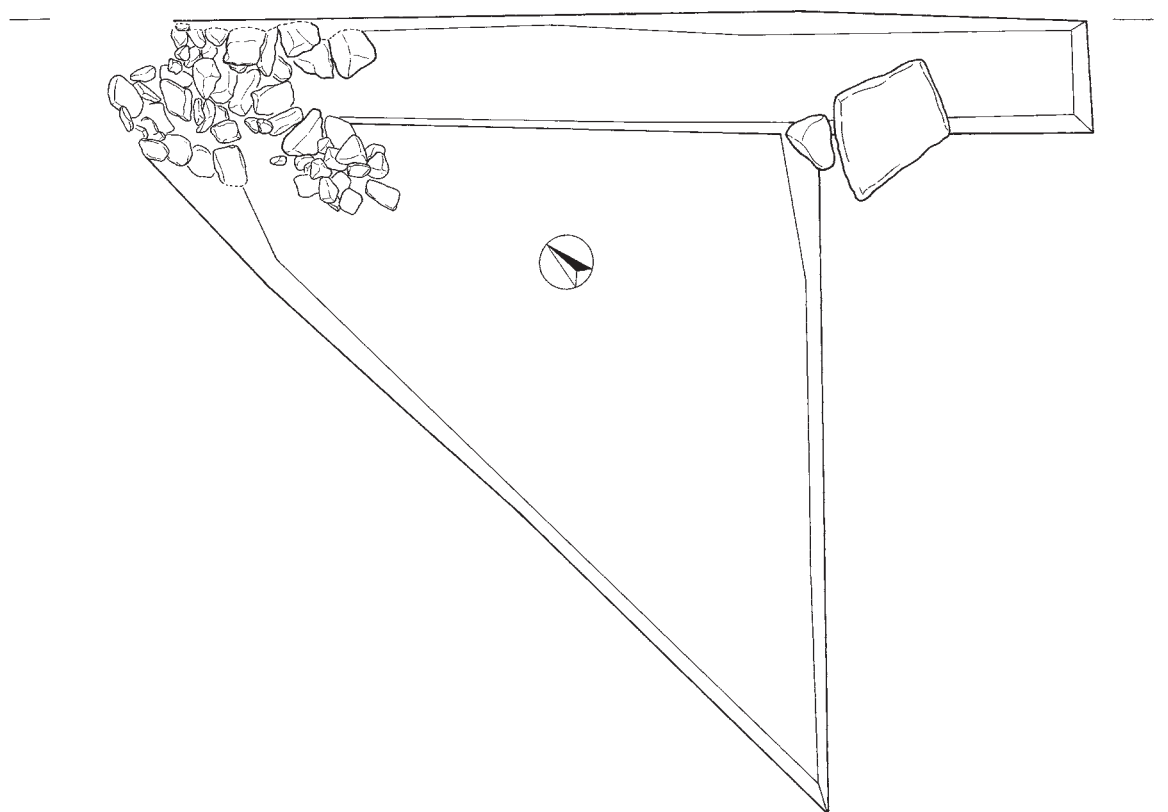
F トレンチ

- 1、黄褐色土層（造成土層）
- 2、石ガラ層（碎石）
- 3、暗褐色土層（削平後の崩落土）
- 4、暗褐色土層 地表近くは風化が激しい（旧表土層）
- 5、淡黄褐色土層 φ 10～15cmの礫を多く含む（地山層）



0 (1/60) 2m

図 21 235 号墳トレンチ個別図① (1/60)



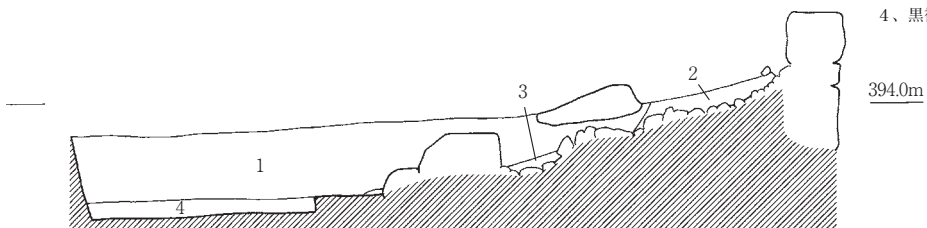
C区

- 1、明黄褐色土層（表土・造成土）
- 2、明褐色土層 小砂利を含む（削平後の崩落土）
- 3、黒褐色土層 ϕ 10 ~ 20cmの角礫を含む（旧表土層）
- 4、明黄褐色土層（地山層）



Hトレンチ

- 1、暗茶褐色土層（表土層・造成土）
- 2、暗茶褐色土層（削平後の堆積層）
- 3、暗茶褐色土層
 ϕ 10 ~ 20cmの礫主体（石室控え積）
- 4、黒褐色土層（旧表土層）



0 (1/60) 2m

図 22 235 号墳トレンチ個別図② (1/60)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は無袖式の横穴式石室である。石室内部は埋没しているため詳細は不明であるが、現状の観察から無袖式の横穴式石室と推測できる。天井石は玄室最奥部の一枚と、羨道部の石材が落下している。玄室の主軸はN - 49° - Eを測り、南西方向に向けて開口している

4 調査概要

本古墳は、2000（平成 12）年度に墳丘の測量を、2001（平成 13）年度に試掘調査を、2004（平成 16）年度に発掘調査を実施した。墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にトレンチを設定した。

A・B区

2001（平成 13）年度にHトレンチが設定された箇所の南東側にあたり、かつて養鶏場建設にともなって墳丘盛土部分が削平された部分である。墳丘の残存範囲確認を目的として掘り下げを行った。調査の結果、墳丘寄りの1.5 mほどの範囲からは石室構築にともなう、人頭大程度の控え積みの石材がわずかに検出されたが、その他の部分は基盤層上面まで攪乱がおよんでおり、墳丘の範囲を示す遺構は検出されなかった。

C区

平成 13 年度にCトレンチが設定された箇所にあたり、かつて養鶏場建設にともなって墳丘盛土部分が削平された部分である。墳丘の残存範囲確認を目的として掘り下げを行った。調査の結果、墳丘寄りの1.5 mほどの範囲からは石室構築にともなう控え積みの石材がわずかに検出されたが、その他の部分は基盤層上面まで攪乱がおよんでおり、墳丘の範囲を示す遺構は検出されなかった。なお、検出された控え積み石の外側にやや大型の石材が散乱していたが、散乱の具合が著しく、本来の姿を読みとることは困難であった。当初は控え積みの石材を押さえる役割を果たしていたのかもしれない。

Fトレンチ

墳丘の西側（谷側）にあたる部分で、大規模に削平・造成が行われている部分である。墳丘範囲を示す裾の確認を行うために調査区を設定、掘り下げを行った。発掘調査の結果、削平は墳丘裾レベルをはるかに下回っており、本調査区内では墳丘の範囲を確認することはできなかった。トレンチ外の南東側に露頭している大型の石材が墳丘外周を廻る石列に連続するものと思われる。

Hトレンチ

墳丘北東側に墳裾を確認するために設定した。調査の結果、墳裾は検出できなかったが、石室の控え積みの構造が良好に残存していた。石室側では人頭大程度の礫が積み上げられていたが、外側には大型の石材が積み上げられており、控え積み石の押さえとなっている状況が確認できた。

第6節 237号墳

1 立地と現状

237号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約378mに立地する。本古墳の北東約28mには238号墳、北西約18mには239号墳が近接する。本古墳は、周辺が大規模に造成されている中に集石状の高まりが観察される箇所である。南側には音無川が当該箇所を洗うように西流している。

2 墳丘・外部施設

外表面には積み上げられた石材が観察できる。高まりの上部には加工したような柱状の石材が存在しているが、横穴式石室の用材としては疑問がある。

3 主体部・石室構造

主体部の構造などは不明である。



図23 237号墳墳丘測量図 (1/150)

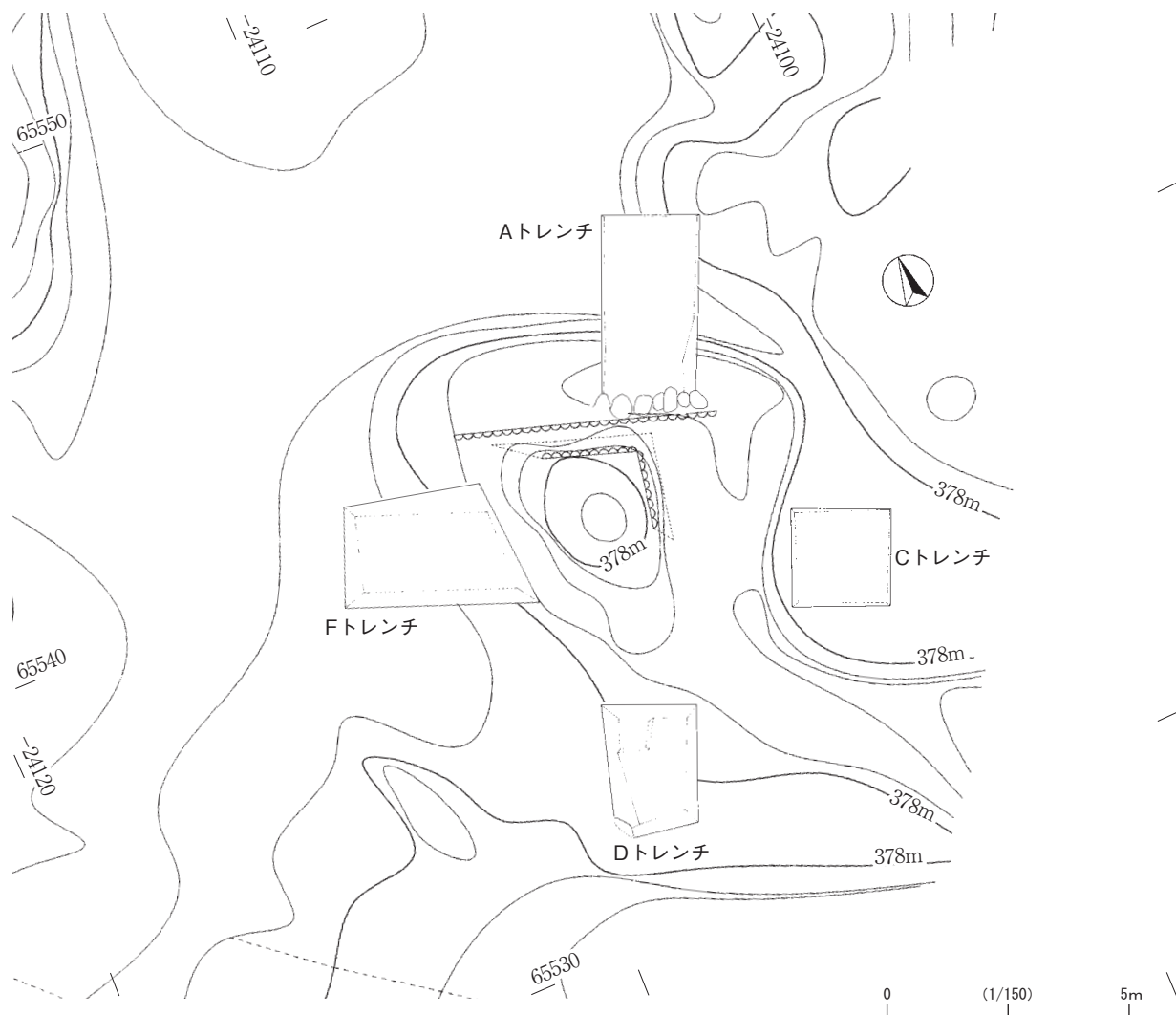


図 24 237 号墳調査成果図 (1/150)

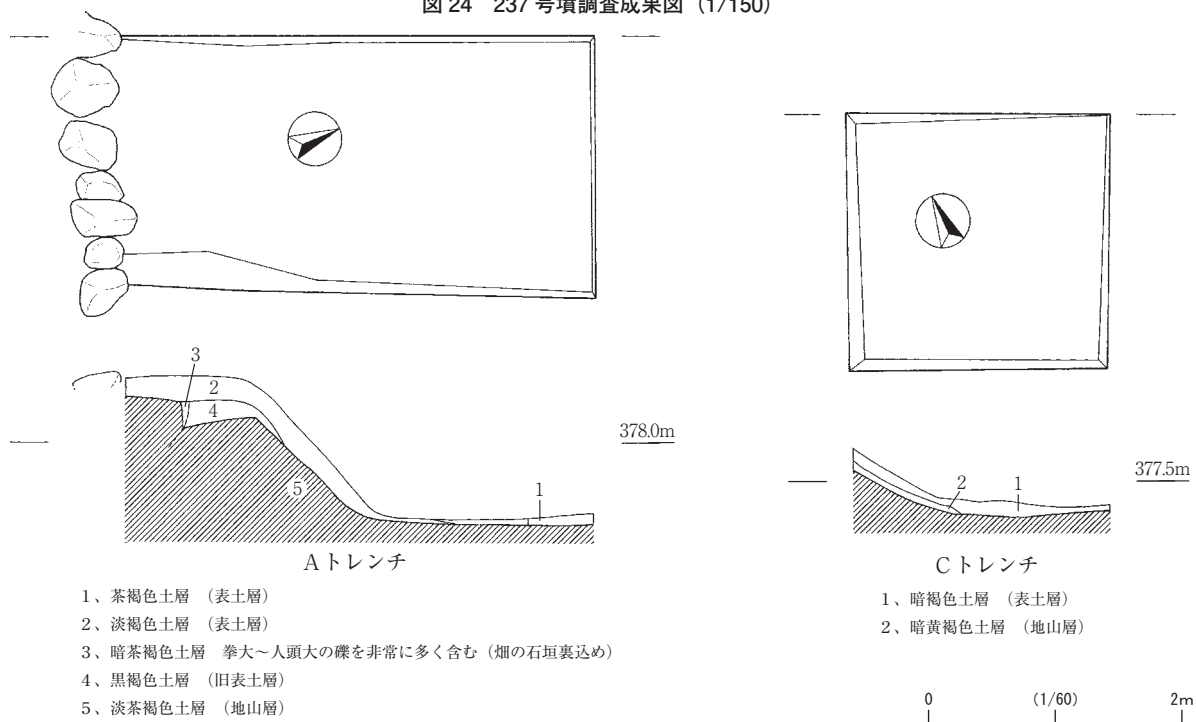


図 25 237 号墳トレンチ個別図① (1/60)

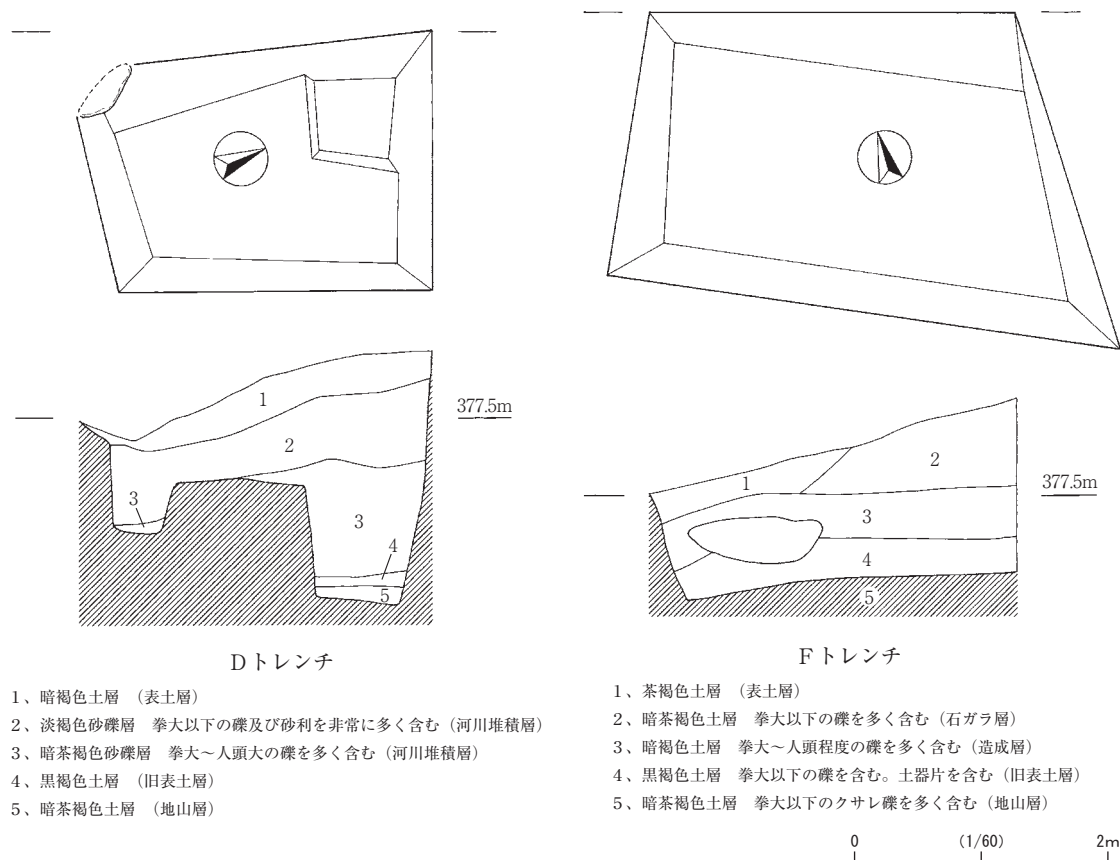


図 26 237 号墳トレンチ個別図② (1/60)

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度に墳丘の測量を、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2004（平成 16）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では現在の高まりの主軸を中心に八等分し、北東側から時計回りに A～H 区として必要箇所にトレンチを設定した。

A トレンチ

墳丘主軸を仮に南西方向に設定した場合、推定される埋葬主体部位置の裏側にあたる位置である。調査の結果、現地表面下 10cm 内外で削平を受けた基盤層上面が検出された。墳丘とされる高まり部分においても同様で、周辺で土砂採取が行われた際に当該部分が削り残されたものと考えられる。

C トレンチ

2000（平成 12）年度に設定された F トレンチと墳丘とされる高まりをはさんで対になる位置である。A 調査区同様に地表下より削平された基盤層が確認された。墳丘とされる高まりに向かって立ち上がっているが、土層の堆積状況から周辺と同様に土砂採取が行われた際に削り残されたものと考えられる。

D トレンチ

墳丘状の高まりの南側に位置し、史跡内を流下する音無川現流路に接している。掘り下げを行ったところ、砂礫が厚く堆積していた。音無川による堆積の結果と思われる。基盤層上面には黒褐色の包含層が堆積していた。この包含層の堆積時期の詳細は不明であるが、出土遺物の年代から、古墳時代以降であろうと思われる。

F トレンチ

2000（平成 12）年度に試掘トレンチが設定された箇所である。2004（平成 16）年度は調査範囲を若干拡大し

て掘り下げを行った。基盤層上面に若干の包含層が残存していたが、墳丘とみられる高まりはこれより上部に積み上げられていることが判明した。この包含層の堆積時期に関しては不明である。調査の結果、237号墳は墳丘状の外観を呈するものの、古墳時代以降に形成された高まりであると判断するに至った。

以上、A・Cトレンチの調査所見から、当該高まりが周辺の造成時に削り残されて島状になったことが判断できる。また、Dトレンチの調査所見から、当該高まりの下層の堆積時期が古墳時代以降であることなどから、当該高まりは古墳ではないと判断するにいたった。

第7節 238号墳

1 立地と現状

238号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約379mに立地する。本古墳の南西約28mには237号墳、同じく南西約25mには239号墳、北西約37mには240号墳が近接する。本古墳は墳丘周囲が全て削平されており、南側は新たに石垣が構築されていた。

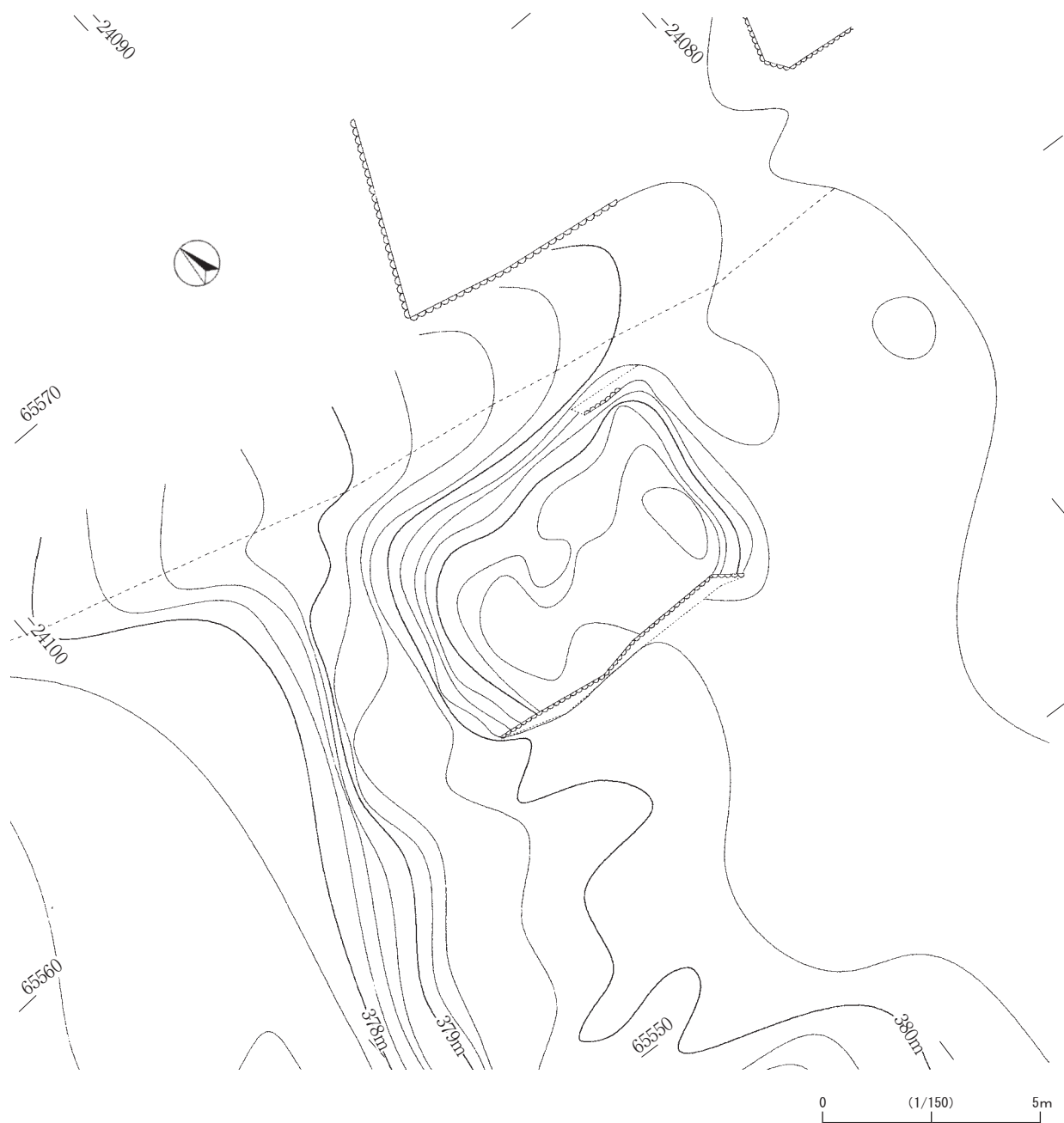


図 27 238号墳墳丘測量図 (1/150)

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。墳丘を構成する石列などは外表面では観察できないが、墳頂部に横穴式石室の奥壁の上端部分が露出していた。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。石室内部は埋没しているため詳細は不明であるが、現状の観察から胴張りで小型の横穴式石室と推測できる。天井石は残存していない。玄室の主軸は不明であるが、石室は南西に向けて開口している。

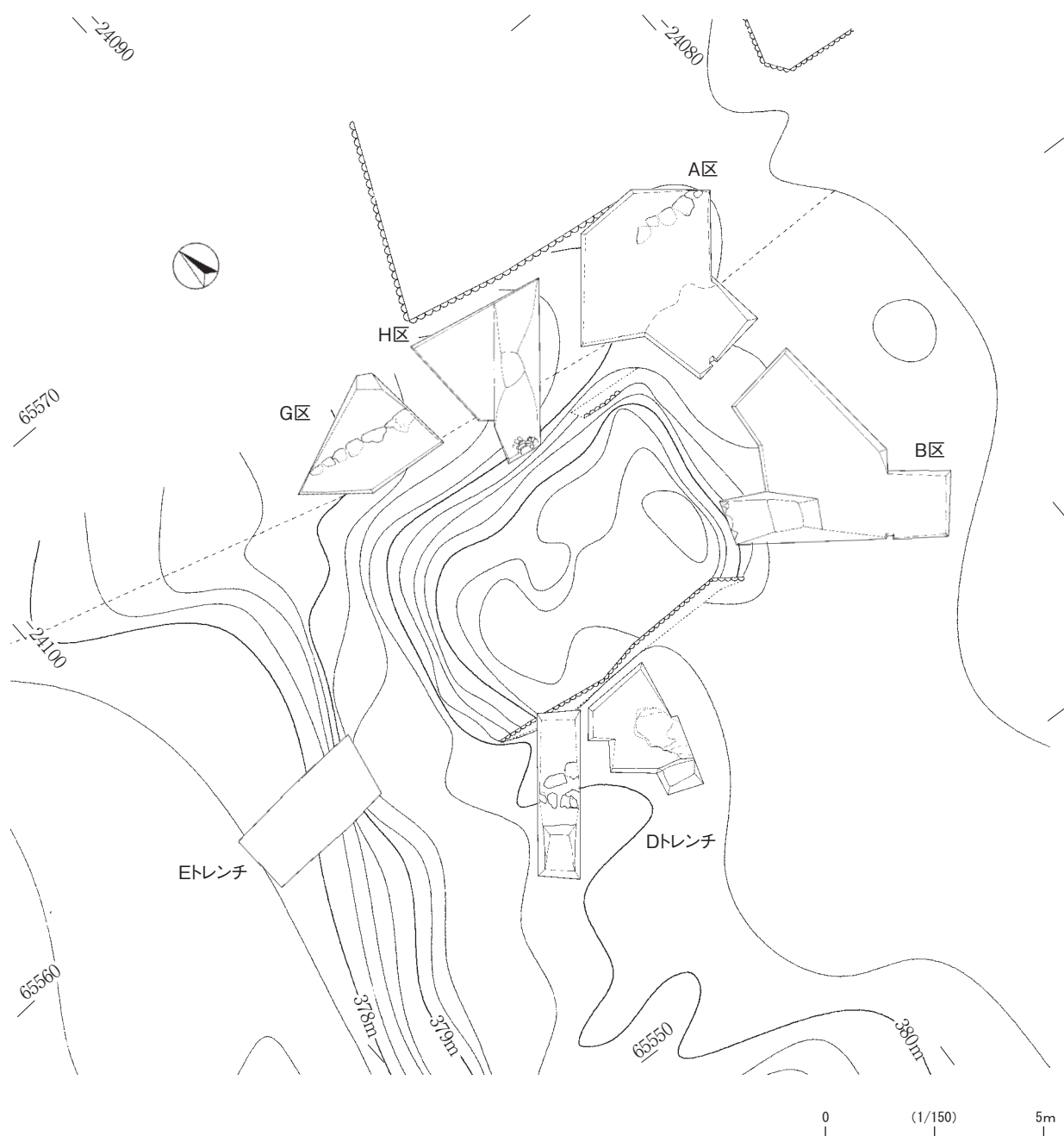


図 28 238 号墳調査成果図 (1/150)

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度に墳丘の測量を、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2004（平成 16）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にトレンチを設定した。

A 区

墳丘の北東部分、林道によって削平を受けている部分である。墳丘残存範囲と林道敷設にともなう墳丘への影響を確認するために掘り下げを行った。現地表下 10cm 内外で礫を多く含む基盤層が検出された。しかし、林道敷設に際して削平されており、本調査区内では墳丘の残存は確認できなかった。なお、調査区内から東西方向に伸びる石列が検出されたが、これは後世に地境として設置されたものである。

B 区

2000（平成 12）年度に B トレンチが設定された箇所である。墳丘残存範囲を確認するために調査区面積を広げて掘り下げを行った。調査の結果、調査区のほとんどに深い攪乱がおよんでいることが判明した。本調査区からは古墳に関わる遺構は確認できなかった。なお、トレンチの墳丘側では、拳大の礫と土で墳丘を盛り上げていることが確認できた。

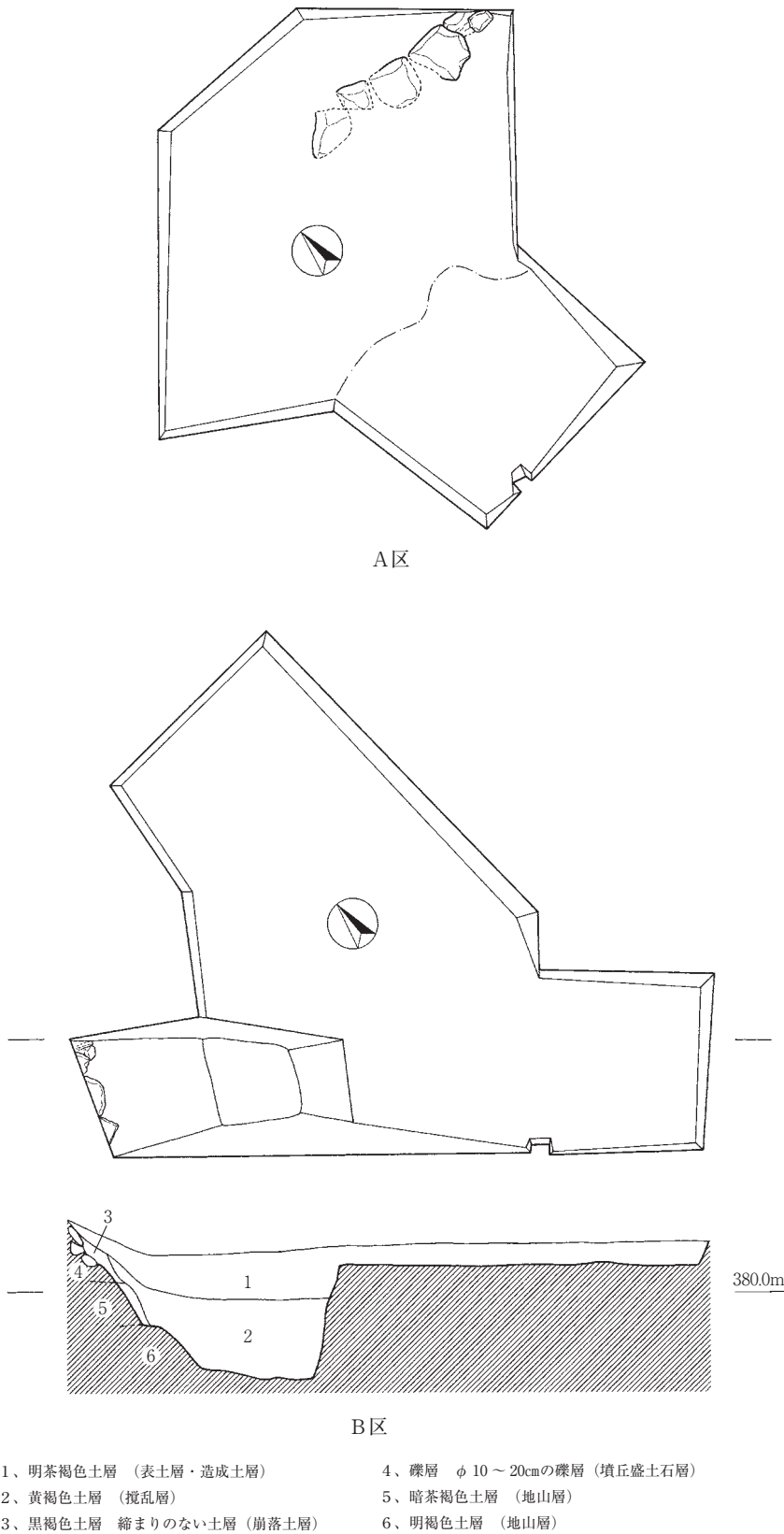
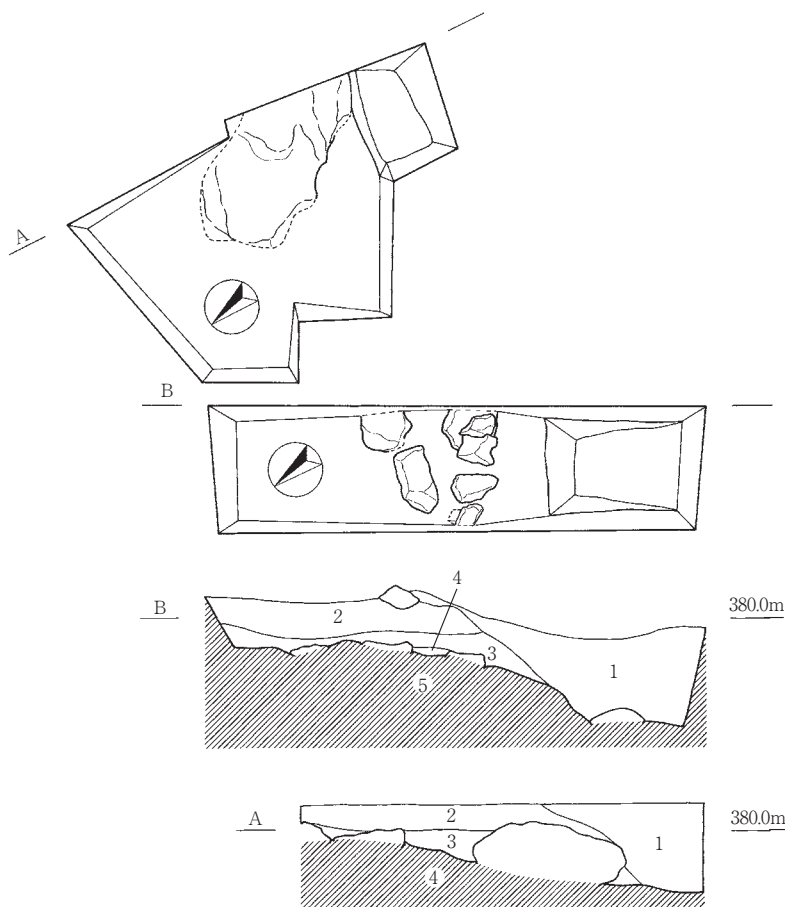


図 29 238 号墳トレンチ個別図① (1/60)



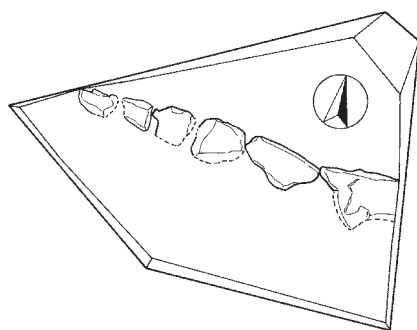
Dトレンチ

Aセクション

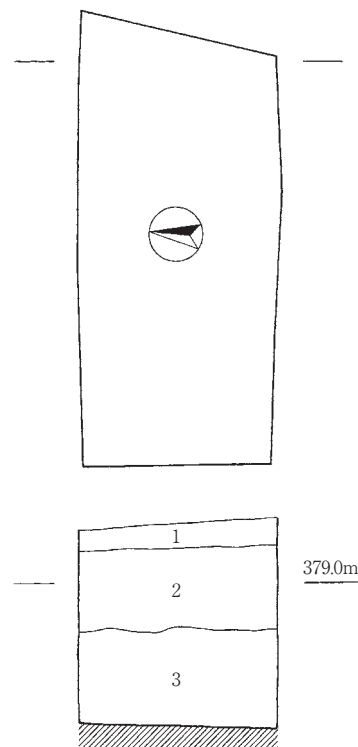
- 1、黄褐色土層（攪乱層）
- 2、暗褐色土層（表土層）
- 3、暗褐色土層（耕作土層）
- 4、明褐色土層（地山層）

Bセクション

- 1、暗褐色土層（攪乱層）
- 2、暗褐色土層（表土層）
- 3、暗褐色土層（耕作土層）
- 4、暗褐色土層（耕作土層）
- 5、明褐色土層（地山層）

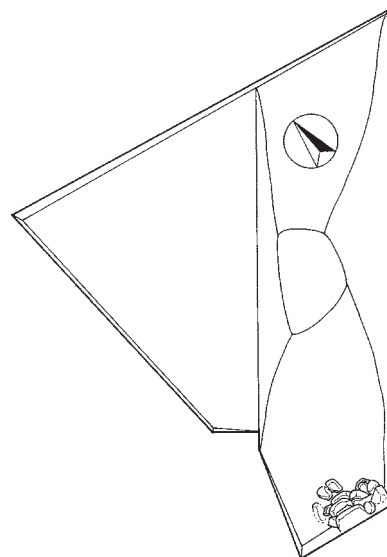


G区



Eトレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、暗茶褐色土層
黒色土がブロック状に混入（盛土層？）
- 3、明橙褐色土層（地山層）



H区

0 (1/60) 2m

図30 238号墳トレンチ個別図② (1/60)

D トレンチ

地山直上で大小の石材が散乱した状況で検出されたが、その検出状況から古墳にともなう施設であるという確証は得られなかった。石室開口部付近であるからか、土師器と須恵器の破片が数点出土した。

E トレンチ

墳丘西側で、大規模な削平が行われている箇所である。墳丘残存範囲の確認を目的にトレンチを設定した。掘り下げを行ったところ、現地表下数cmで削平された基盤層が検出され、本調査区内からは墳丘を構成する盛土等を確認することはできなかった。

G 区

墳丘の北西部分、林道によって削平を受けている部分である。墳丘残存範囲と林道敷設にともなう墳丘への影響を確認するために掘り下げを行った。現地表下 10cm内外で礫を多く含む基盤層が検出された。しかし、林道敷設に際して削平されており、本調査区内では墳丘の残存は確認できなかった。なお、調査区内から東西方向に伸びる石列が検出されたが、これは後世に地境として設置されたものである。

H 区

墳丘の北西部分、林道によって削平を受けている部分である。墳丘残存範囲と林道敷設にともなう墳丘への影響を確認するために掘り下げを行った。現地表下 10cm内外で礫を多く含む基盤層が検出された。しかし、林道敷設に際して削平されており、本調査区内では墳丘の残存は確認できなかった。なお、トレンチの墳丘側では、拳大の礫と土で墳丘を盛り上げていることが確認できた。

以上の調査結果から、墳丘の範囲は確認することができなかったが、本古墳が胴張りの小型の石室を持つ後期後半期の古墳であることが確認できた。

第8節 239号墳

1 立地と現状

239号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約376mに立地する。北約25mには240号墳、北東約25mには238号墳、南東約18mには237号墳が近接している。本古墳は、墳丘の南西側（開口部）が道路敷設によって、東側が造成によってそれぞれ削平されていた。また、墳丘の北側は戦後に搬出石材の集積場として利用されていたため、当時の石材がそのまま放置されている状況である。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。墳丘の西側では、墳丘外周を廻る石列が一部分露頭しているのが現状で観察できる。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は無袖式の横穴式石室で、残存状況は極めて良好である。玄室の主軸はN-28°-Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室の規模は、奥壁から残存している羨道側壁最前端部までが7.00m、玄室長4.43m、玄室幅は奥壁部で1.12m、石室中央部で1.15m、楣石部で0.82mを測る。

4 調査概要

本古墳は、1999（平成11）年度に墳丘の測量を、2000（平成12）年度に試掘調査を、2004（平成16）年度に発掘調査を実施した。墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にトレンチを設定した。

A区

2000（平成12）年度にAトレンチが設定された部分である。調査の結果、墳丘にともなう石列が2列検出された。内側の石列は墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みで、外側の石列は墳丘外周を廻る石列である。墳丘外周を廻る石列は調査区西部においては削平されていた。

Cトレンチ

本古墳の237号墳側で、大きく削平されている部分である。基盤層まで削平を受けており、墳丘範囲を示す痕跡は既に残存しておらず、墳丘側では盛土石が露出している状態であった。

Eトレンチ

石室前面の後世の石垣が積み上げられている部分である。石室設置面のレベルを確認するために、石垣部分の除去を行った。掘り下げの結果、石室前面は後世の石垣構築にともない若干の攪乱がおよんでいることが判明した。石垣を解体した際に、裏込めとして入れられていた礫群の中から多くの鉄鏝が出土した。あとにも述べるが、墳丘部分の発掘調査においても鉄鏝が出土しており、この古墳を特徴付ける現象と言えそうである。調査の結果、初葬時の床面レベルは約367.6mと確認できた。

G区

平成12年度にGトレンチが設定されていた部分である。墳丘範囲を示しているとみられる石列が検出されて

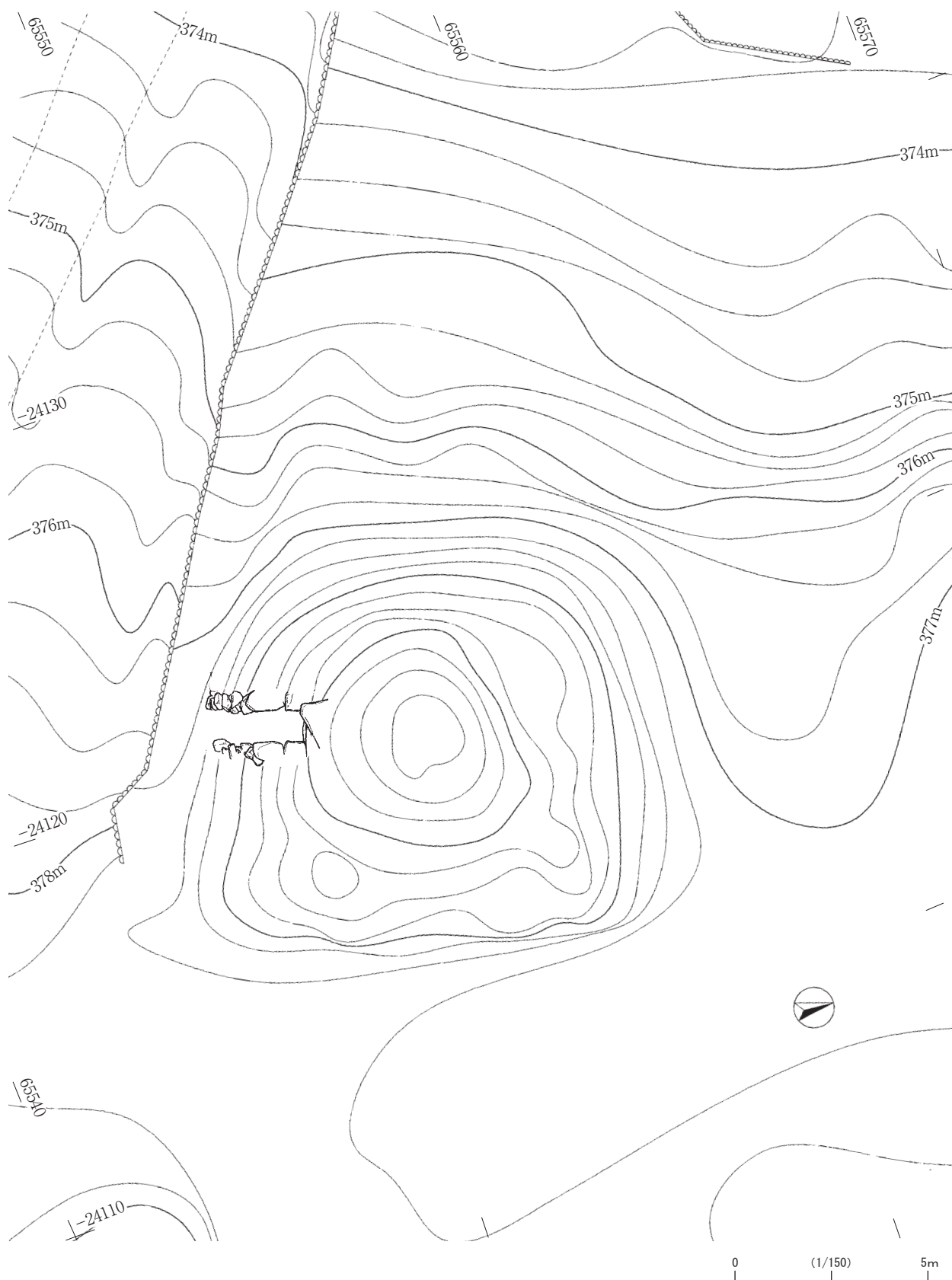
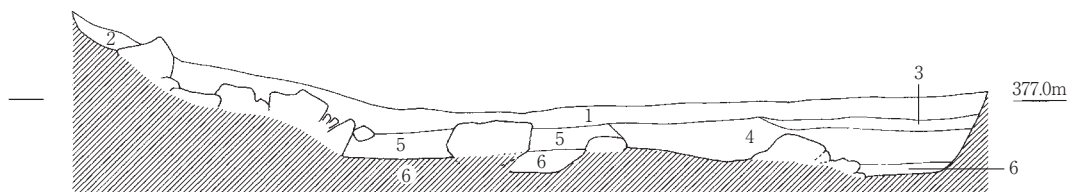
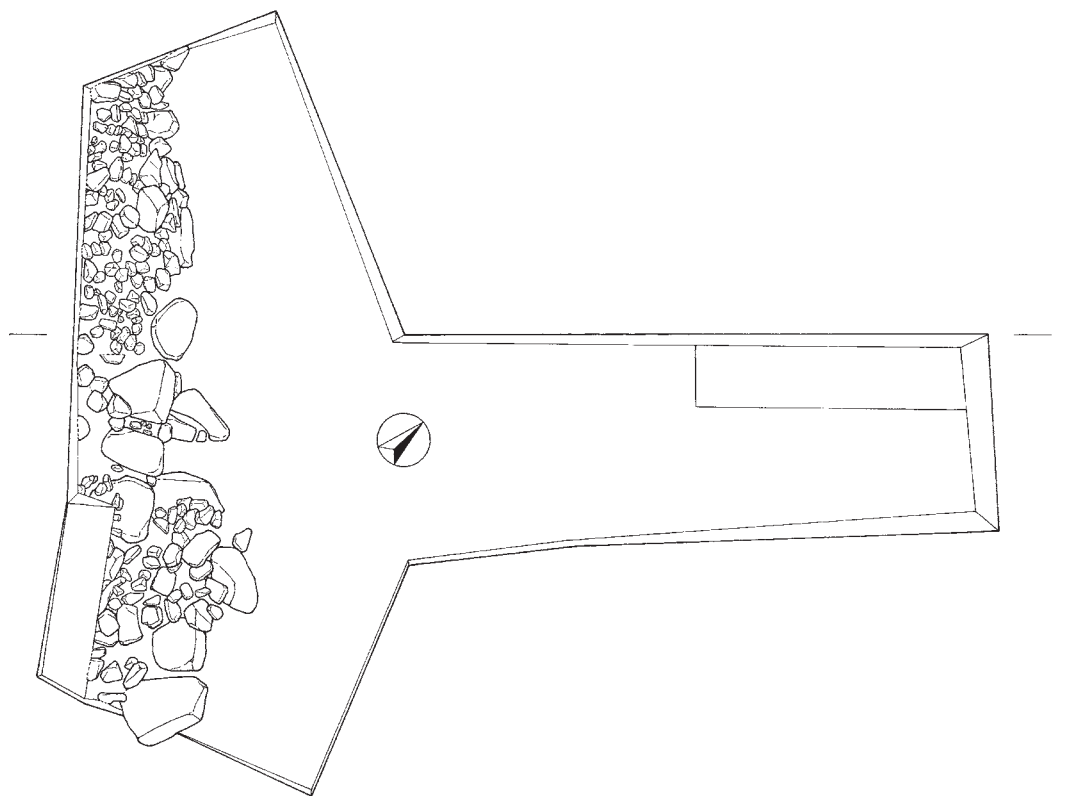
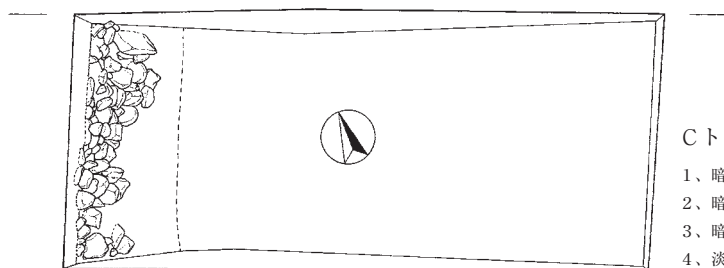


图 31 239 号墳丘測量図 (1/150)



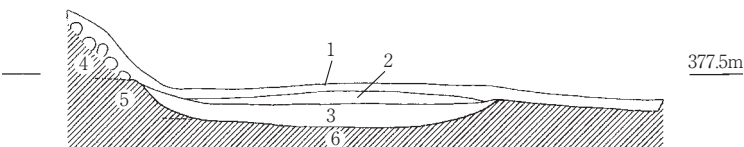
A区

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| 1、暗褐色土層（表土層） | 4、黒褐色土層（攪乱層） |
| 2、暗褐色土層（墳丘表土層） | 5、黒褐色土層 拳大～人頭大の礫を多く含む（旧表土層） |
| 3、暗黄褐色土層 拳大以下の礫・碎石を非常に多く含む（道路の造成土） | 6、茶褐色土層（地山層） |



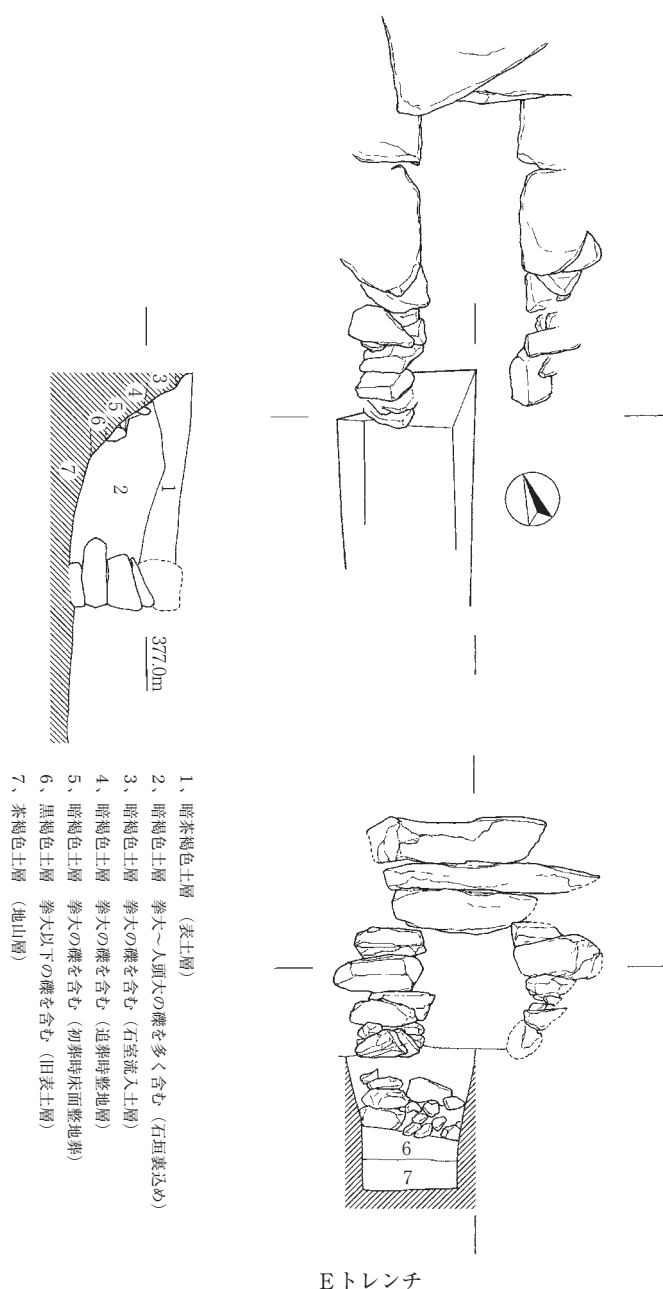
Cトレンチ

- | |
|------------------------------------|
| 1、暗褐色土層（表土層） |
| 2、暗黄褐色土層 拳大以下の礫と碎石を非常に多く含む（道路の造成土） |
| 3、暗茶褐色土層 拳大以下の礫を多く含む（攪乱層） |
| 4、淡茶褐色土層 φ 15cm以下の礫を多く含む（墳丘盛土層） |
| 5、黒褐色土層 拳大～人頭大の礫を含む（旧表土層） |
| 6、茶褐色土層 拳大のクサレ礫及び人頭大の石を含む（地山層） |



0 (1/60) 2m

図 33 239 号墳トレンチ個別図① (1/60)



いたが、石列の詳細を確認するために範囲を広げて掘り下げを行った。

調査の結果、大型の石材を用いた石列が調査区全体から検出された。石列の内側は礫が多く積み上げられた状態であった。検出された礫は、「盛り上げた」というよりは丁寧に「積み上げた」という印象を受ける状況であった。本調査区からも崩落土の中からはあるが完形品の鉄鏝が出土した。

H 区

調査の結果、G 区から連続してくる石列が検出された。調査区東側の石列は墳丘外側に転倒した状態であった。本調査区からも崩落土の中からはあるが鉄鏝が出土した。G～H 区全体を通してみると、墳丘外周を示す石列は多角形状を呈しているが、本古墳が築造当初から多角形墳を意図していたか否かは不明である。

上記の調査結果から、本古墳は 15 m 内外の、土砂と石材を用いて築造された円墳であると考えられる。なお、墳丘南東側の不自然な地形の膨らみに関して、その性格を明らかにするためにトレンチ調査を行ったが、戦後の造成時に埋め立てたものと判明した。

図 34 239 号墳トレンチ個別図② (1/60)

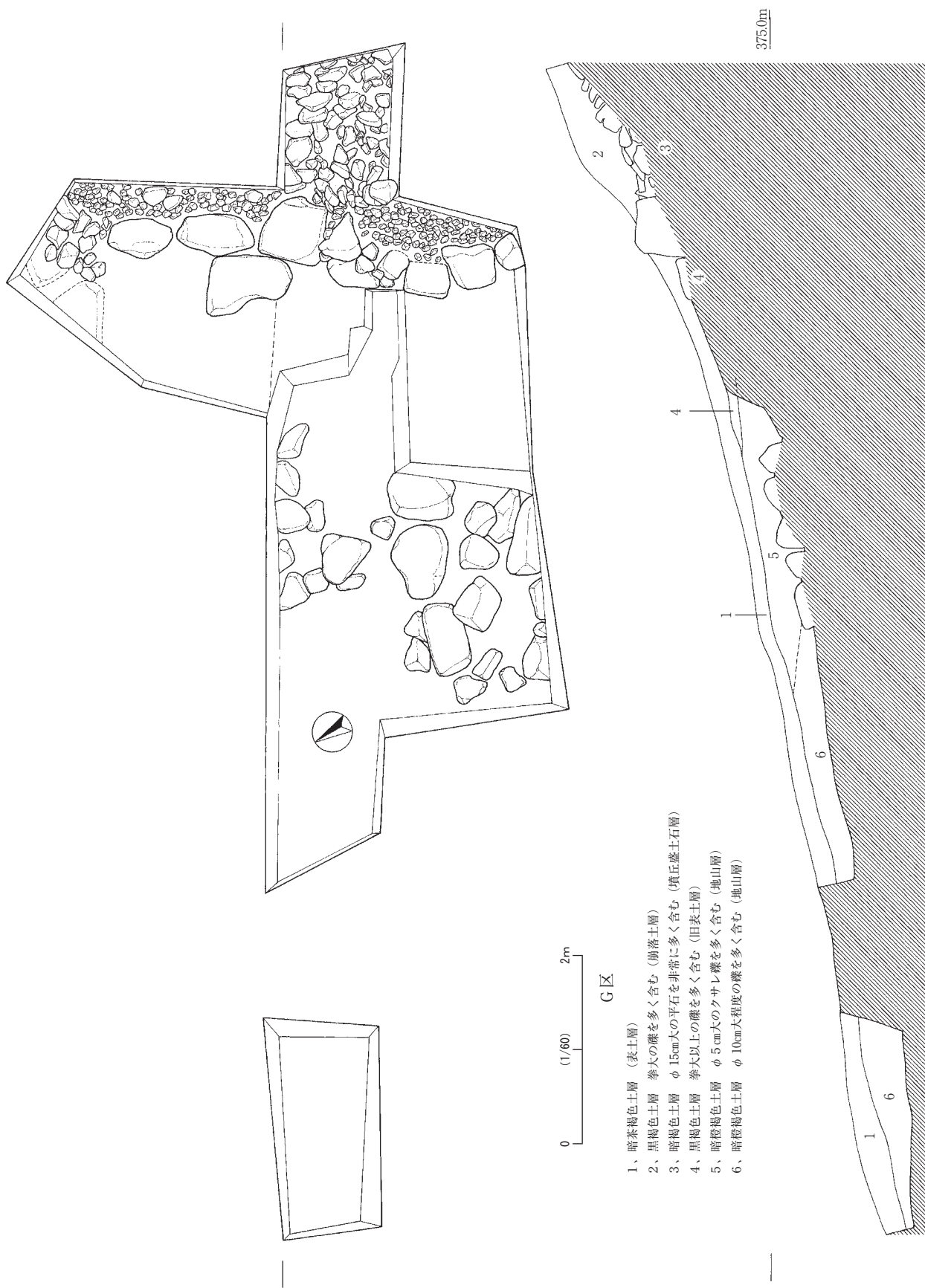


図 35 239 号墳トレンチ個別図③ (1/60)

第9節 240号墳

1 立地と現状

240号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約374mに立地する。北約25mには29号墳、南東約37mには238号墳、南約25mには239号墳、北西約26mには241号墳が近接している。本古墳は、墳丘の南西側（開口部）が畑の造成によって石垣が積まれ、北東側が林道敷設によってそれぞれ削平されていた。また、南東側は239号墳周辺の造成の影響であろうか不自然な地形であった。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。現状では、墳丘を構成と思われる石列などは確認できない。墳丘の西

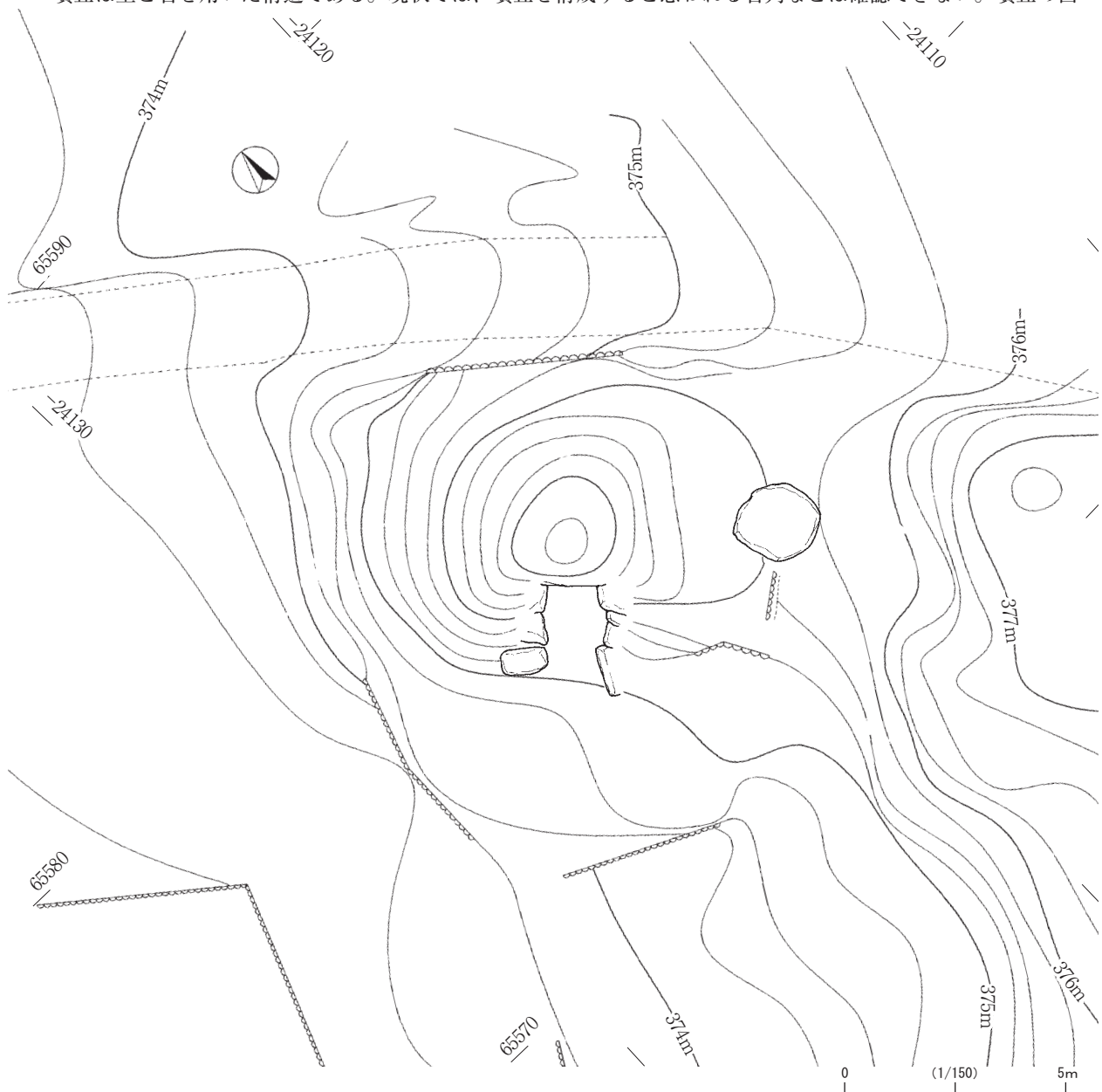


図 36 240号墳墳丘測量図 (1/150)

側には大型の板状石材が放置されているが、これは 240 号墳の羨道部分に架設されていた天井石である。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は両袖式の胴張りの横穴式石室である。玄室の主軸はN - 53° - Wを測り、南西方向に向けて開口している。ただし、前述のように羨道および玄室の一部が原形をとどめていないため、全容を明らかにすることは不可能な状態にある。玄室は長さ 4.1 m、幅は奥壁で 1.8 m、最大幅 2.2 m、玄門幅 1.1 mを測る。

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度に墳丘の測量を、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2004（平成 16）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にはトレンチを設定した。

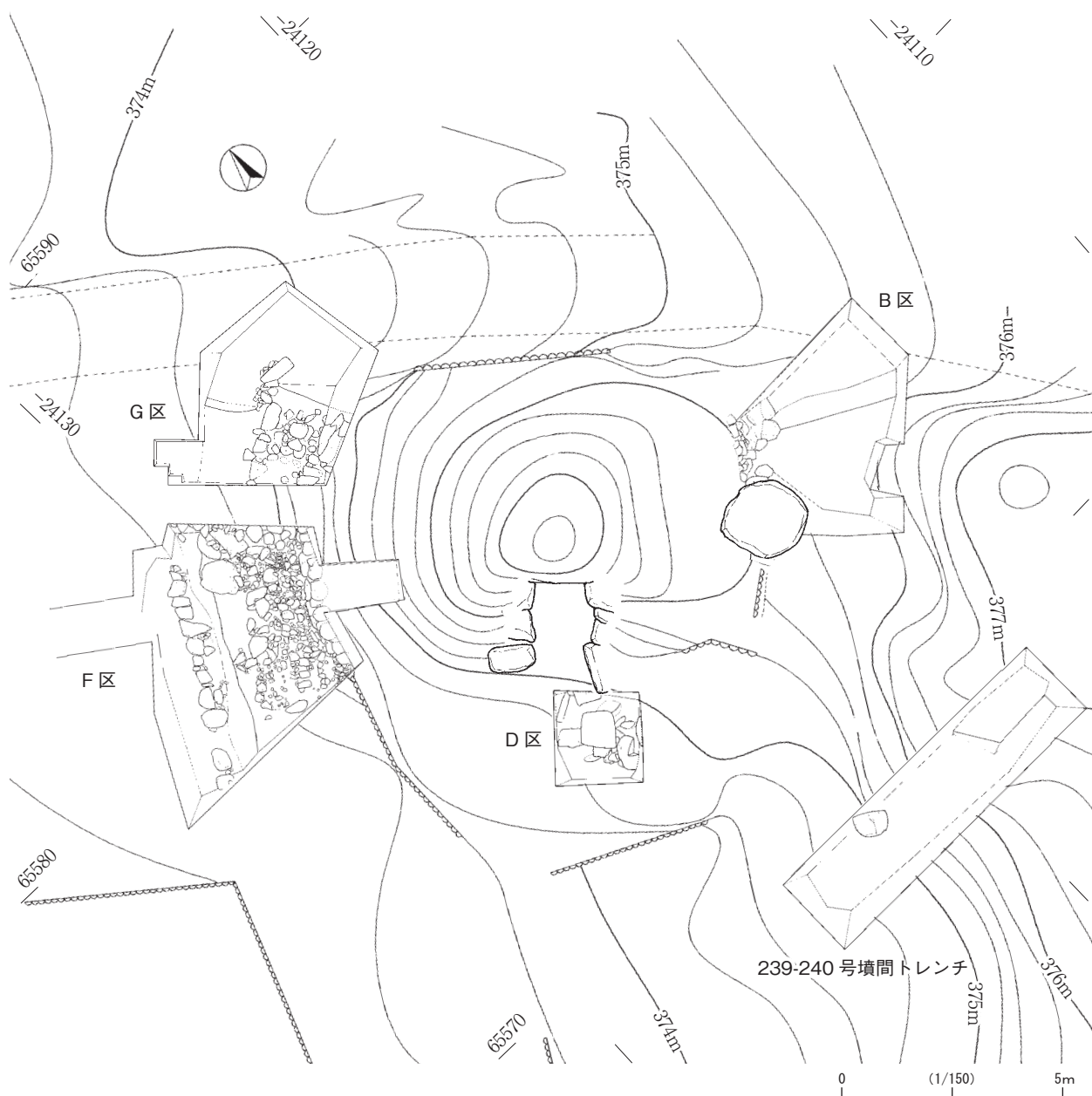


図 37 240 号墳調査成果図 (1/150)

B区

墳丘東側の一部林道に接する部分で、外周東側の高まりとの間に谷状地形を呈している部分である。墳丘範囲の確認と244号墳で見られるような周堀の有無の確認を目的に掘り下げを行った。調査区全体的に、林道敷設にともなうものと思われるものをはじめ、削平が基盤層までおよんでいた。墳丘直近には古墳にともなうと思われる石列が検出された。F・G区で検出された石列との対応関係は不明であるが、石室主軸からの距離関係から、墳丘内部に埋め込まれた土留めの石列であると考えられる。

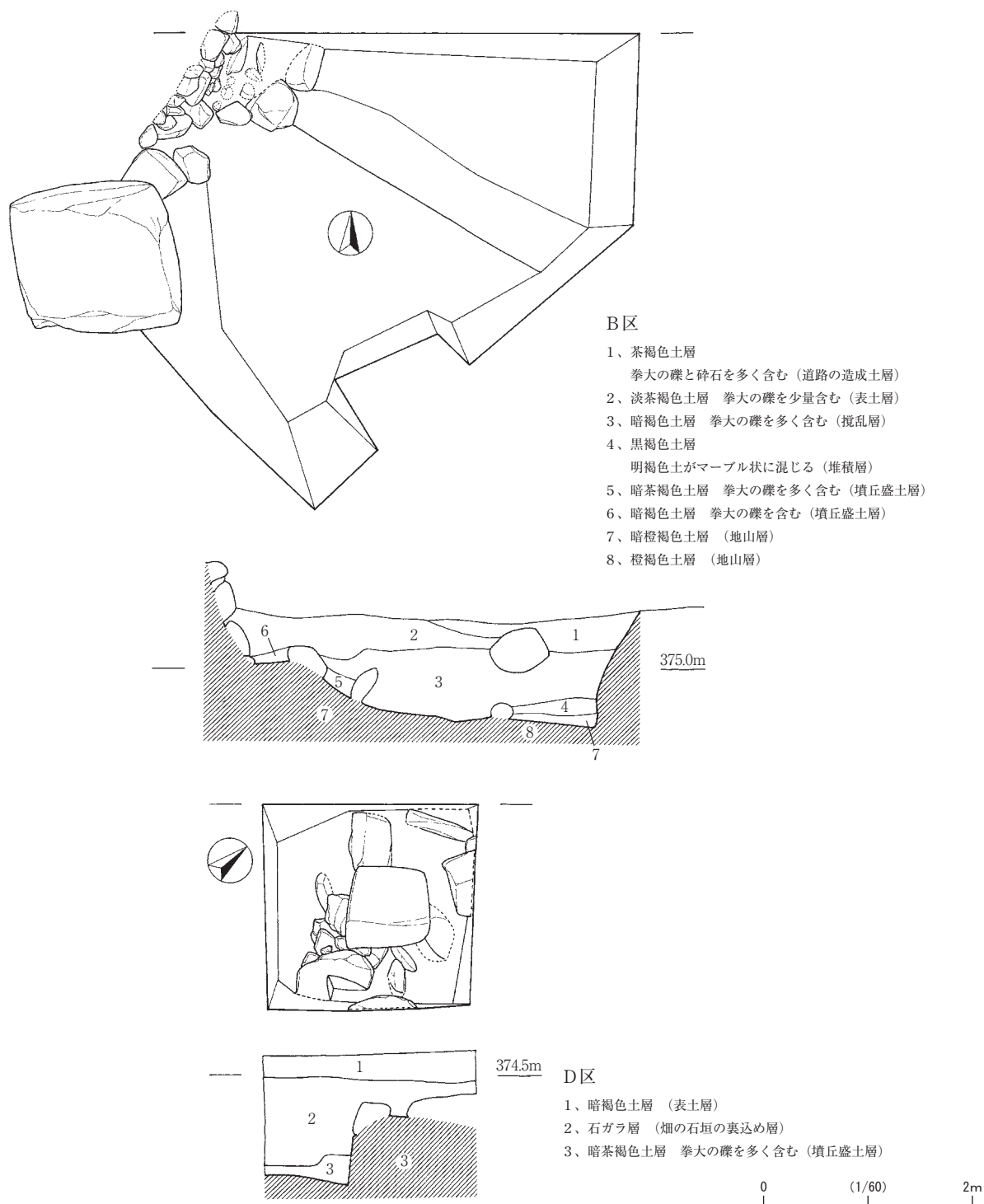


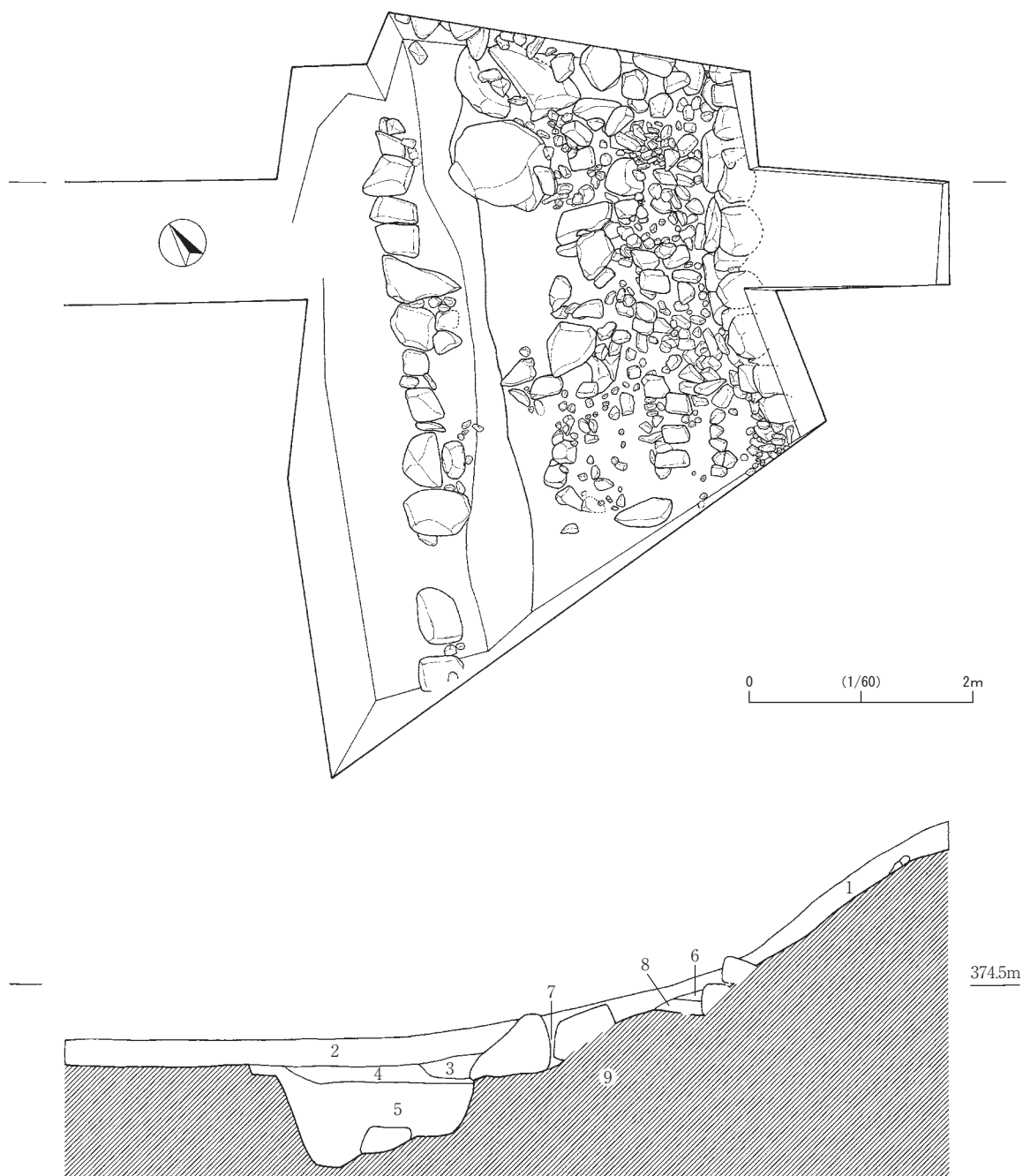
図38 240号墳トレンチ個別図① (1/60)

D区

墳丘南側に羨道部・前庭部の状態を確認するために設定した。羨道や墳丘外周の石列とかかわる可能性のある石材を検出したが、石垣構築時の攪乱もあり詳細を明らかにすることはできなかった。

F区

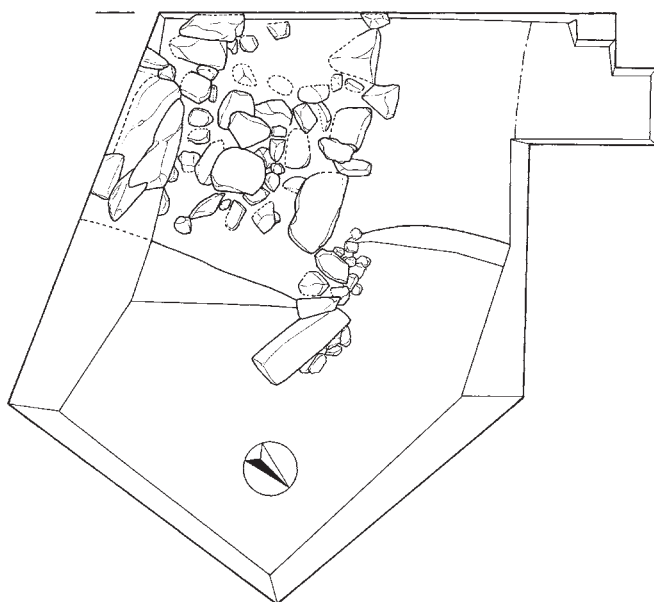
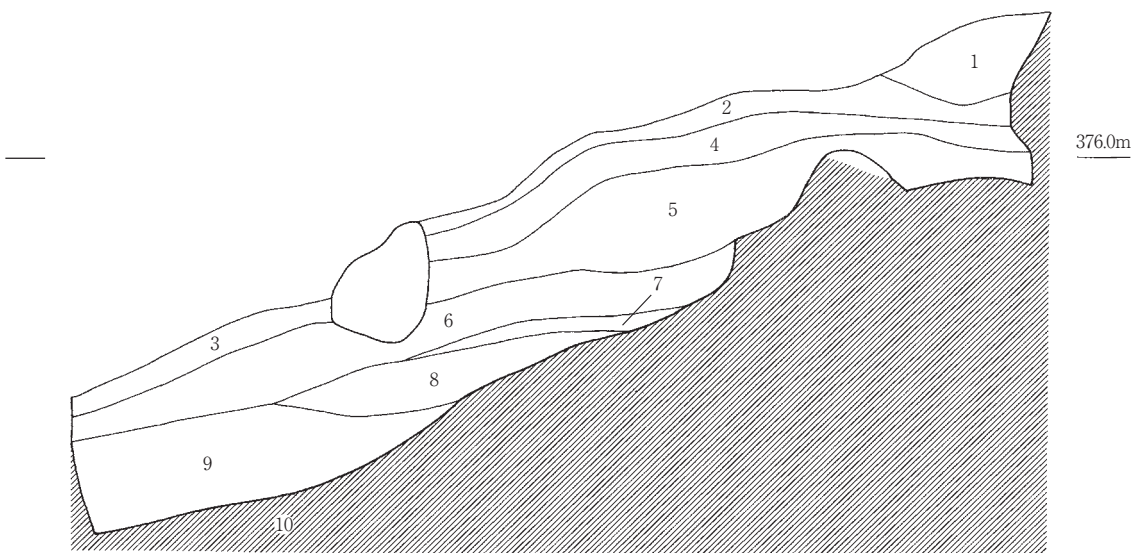
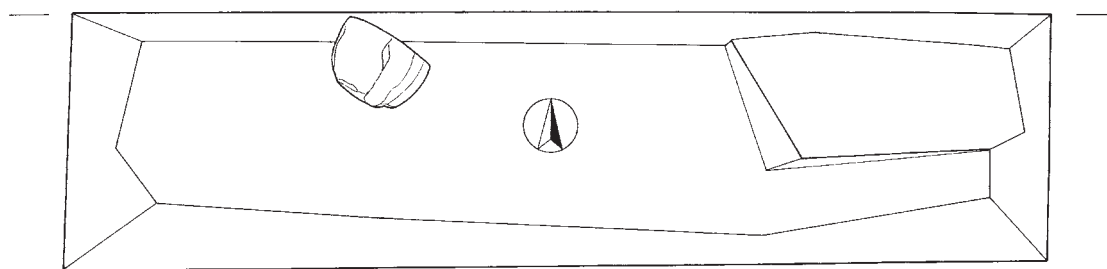
2000（平成12）年度にFトレンチが設定された部分である。この段階で確認した墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みについて、その広がりを確認するために調査区を拡張して掘り下げを行った。その結果、石積みは



F区

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1、暗褐色土層（墳丘表土層） | 6、黒褐色土層（崩落土層） |
| 2、暗褐色土層（表土層） | 7、黒褐色土層 拳大～φ30cmの礫を含む（崩落層） |
| 3、暗褐色土層（攪乱層） | 8、暗茶褐色土層（墳丘盛土層） |
| 4、暗褐色土層 黒褐色土と暗黄褐色土の互層状（後世の盛土層） | 9、明茶褐色土層（地山層） |
| 5、石ガラ層（畑の石垣の裏込め層） | |

図39 240号墳トレンチ個別図② (1/60)



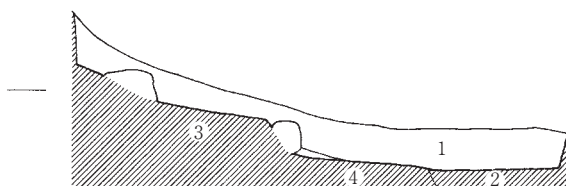
239 - 240 号墳間トレンチ

- 1、明黄褐色土層（攪乱層）
- 2、暗褐色土層（表土層）
- 3、暗褐色土層（表土層）
- 4、茶褐色砂層（造成土層）
- 5、黒褐色土層 拳大～人頭大の礫、ゴミを多く含む（造成土層）
- 6、暗茶褐色土層 陶器片などを含む（造成土層）
- 7、黒褐色土層（旧表土層）
- 8、茶褐色土層（地山層）
- 9、黄褐色土層
拳大～人頭大の礫を多く含む（土石流の痕跡・地山層）
- 10、橙褐色土層（地山層）

G 区

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、暗褐色土層（攪乱層）
- 3、暗茶褐色土層 拳大～人頭大の礫を含む（墳丘盛土層）
- 4、黒褐色土層（旧表土層）

374.0m



0 (1/60) 2m

図 40 240 号墳トレンチ個別図③ (1/60)

おおむね調査区全体で連続しているのが確認できた。この石積みは調査区南端付近で削平のため途切れている。墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みの外側には、G区で検出された外周を廻る石列に連続すると思われる大型の石材が検出されたが、やや乱れていることから攪乱を受けているものと考えられる。これより外側は畑造成時の攪乱を受けており、後世の石積みが構築されていた。外周の石列と内側の石積みの間には大小の礫が多く検出され、あたかもテラス面を意識していたかのような印象を受けたが、その意図するところは不明である。墳丘は土と石で積み上げている状況が確認できた。

G区

墳丘北側の一部林道に接する部分で、墳丘が林道敷設によって大きく削平されている部分である。墳丘範囲と林道による削平状況の確認を目的に掘り下げを行った。F区から連続する墳丘内部に埋め込まれた土留めの石積みと、外周を廻る石列が検出された。北東側は林道敷設にともなう削平で失われていたが、調査区南西部における残存状況は良好であった。

上記の調査結果から、本古墳は13 m内外の、土砂と石材を用いて築造された円墳であると考えられる。

第 10 節 241 号墳

1 立地と現状

241 号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約 370 m に立地する。北約 18 m には 27 号墳、北東約 24 m には 29 号墳、南東約 26 m には 240 号墳、西約 16 m には 242 号墳が近接している。本古墳は、墳丘の北側は林道敷設にともない削平されている。東側は後世の造成で埋め立てられていた。墳頂部には江戸期のものと思われる墓石が数基設置されており、発掘調査によっても寛永通宝が 6 枚組みで出土していることから、江戸期には墓地として利用されていたようである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は石だけを積み上げて造った積石塚である。現状では、墳丘外周を示すような石列などは確認できない。墳丘の南側には後世の石垣が構築されている。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部の種類や構造は不明である。

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度に墳丘の測量と試掘調査を、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。墳丘・主体部の主軸方位が不明であったので、任意にトレンチを設定して試掘調査を行った。

B トレンチ

墳丘東側の山側にあたる部分である。掘り下げを行ったところ、上面から耕作土層・礫層・大型の石材層の順に検出されたが、古墳にともなうと考えられる遺構などは確認することができなかった。これら検出された状況は、後世に畑として造成されたことを物語っている。なお、耕作土層中からは埴輪片が多く出土している。また寛永通宝も出土した。

C トレンチ

墳丘東側の山側にあたる部分である。掘り下げを行ったところ、上面から耕作土層・礫層・大型の石材層の順に検出されたが、古墳にともなうと考えられる遺構などは確認することができなかった。これら検出された状況は、後世に畑として造成されたことを物語っている。なお、耕作土層中からは埴輪片が多く出土している。また寛永通宝も出土した。

E トレンチ

墳丘南側の平坦な部分である。地山上面まで耕作による攪乱がおよんでおり、古墳にともなう遺構は検出することができなかった。

F トレンチ

墳丘西側の 242 号墳に接する部分である。トレンチ東側から板状の石材が検出され、埋葬施設との関連が考えられるが、詳細は不明である。トレンチ中央付近から石材が列状をなす部分が検出され、墳丘の外周を示す石列とも考えられるが、詳細は不明である。トレンチ西側からも比較的大ぶりの石材が検出されたが、241 号墳にと

Hトレンチ

This topographic map illustrates the study area with contour lines representing elevation. Key features include:

- Contour Lines:** Solid lines indicating elevation, with labels such as 369m, 370m, 371m, 372m, 373m, 374m, 375m, 376m, 377m, 378m, 379m, 380m, 381m, 382m, 383m, 384m, 385m, 386m, 387m, 388m, 389m, 390m, 391m, 392m, 393m, 394m, 395m, 396m, 397m, 398m, 399m, 400m, 401m, 402m, 403m, 404m, 405m, 406m, 407m, 408m, 409m, 410m, 411m, 412m, 413m, 414m, 415m, 416m, 417m, 418m, 419m, 420m, 421m, 422m, 423m, 424m, 425m, 426m, 427m, 428m, 429m, 430m, 431m, 432m, 433m, 434m, 435m, 436m, 437m, 438m, 439m, 440m, 441m, 442m, 443m, 444m, 445m, 446m, 447m, 448m, 449m, 450m, 451m, 452m, 453m, 454m, 455m, 456m, 457m, 458m, 459m, 460m, 461m, 462m, 463m, 464m, 465m, 466m, 467m, 468m, 469m, 470m, 471m, 472m, 473m, 474m, 475m, 476m, 477m, 478m, 479m, 480m, 481m, 482m, 483m, 484m, 485m, 486m, 487m, 488m, 489m, 490m, 491m, 492m, 493m, 494m, 495m, 496m, 497m, 498m, 499m, 500m, 501m, 502m, 503m, 504m, 505m, 506m, 507m, 508m, 509m, 510m, 511m, 512m, 513m, 514m, 515m, 516m, 517m, 518m, 519m, 520m, 521m, 522m, 523m, 524m, 525m, 526m, 527m, 528m, 529m, 530m, 531m, 532m, 533m, 534m, 535m, 536m, 537m, 538m, 539m, 540m, 541m, 542m, 543m, 544m, 545m, 546m, 547m, 548m, 549m, 550m, 551m, 552m, 553m, 554m, 555m, 556m, 557m, 558m, 559m, 560m, 561m, 562m, 563m, 564m, 565m, 566m, 567m, 568m, 569m, 570m, 571m, 572m, 573m, 574m, 575m, 576m, 577m, 578m, 579m, 580m, 581m, 582m, 583m, 584m, 585m, 586m, 587m, 588m, 589m, 590m, 591m, 592m, 593m, 594m, 595m, 596m, 597m, 598m, 599m, 600m, 601m, 602m, 603m, 604m, 605m, 606m, 607m, 608m, 609m, 610m, 611m, 612m, 613m, 614m, 615m, 616m, 617m, 618m, 619m, 620m, 621m, 622m, 623m, 624m, 625m, 626m, 627m, 628m, 629m, 630m, 631m, 632m, 633m, 634m, 635m, 636m, 637m, 638m, 639m, 640m, 641m, 642m, 643m, 644m, 645m, 646m, 647m, 648m, 649m, 650m, 651m, 652m, 653m, 654m, 655m, 656m, 657m, 658m, 659m, 660m, 661m, 662m, 663m, 664m, 665m, 666m, 667m, 668m, 669m, 670m, 671m, 672m, 673m, 674m, 675m, 676m, 677m, 678m, 679m, 680m, 681m, 682m, 683m, 684m, 685m, 686m, 687m, 688m, 689m, 690m, 691m, 692m, 693m, 694m, 695m, 696m, 697m, 698m, 699m, 700m, 701m, 702m, 703m, 704m, 705m, 706m, 707m, 708m, 709m, 710m, 711m, 712m, 713m, 714m, 715m, 716m, 717m, 718m, 719m, 720m, 721m, 722m, 723m, 724m, 725m, 726m, 727m, 728m, 729m, 730m, 731m, 732m, 733m, 734m, 735m, 736m, 737m, 738m, 739m, 740m, 741m, 742m, 743m, 744m, 745m, 746m, 747m, 748m, 749m, 750m, 751m, 752m, 753m, 754m, 755m, 756m, 757m, 758m, 759m, 760m, 761m, 762m, 763m, 764m, 765m, 766m, 767m, 768m, 769m, 770m, 771m, 772m, 773m, 774m, 775m, 776m, 777m, 778m, 779m, 780m, 781m, 782m, 783m, 784m, 785m, 786m, 787m, 788m, 789m, 790m, 791m, 792m, 793m, 794m, 795m, 796m, 797m, 798m, 799m, 800m, 801m, 802m, 803m, 804m, 805m, 806m, 807m, 808m, 809m, 810m, 811m, 812m, 813m, 814m, 815m, 816m, 817m, 818m, 819m, 820m, 821m, 822m, 823m, 824m, 825m, 826m, 827m, 828m, 829m, 830m, 831m, 832m, 833m, 834m, 835m, 836m, 837m, 838m, 839m, 840m, 841m, 842m, 843m, 844m, 845m, 846m, 847m, 848m, 849m, 850m, 851m, 852m, 853m, 854m, 855m, 856m, 857m, 858m, 859m, 860m, 861m, 862m, 863m, 864m, 865m, 866m, 867m, 868m, 869m, 870m, 871m, 872m, 873m, 874m, 875m, 876m, 877m, 878m, 879m, 880m, 881m, 882m, 883m, 884m, 885m, 886m, 887m, 888m, 889m, 890m, 891m, 892m, 893m, 894m, 895m, 896m, 897m, 898m, 899m, 900m, 901m, 902m, 903m, 904m, 905m, 906m, 907m, 908m, 909m, 910m, 911m, 912m, 913m, 914m, 915m, 916m, 917m, 918m, 919m, 920m, 921m, 922m, 923m, 924m, 925m, 926m, 927m, 928m, 929m, 930m, 931m, 932m, 933m, 934m, 935m, 936m, 937m, 938m, 939m, 940m, 941m, 942m, 943m, 944m, 945m, 946m, 947m, 948m, 949m, 950m, 951m, 952m, 953m, 954m, 955m, 956m, 957m, 958m, 959m, 960m, 961m, 962m, 963m, 964m, 965m, 966m, 967m, 968m, 969m, 970m, 971m, 972m, 973m, 974m, 975m, 976m, 977m, 978m, 979m, 980m, 981m, 982m, 983m, 984m, 985m, 986m, 987m, 988m, 989m, 990m, 991m, 992m, 993m, 994m, 995m, 996m, 997m, 998m, 999m, 1000m.
- Elevation Markers:** Specific points are labeled with elevations such as 24160, 24150, 24140, 24130, 24120, 24110, 24100, 24090, 24080, 24070, 24060, 24050, 24040, 24030, 24020, 24010, 24000, 23990, 23980, 23970, 23960, 23950, 23940, 23930, 23920, 23910, 23900, 23890, 23880, 23870, 23

図 41 241 号墳墳丘測量図 (1/150)

以上の調査成果からは、本古墳が積石塚であること以外、墳丘の形状・規模などを明らかにすることはできなかった。

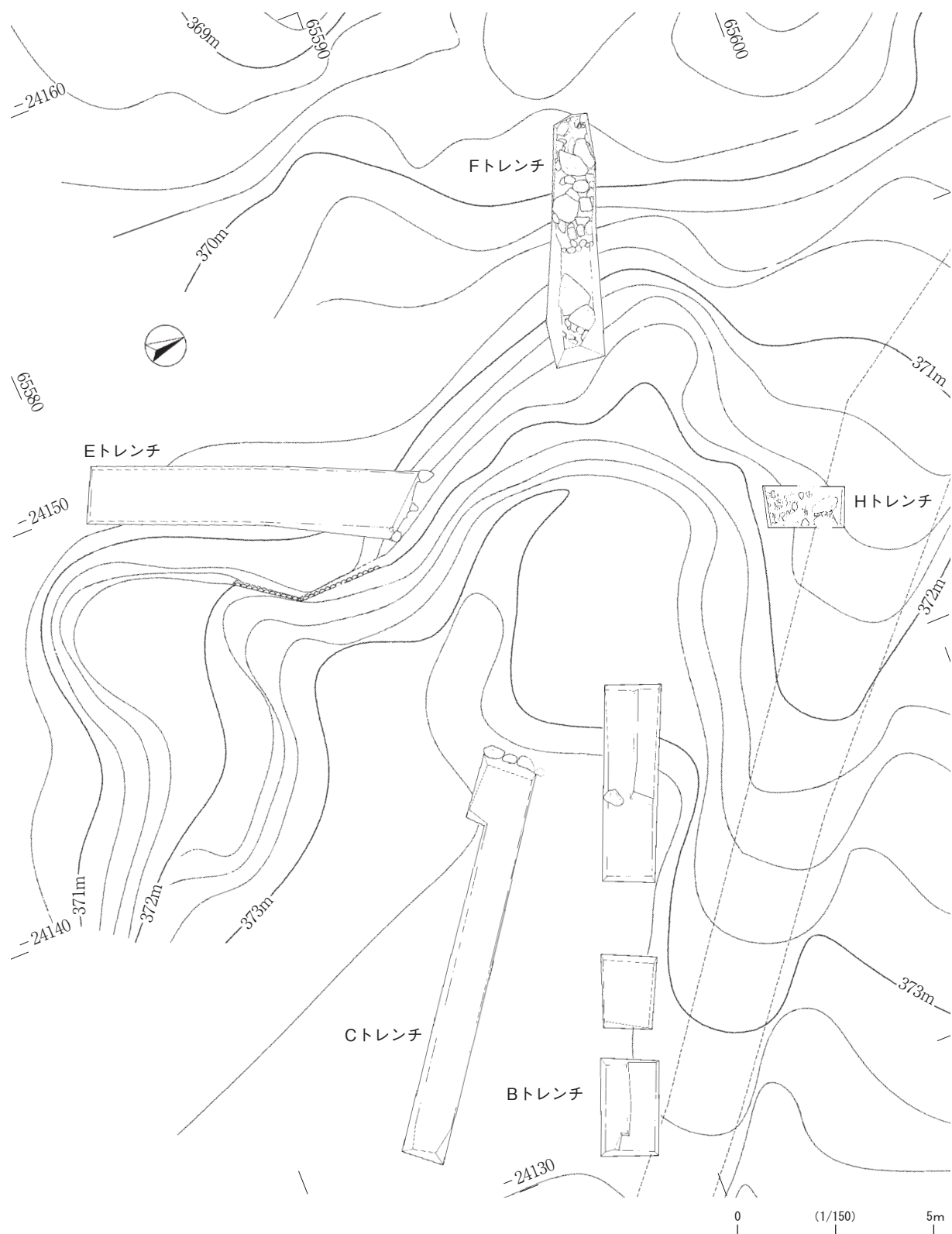
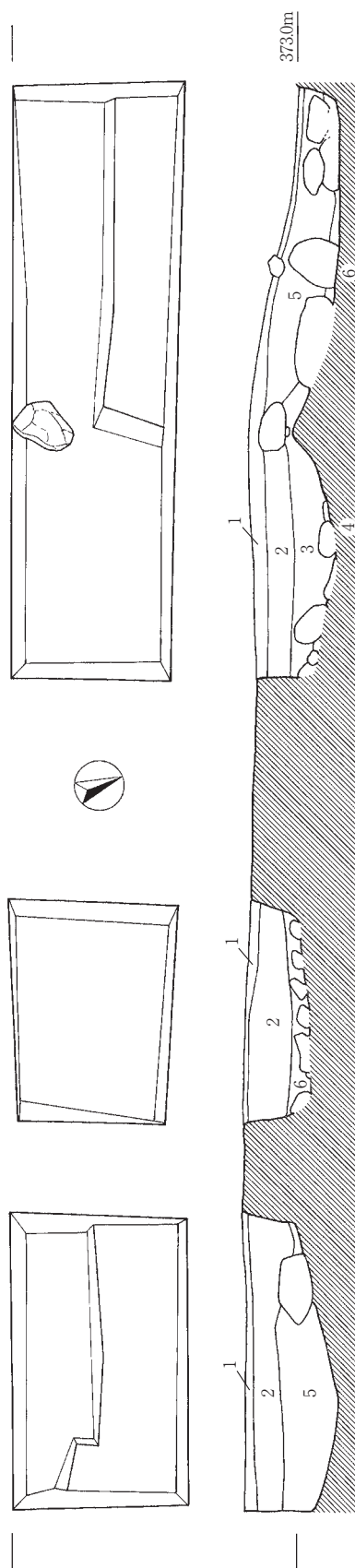
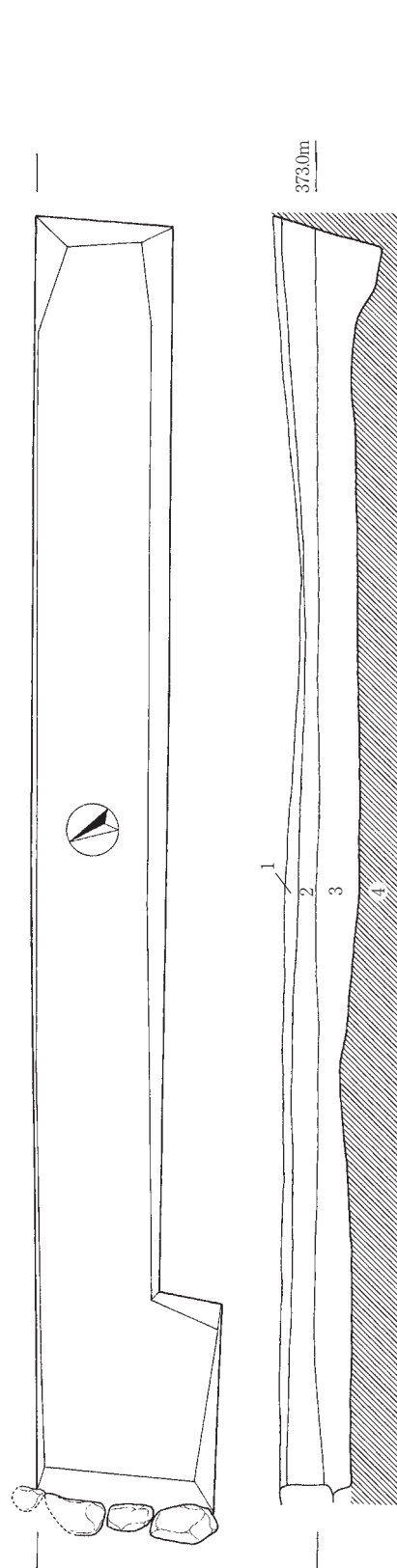


図 42 241 号墳調査成果図 (1/150)



Bトレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、暗茶褐色土層 黒色土ブロックがマール状に混じる（畑の造成土層）
- 3、石ガラ層 拳大程度の角礫のみで構成。石と石の間は空隙（畑の造成礫層）
- 4、巨石層 φ 40～60cmの石を主体とする。上面より寛永通宝出土（畑の造成層）
- 5、黒褐色土層 拳大の角礫、φ 40～50cmの石を含む（堆積層）
- 6、淡黒褐色土層 φ 20～40cmの角礫を非常に多く含む（堆積層）

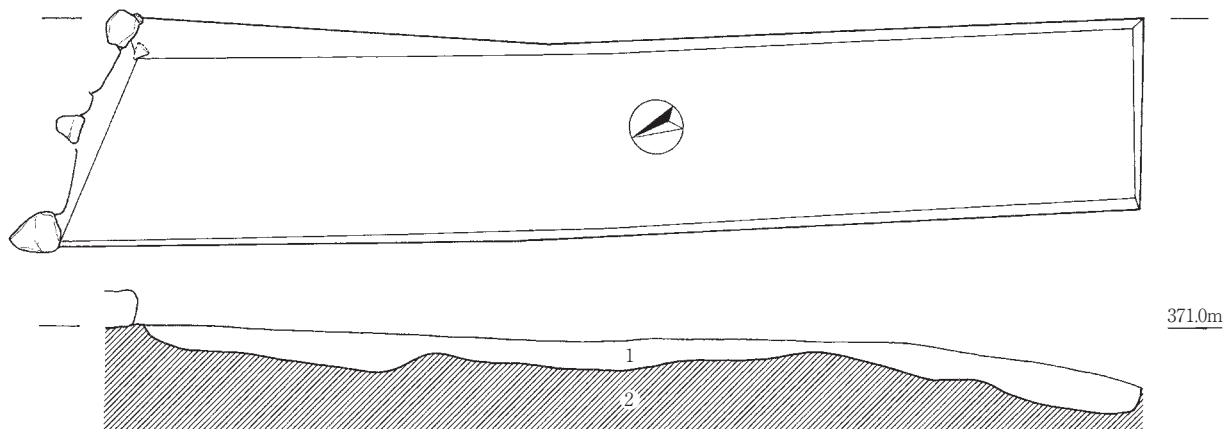


Cトレンチ

- 1、暗褐色土層 表土層
- 2、暗茶褐色土層 黄褐色・黒褐色土ブロックがマール状に混入（畑の造成土層）
- 3、石ガラ層 拳大程度の角礫のみで構成。石と石の間は空隙（畑の造成礫層）
- 4、巨石層 φ 40～60cmの石を主体とする。上面より寛永通宝出土（畑の造成層）

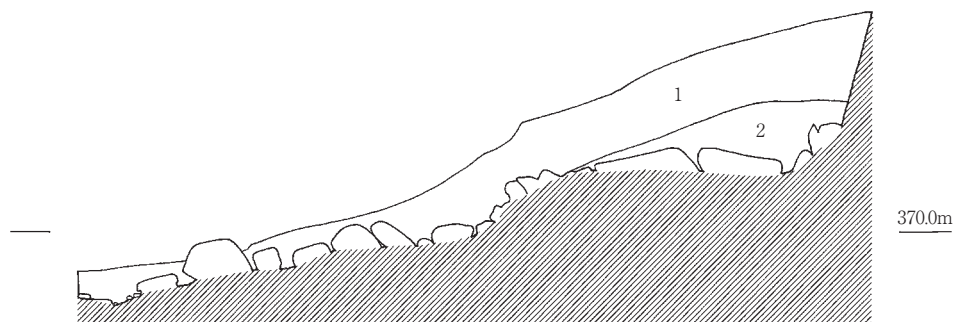
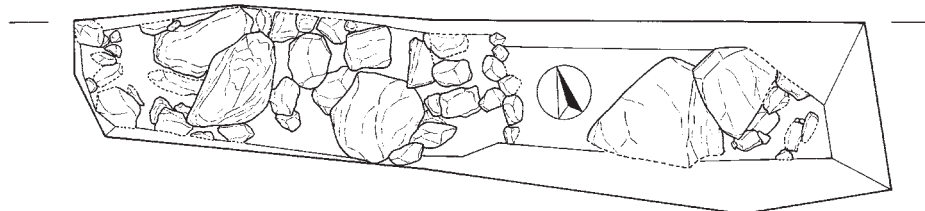
0 (1/60) 2m

図 43 241 号墳トレンチ個別図① (1/60)



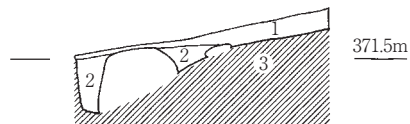
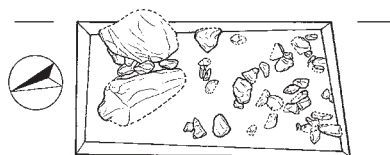
E トレンチ

- 1、暗茶褐色土層（表土層）
2、明橙褐色土層 φ 10～40cmの角礫・クサレ礫を含む（地山層）



F トレンチ

- 1、礫層 φ～20cmの礫層。石と石の間は空隙（崩落礫層）
2、礫層 拳程度の礫層。層中には埴輪片が多く含まれる（崩落礫層）



H トレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
2、暗褐色土層 小砂利・碎石を非常に多く含む（道路敷設の造成土）
3、茶褐色土層 拳大の角礫を多く含む（墳丘盛土石の可能性ある）

0 (1/60) 2m

図 44 241 号墳トレンチ個別図② (1/60)

第 11 節 242 号墳

1 立地と現状

242 号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約 369 m に立地する。北東約 22 m には 27 号墳、東約 16 m には 241 号墳、北西約 20 m にはハ号墳、同じく北西約 26 m には 26 号墳が近接している。本古墳は、墳丘の北側が旧林道敷設によって、南西側が道路造成によってそれぞれ削平されていた。墳丘上部はほとんど削平されており、低平な高まりであった。

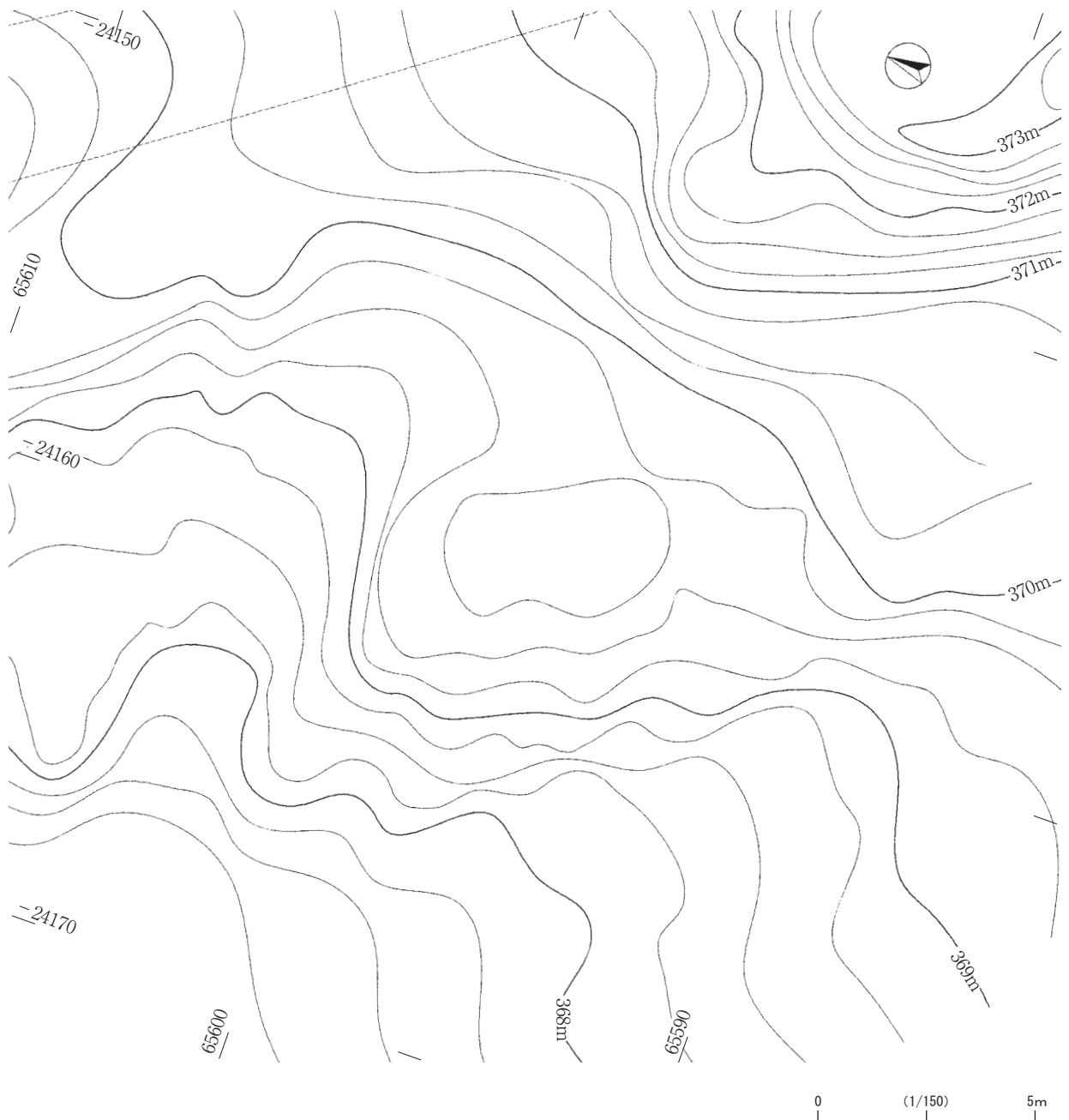


図 45 242 号墳墳丘測量図 (1/150)

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。現状では、墳丘の外周を廻ると思われる石の一部が確認できる。調査着手時には、横穴式石室の奥壁の上部が露出していた。



図 46 242 号墳墳丘積石実測図 (1/80)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は小型の胴張り両袖式の横穴式石室である。残存状況不良で、上部の構造はまったく不明である。玄室の主軸はN-49°-Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室規模の詳細は不明であるが、残存している範囲での全長は約3.9mである。

4 調査概要

本古墳は、1998（平成10）年度に墳丘の測量と試掘調査を、2005（平成17）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にはトレンチを設定した。

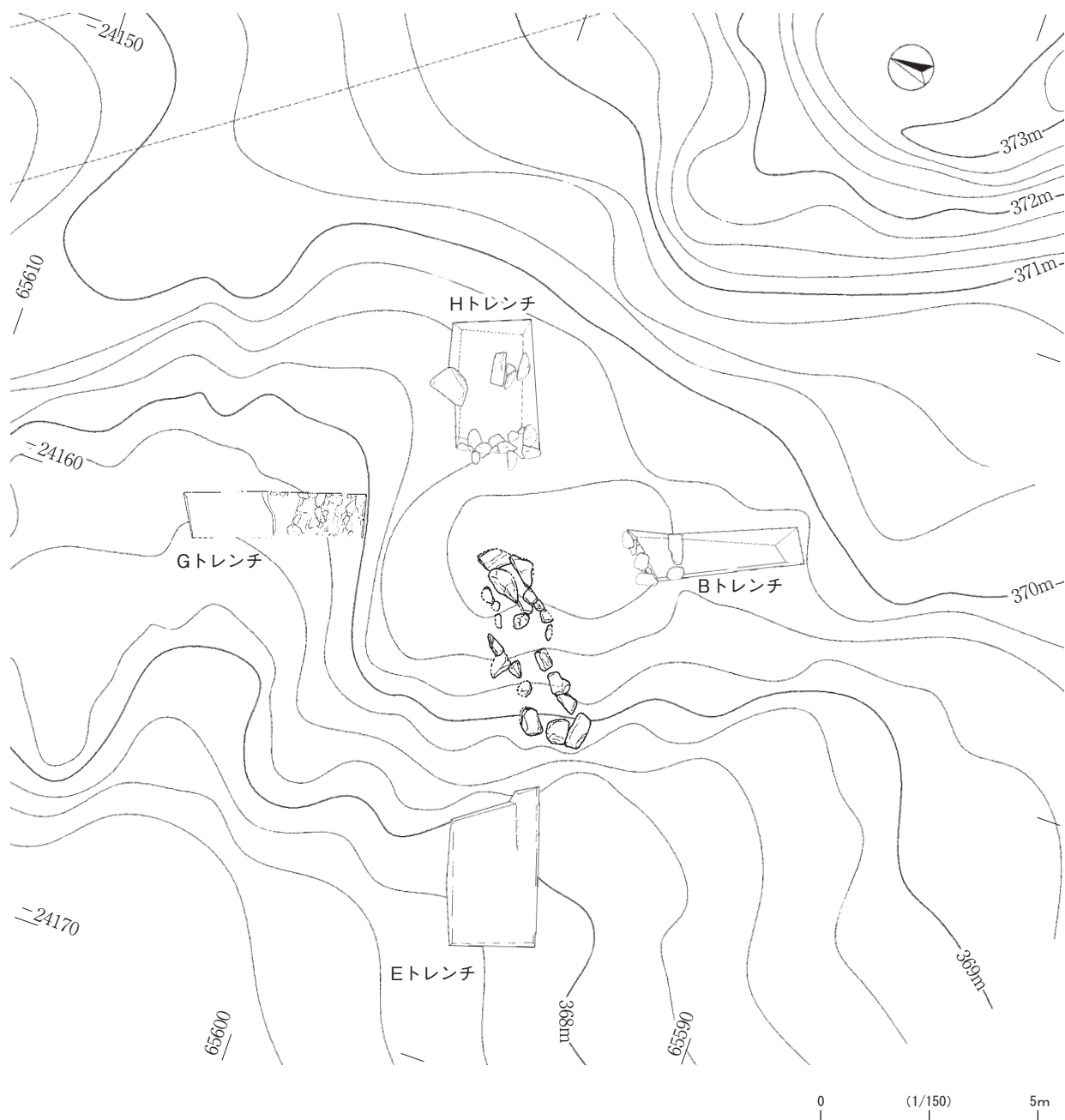
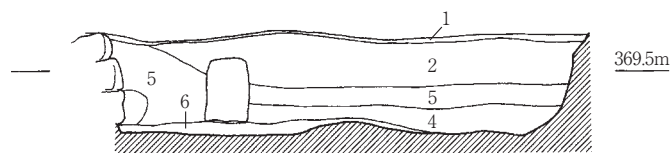
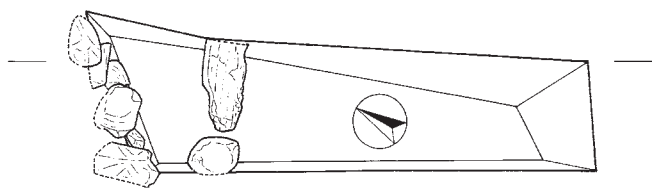
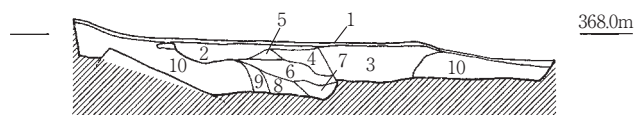
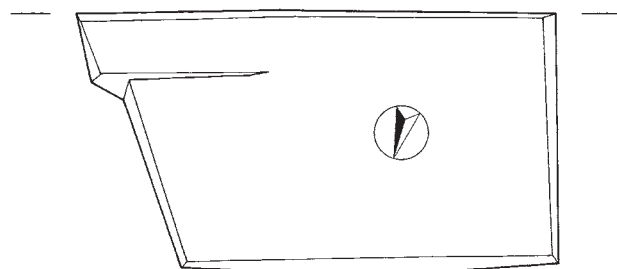


図 47 242 号墳調査成果図 (1/150)



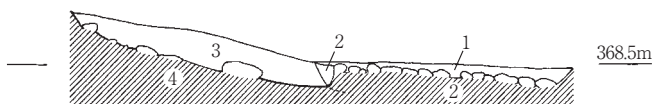
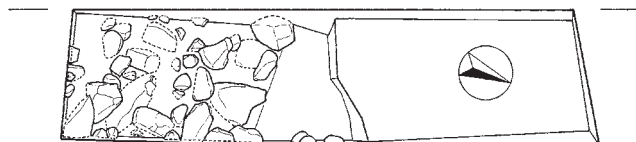
Bトレンチ

- 1、茶褐色土層（表土層）
- 2、暗褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を多く含む（崩落層）
- 3、暗褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を多く含む（崩落層）
- 4、暗黄褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を多く含む（崩落層）
- 5、暗褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を非常に多く含む（墳丘盛土石層）
- 6、黄褐色土層（地山層）



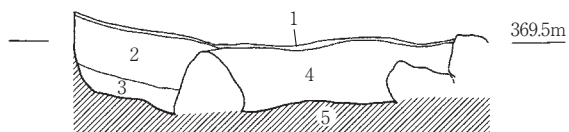
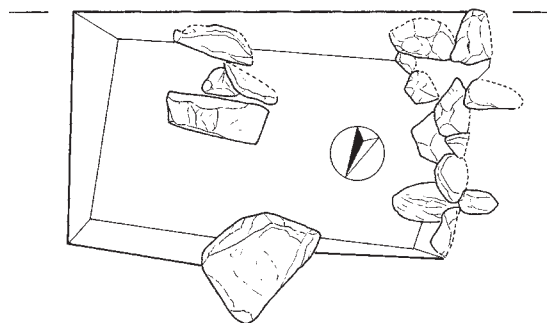
Eトレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、暗褐色土層（攪乱層）
- 3、明褐色土層（攪乱層）
- 4、明褐色土層（堆積層）
- 5、褐色土層（堆積層）
- 6、黒褐色土層（堆積層）
- 7、明褐色土層（堆積層）
- 8、茶褐色土層（堆積層）
- 9、黄褐色土層（堆積層）
- 10、黄褐色土層（地山層）



Gトレンチ

- 1、暗褐色土層（表土層）
- 2、茶褐色土層 φ 10～30cmの礫を多く含む（旧林道の敷石層）
- 3、暗褐色土層 φ 10～30cmの角礫を多く含む（墳丘盛土石層）
- 4、淡黒褐色土層 φ 5～10cmのクサレ礫を多く含む（旧表土層）



Hトレンチ

- 1、茶褐色土層（表土層）
- 2、暗褐色土層 拳大程度の礫を多く含む（崩落層）
- 3、暗茶褐色土層 拳大程度の礫を含む（崩落層）
- 4、暗褐色土層 拳大～人頭大程度の礫を多く含む（墳丘盛土石層）
- 5、暗黄褐色土層（地山層）

0 (1/60) 2m

図 48 242 号墳トレンチ個別図① (1/60)

Bトレンチ

墳丘南側の山側にあたる部分である。トレンチ北端から石垣状石積みが発出された。これはHトレンチで発出された石垣状石積みに連続するもので、墳丘内部に埋め込まれたものである。この石積みの南側からも石列が発出された。この石列が墳丘外周を廻る石列となつて、Hトレンチで発出された石列に連続する可能性もあるが、現状では判断しがたい。

Eトレンチ

墳丘西側の石室開口部にあたる部分で、道路敷設のために削平を受けている部分である。掘り下げを行ったが、調査範囲からは墳丘規模などを示す遺構は発出されなかった。開口部付近であるためか、土師器や須恵器の破片が多く出土した。

Gトレンチ

墳丘北側の谷側にあたる部分である。トレンチ中央より南側では墳丘を構成していたと思われる礫が発出された。トレンチ北半分は旧林道敷設のために削平を受けており、墳丘の範囲などを示す遺構は発出されなかった。

Hトレンチ

墳丘東側の石室裏側にあたる部分である。トレンチ北端からはBトレンチで発出された墳丘内部に埋め込まれた石垣状石積みに連続する石積みが発出された。この東側からはBトレンチで発出された墳丘外周を廻ると思われる石列に連続する可能性のある石列が発出された。

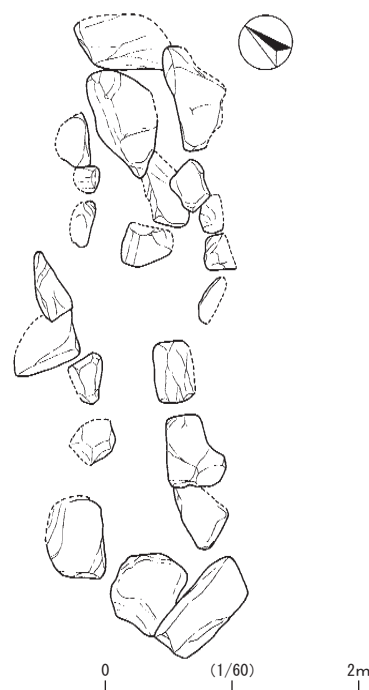


図 49 242 号墳石室 (1/60)

上記の調査結果から、本古墳は直径約 10 m内外の、墳丘構築に礫を多用し小型の石室を内蔵する後期後半の円墳であると考えられる。なお、墳丘清掃時に墳丘上から獸脚形の土製品が出土している。

第 12 節 245 号墳

1 立地と現状

245 号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川左岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約 364 m に立地する。南東約 36 m には 246 号墳が近接している。本古墳は、墳丘の西側は林道敷設にともない削平されている。このほかの部分も畑の造成や石材の抜き取りなどによって破壊が進んでいる。全体的に、横穴式石室の構築石材が散乱している、といった状況である。本古墳は「死人塚」という俗称をもっているが、現林道敷設に際して取り崩されたことが伝えられている。現在は、横穴式石室の天井石に使われていたと思われる大型の板石の上に小さな石祠が祭られている。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。現状では、墳丘外周を示すような石列などは確認できない。

3 主体部・石室構造

地元古老の話や、周辺に散乱する石材の状況から、横穴式石室であったと思われる。

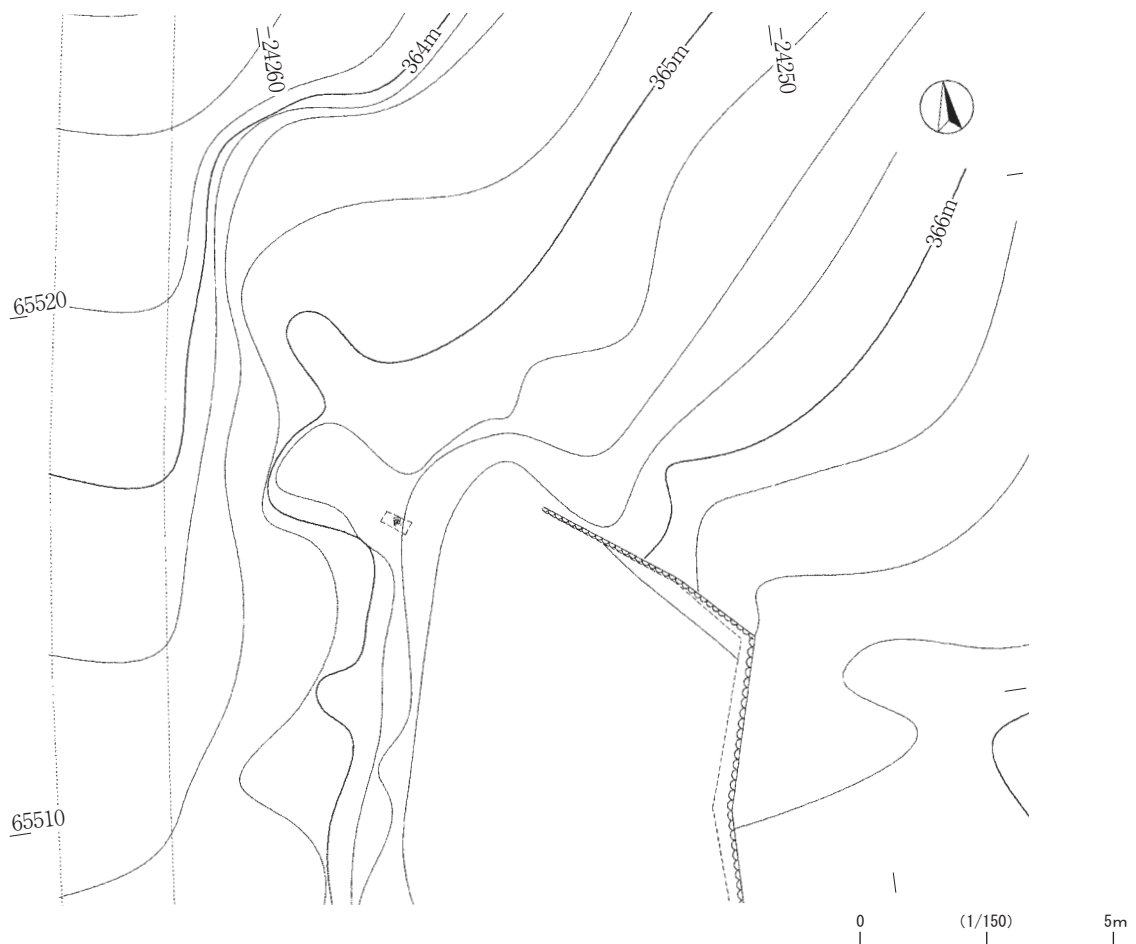


図 50 245 号墳墳丘測量図 (1/150)

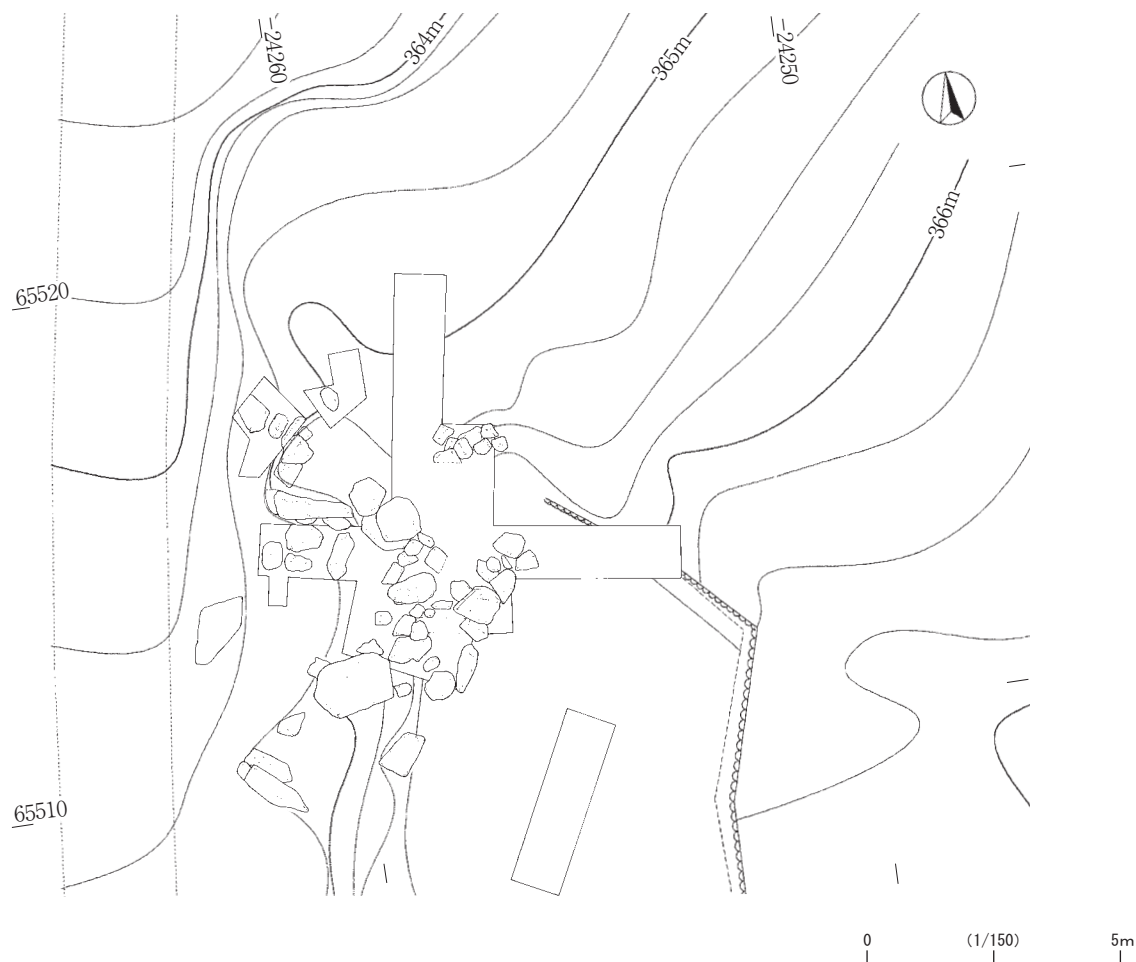


図 51 245 号墳調査成果図 (1/150)

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度に墳丘の測量を、2000（平成 12）年度に試掘調査を実施した。墳丘・主体部の主軸方位が不明であったので任意にトレンチを設定して試掘調査を行った。墳丘裾と古墳の残存状況を確認するため各所にトレンチを設定したが、石室構築材と考えられる石材には原位置を保つと判断できるものがなく、破壊規模は予想を上回るものであることが確認された。

本古墳については、規模および構造を確定することは困難な状況にあると判断されることとなった。なお、調査中に若干であるが須恵器の破片などが出土している。また、先述の石祠の中には古墳から出土したものと思われる鉄製品が奉納されていた。

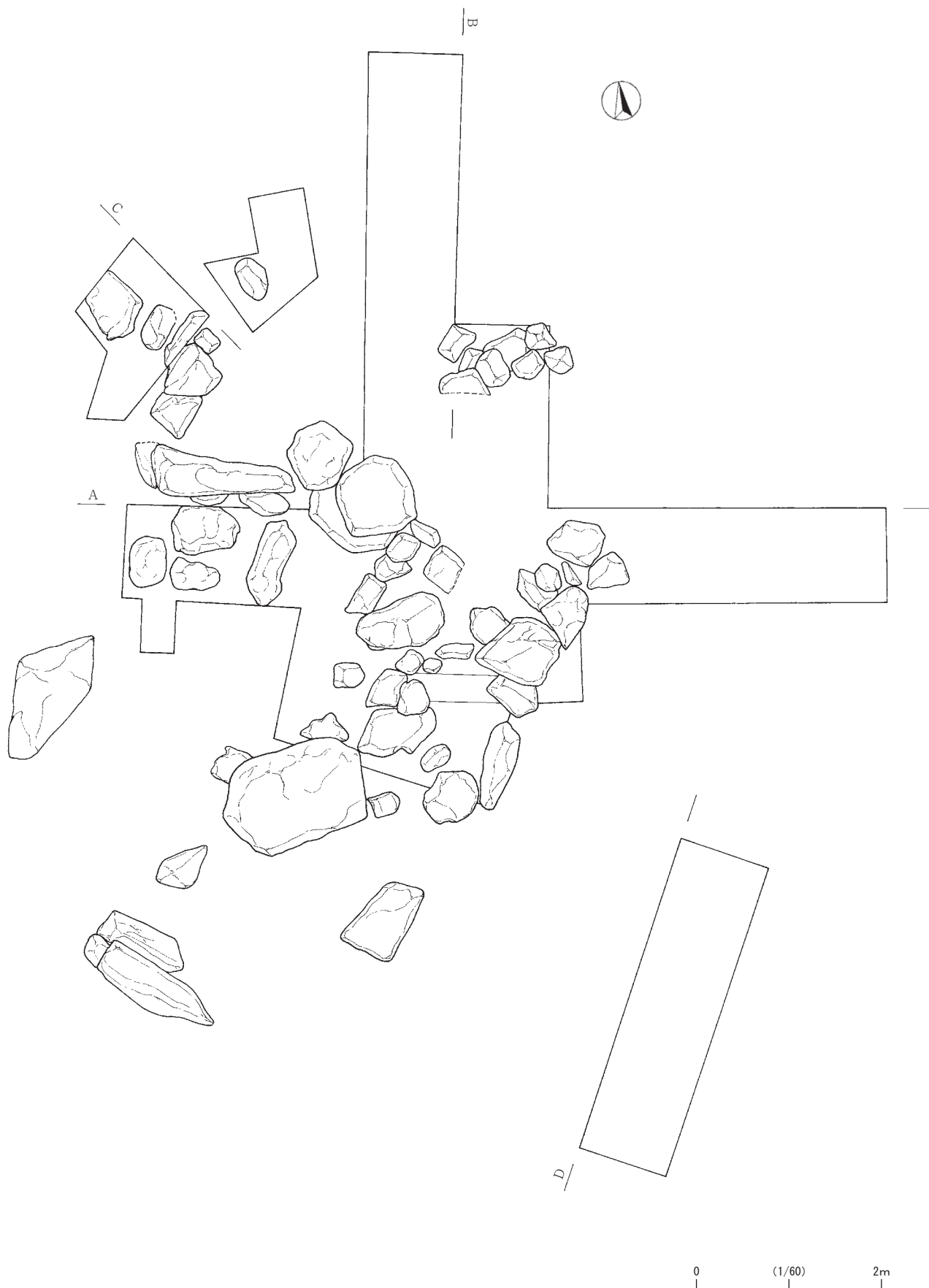


図 52 245 号墳トレンチ個別図 (1/60)

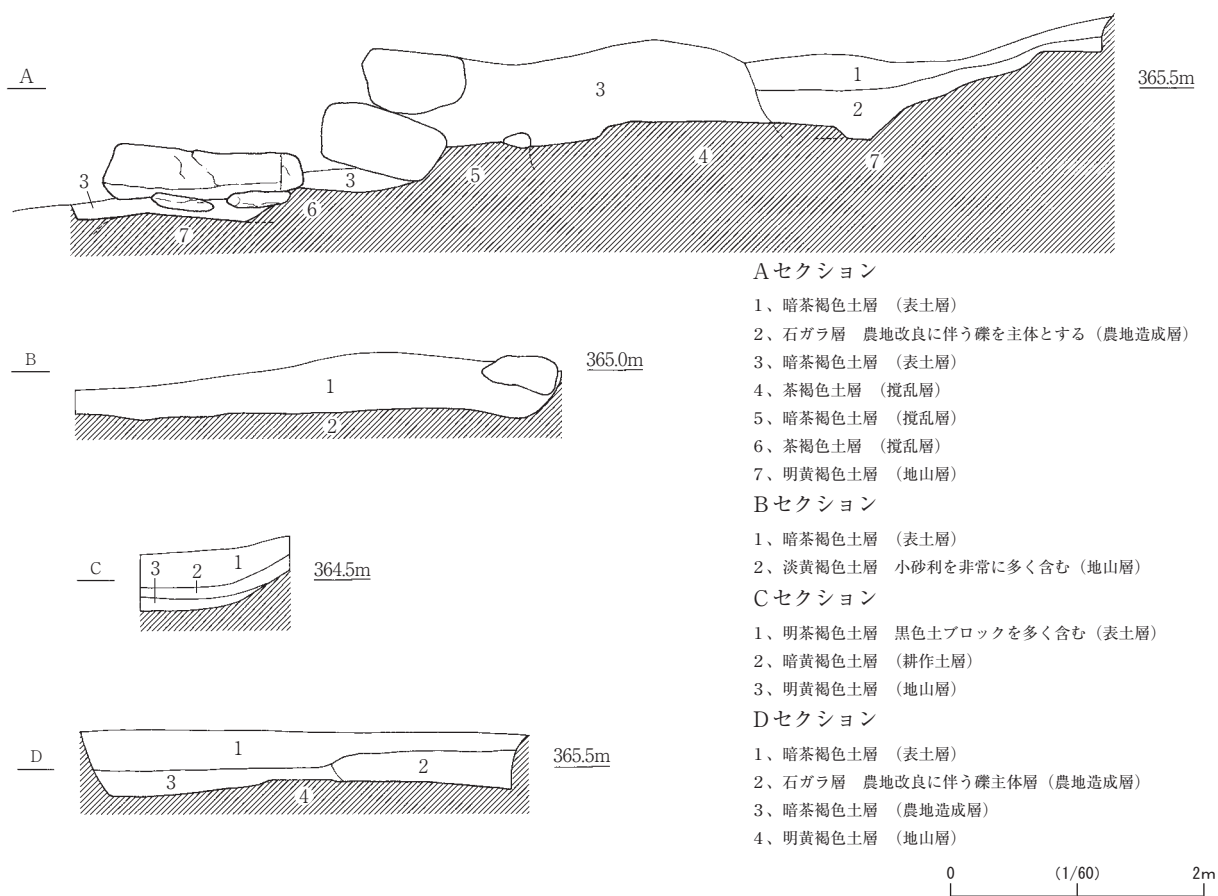


図 53 245 号墳トレンチ個別図 (1/60)

第13節 246号墳

1 立地と現状

246号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川左岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約370mに立地する。北西約36mには245号墳が近接している。本古墳は、墳丘盛土のほとんどが畑造成による土取りなどによって失われており、石室の天井部と西側の側壁が露出している非常に危険な状態であった。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と石を用いた構造である。現状では、墳丘外周を廻る石列などは確認することができなかった。

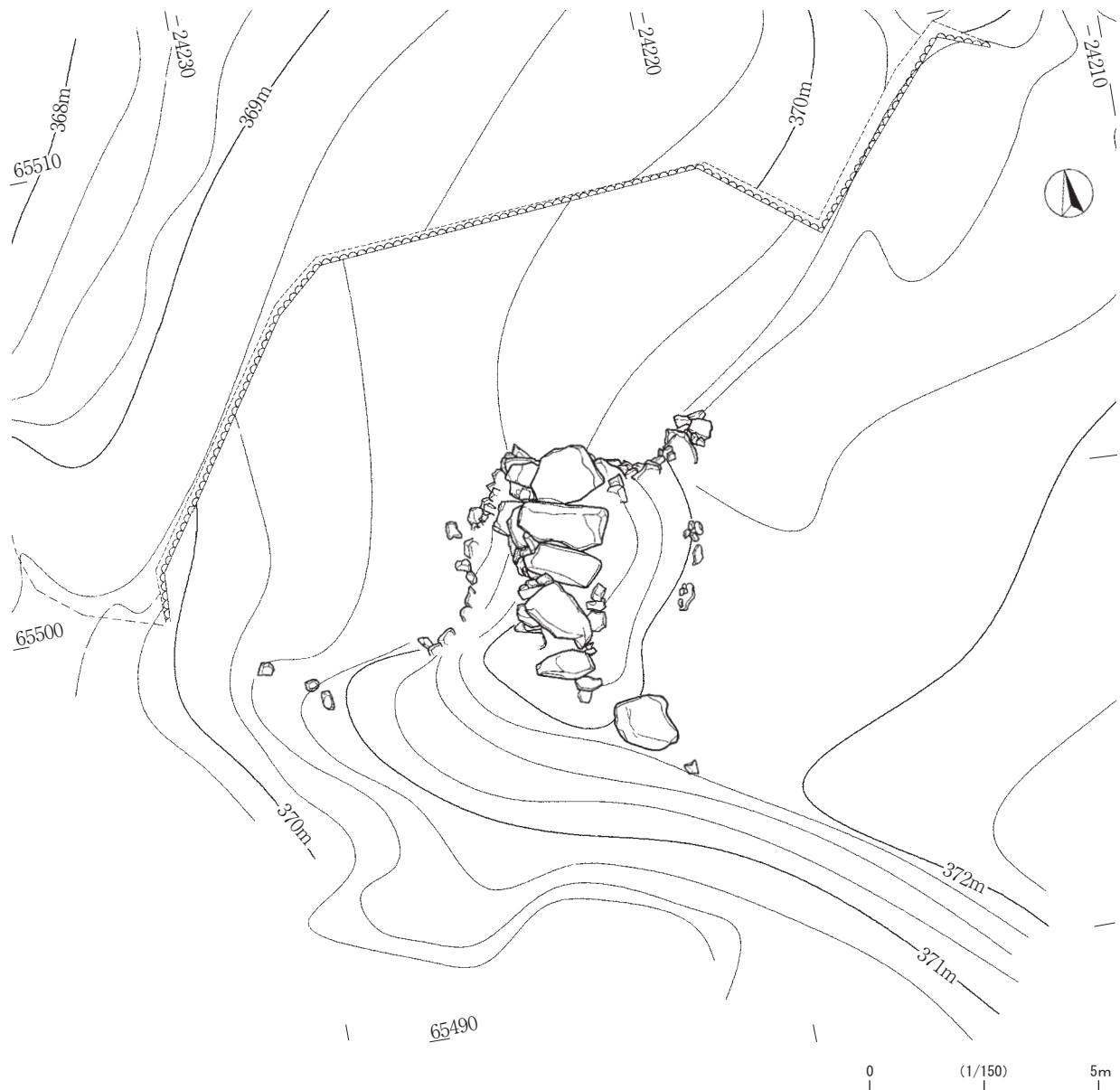


図54 246号墳墳丘測量図（1/150）

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は無袖式の横穴式石室である。奥壁や羨道部分が失われるなど、残存状況は良くない。玄室の主軸はN-10°-Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室の規模は、玄室長5.48 m、玄室幅は奥壁部で1.2 m、玄室高1.53 mを測る。

4 調査概要

本古墳は、1999（平成11）年度に墳丘の測量と試掘調査を、2000（平成12）年度に試掘調査を、2004（平成16）年度に発掘調査を実施した。墳丘を、石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にはトレンチを設定した。

A・B・C区

墳丘の残存範囲と、墳丘の構造を確認するために調査を行った。調査の結果、調査区内から4列の石列が検出

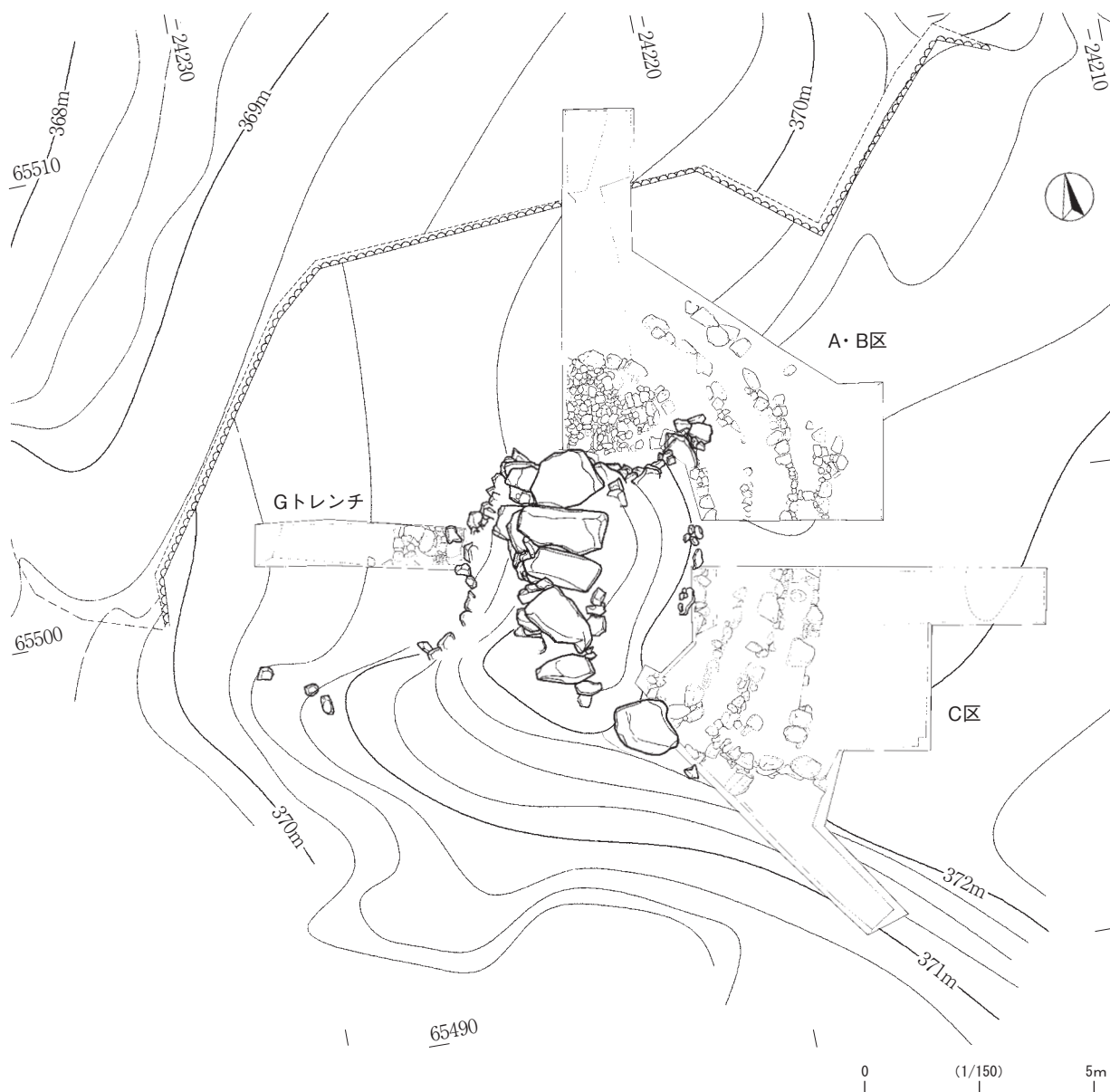
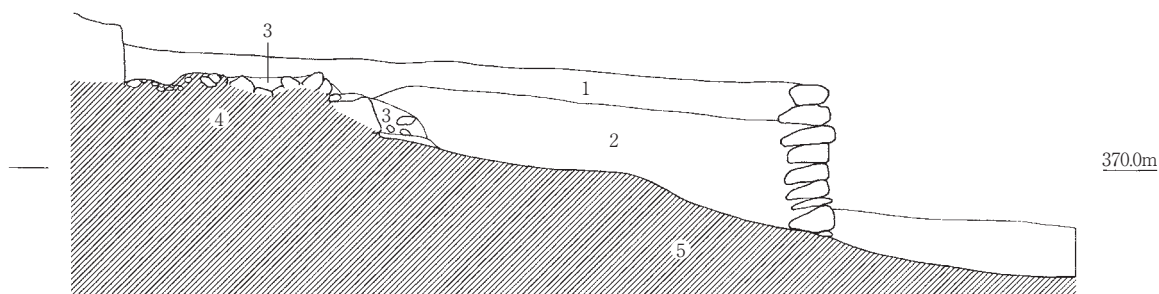


図 55 246 号墳調査成果図 (1/150)



A・B区

- 1、暗褐色土層（表土層）
 2、石ガラ層 φ5～25cm程度の礫主体層（畑の石垣の裏込め層） 4、暗褐色土層 石室控え積の礫群に土が若干混じる（盛土石層）
 3、暗黄褐色土層 黒色土に黄褐色土ブロック・礫が混入。（盛土石層） 5、暗黄褐色土層（地山層）

0 (1/60) 2m

図 56 246 号墳トレンチ個別図① (1/60)

された。一番外側を廻るのは、墳丘の外周を廻る石列である。やや脆弱な感はあるが、これより外側に石列が確認できないことから本石列を外周の石列と判断した。内側にある3列の石積み列は、墳丘内部に埋め込まれた土留めの石列である。断ち割り調査を行っていないので詳細は不明であるが、石室の構築と歩調を合わせて墳丘を築造していった過程の一端を表しているものと思われる。

土留めの石積みは、拳大～人頭大程度の石を、墳丘内側に傾けるようにして積み上げ、石室を中心とする半球体の墳丘全体を擁護しようとしていた工夫が読み取れる。この技法は、244号墳で見られるような堅固な石垣状

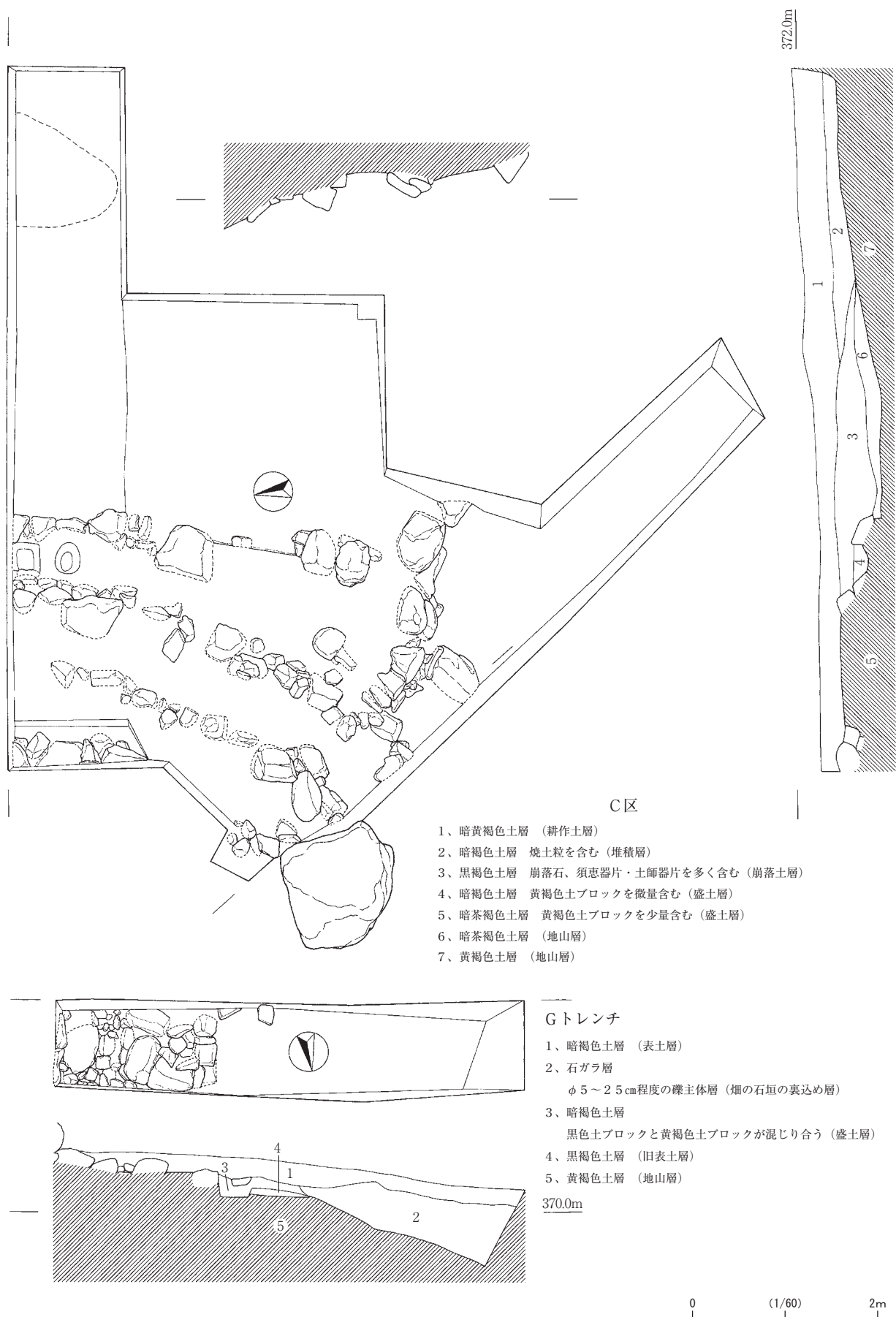


図 57 246 号墳トレンチ個別図② (1/60)

石積みと、技術的な発達過程などの関連性を考えるうえで示唆深い。1列目から4列目までのそれぞれの合い間は土で埋められている。一方、4列目の内側には礫が積み上げられている。この礫は石室の控え積みと考えられる。控え積みを直接押さえる役目があるからであろうか、4列目の石積み列は、2・3列目の石積みと比較して堅固である。

A区北側は、後世の畑造成にともなう石垣の構築によって破壊されていた。C区南側から古墳にともなう石列に直交する石列が検出されたが、これも古い段階の畑造成にともなう石垣の一部であった。石室奥壁付近では、石室の裏込め施設と考えられる石積みが検出されたほか、礫敷きの上に奥壁の基礎となる石を乗せ、その基礎石と同じレベルまで礫を敷きその上に側壁を積むという石室構築過程を示す状況を観察できた。また試掘調査時において、外周を廻る石列と2列目石列との間がテラス状となり、テラス上には壺形埴輪が据えられていた可能性が指摘されたが、面的な調査を行った結果そのような状況は確認できなかった。

Gトレンチ

墳丘構築にともなう多くの石列が検出された調査区の対角線上に位置する。墳丘の残存範囲と、墳丘の構造を確認するために調査を行った。調査の結果、墳丘を取りまくように構築された畑造成にともなう石垣の構築時に、墳丘のほとんどが削平されたことが判明した。トレンチ中央付近でわずかな掘り込みを検出したが、この掘り込みが横穴式石室構築にともなうものなのか、控え積みを押さえるための石積みを設置するために設けられたものなのか、については明らかにすることはできなかった。この掘り込みより内側には横穴式石室の控え積みが残存していた。

第14節 247号墳

1 立地と現状

247号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川左岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約367mに立地する。245号墳と246号墳とを結ぶ石土手の中ほどに位置している。当該地には大型の石材が集積されているだけで、古墳の存在を彷彿とさせるようなものは何も存在しない。

2 墳丘・外部施設

不明である。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部の種類や構造は不明である。

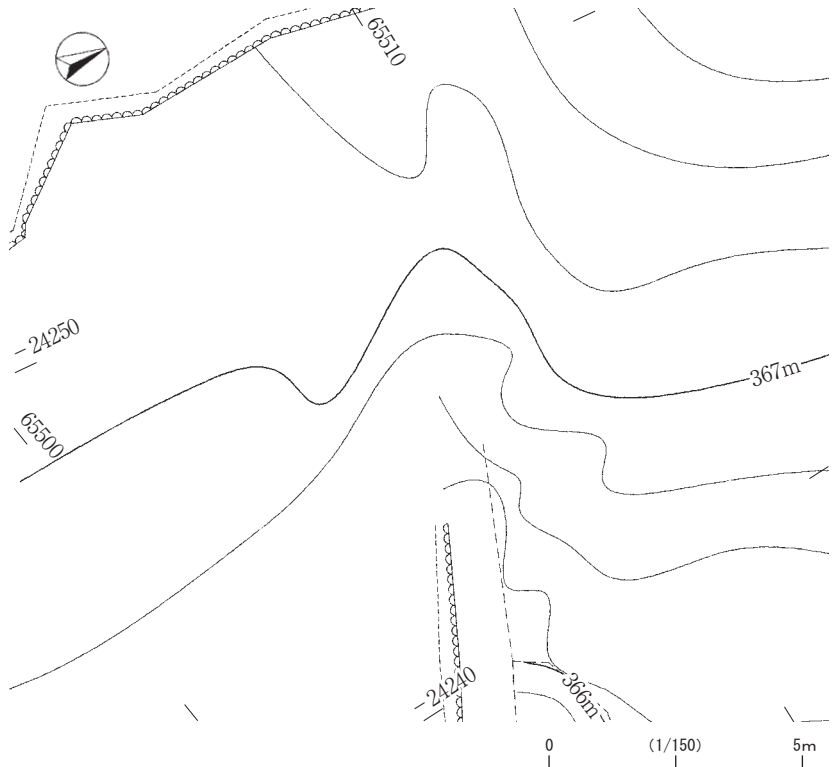


図58 247号墳墳丘測量図 (1/150)

4 調査概要

本古墳は、1999（平成11）年度に墳丘の測量を、2000（平成12）年度に試掘調査を実施した。試掘調査は石材が散乱する範囲において任意にトレンチを設定して行った。調査の結果、当該地に散乱する石材は耕作土層中や地表面に置かれたものであることが判明した。集積された石材が横穴式石室構築には不向きなことから、発掘によって遺物がまったく出土しなかったことなどから総合的に判断して、当該地は古墳ではないとの結論にいたった。

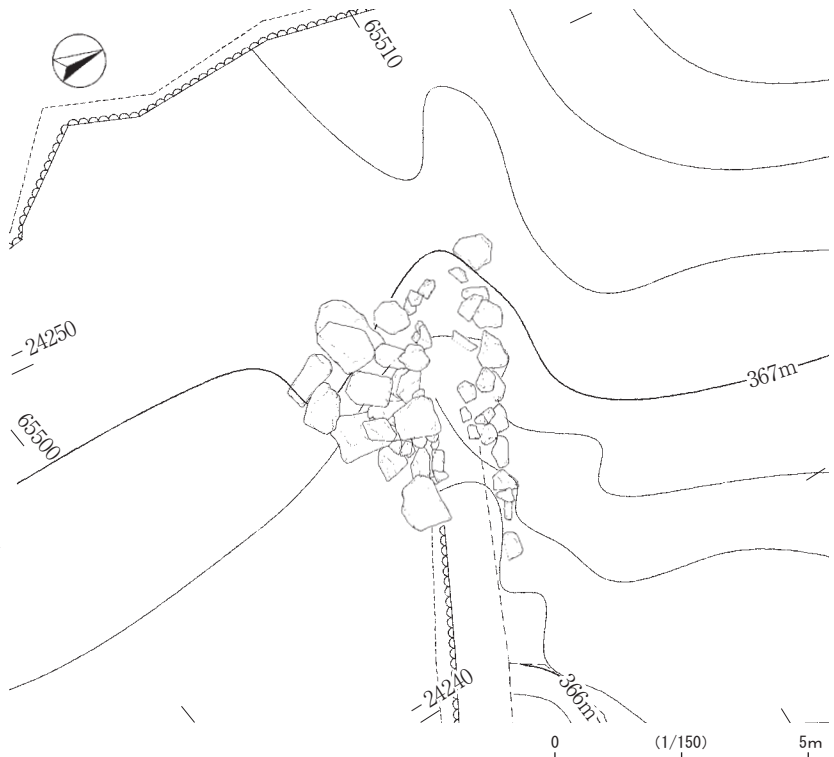


図59 247号墳調査成果図 (1/150)

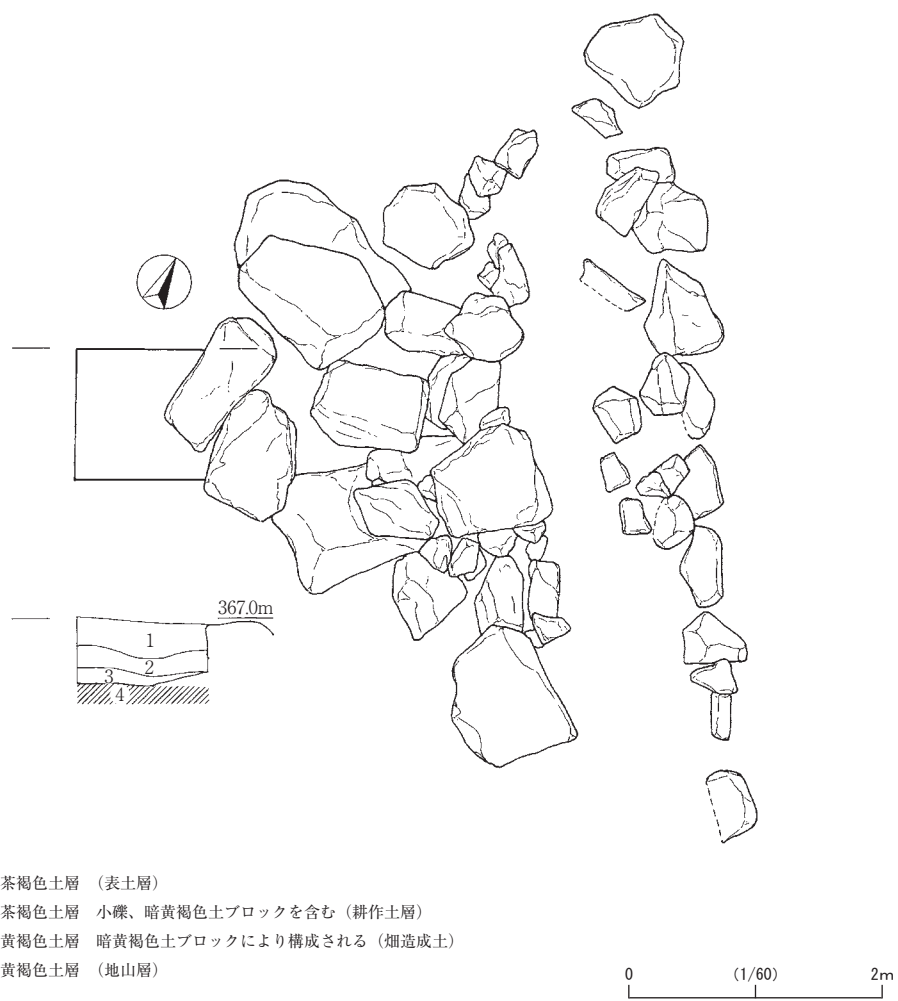


図 60 247 号墳トレンチ個別図 (1/60)

第15節 A号墳

1 立地と現状

A号墳（26-A号墳）は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約366mに立地する。南約12mには26号墳、南西約13mにはB号墳、北西約23mにはD号墳が近接している。本古墳は、墳丘の北側をはじめほとんどが削平されており、石室の一部が露出していたことで古墳であることが判明したものである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。現状では、墳丘の外周を廻る石列などは確認できなかった。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。削平にともない、天井石や側壁上部は石室内部に転落している。石室内部が埋没しているため詳細は不明であるが、小型の胴張り横穴式石室であると推測される。南南西方向に開口している。

4 調査概要

本古墳は、1984（昭和59）年の明治大学による測量調査で新たに発見された古墳（26-A号墳）で、1998（平成10）年度に墳丘の測量を、1999（平成11）年度に試掘調査を、2005（平成17）年度に発掘調査を実施した。

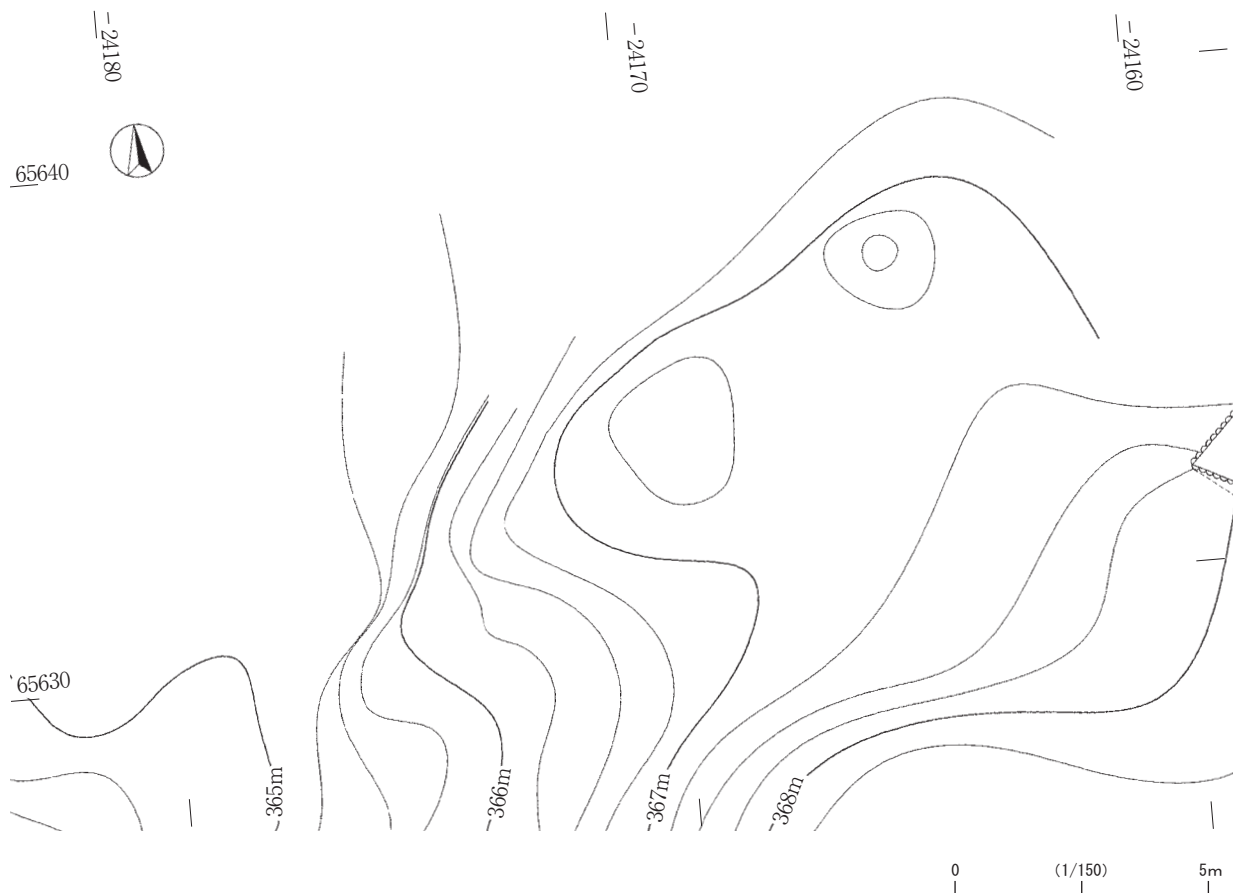


図 61 A号墳墳丘測量図 (1/150)

墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にトレンチを設定した。

Cトレンチ

墳丘東側の山側にあたる部分である。トレンチ東側から人頭大程度の石材を用いた石室控え積みの礫と、これらを擁護する大型の石材を用いた石積みが検出された。この控え積みは墳丘山側を若干掘り込んで行われていたようである。トレンチ東側は既に削平されており墳丘の範囲を示す遺構は検出されなかった。

Eトレンチ

墳丘南側の石室開口部にあたる部分である。側壁の壁体が若干検出された。石室開口部は既に破壊されているのか検出されなかった。

Gトレンチ

墳丘西側の谷側にあたる部分である。段々畑造成のため地山上面まで削平を受けており、墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。

Hトレンチ

墳丘北側の石室裏側にあたる部分である。段々畑造成のため地山上面まで削平を受けており、墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。

上記の調査結果からは本古墳の形状や範囲は確認できなかった。



図 62 A号墳積石実測図 (1/80)

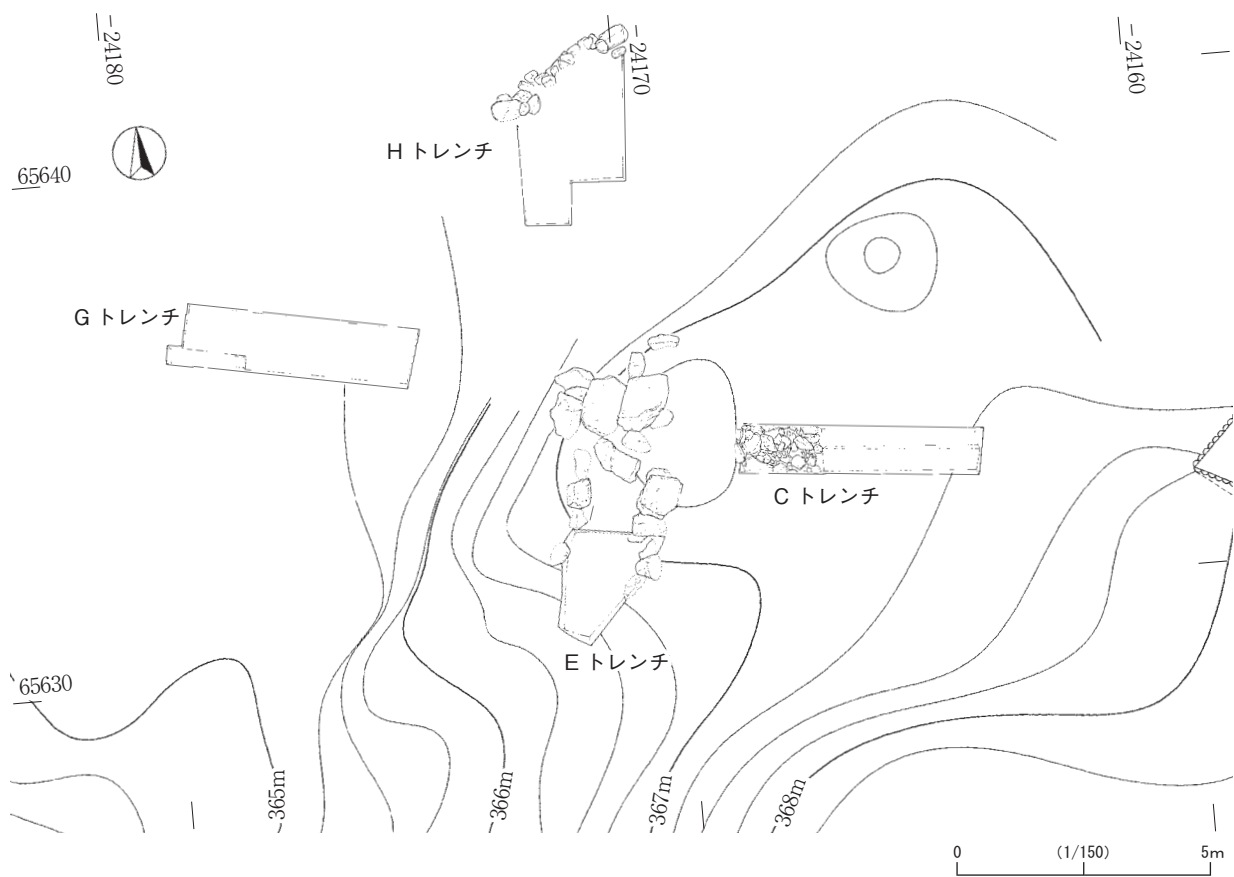


図 63 A号墳調査成果図 (1/150)

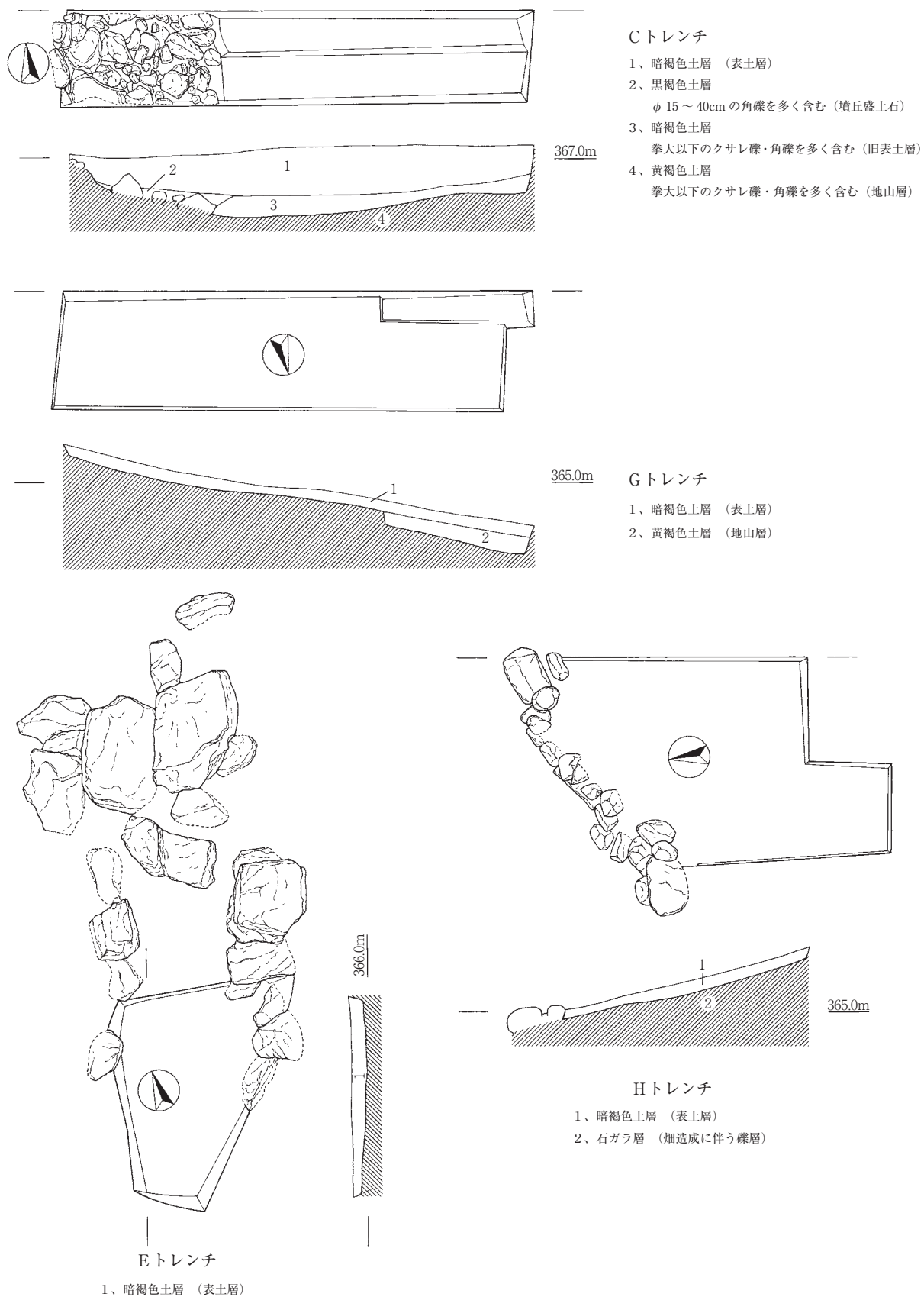


図 64 A 号墳トレンチ個別図 (1/60)

第 16 節 B 号墳

1 立地と現状

B 号墳（26-B 号墳）は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約 365 m に立地する。北東約 13 m には A 号墳、東約 13 m には 26 号墳、南約 13 m にはハ号墳、南西約 14 m には C 号墳、北西約 23 m には D 号墳が近接している。本古墳は、墳丘の北西側をはじめ多くが削平されており、横穴式石室の奥壁の一部が露出していたことで古墳であることが判明したものである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。調査着手時において、墳丘の外周を廻る石列と思われる石が数箇所観察できた。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。削平にともない、天井石は失われ、側壁上部も破壊されていた。石室内部が埋没しているため詳細は不明であるが、小型の胴張り横穴式石室であろう。石室の主軸は $N - 82^{\circ} - W$ を測り、北西方向に向けて開口している。石室の規模は現状で、奥壁から残存している羨道側壁最前端部までが 4.25

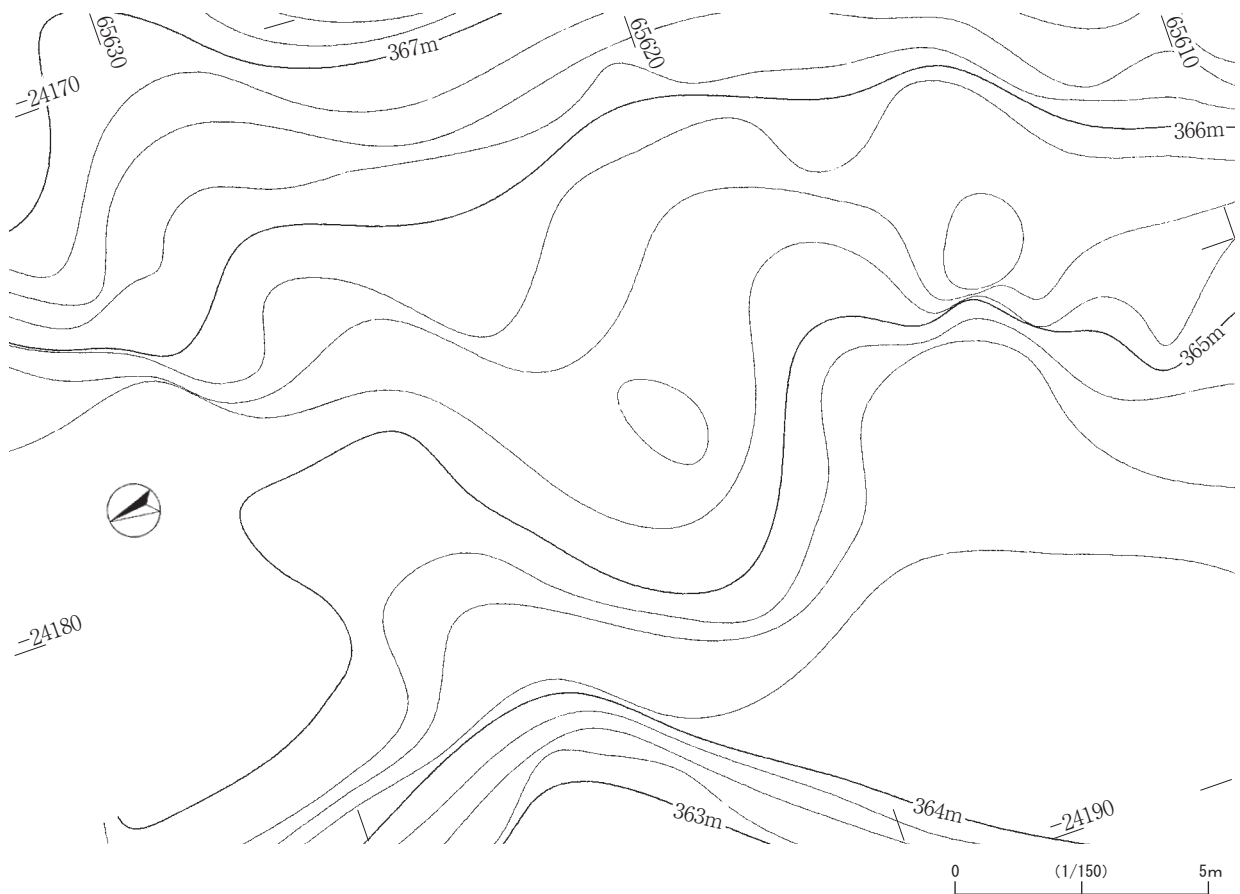


図 65 B 号墳墳丘測量図 (1/150)

m、玄室長 2.35 mを測る。

4 調査概要

本古墳は、1984（昭和 59）年の明治大学による測量調査で新たに発見された古墳（26-B 号墳）で、1998（平成 10）年度に墳丘の測量と試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として、必要箇所にトレンチを設定した。

C トレンチ

墳丘南側の山側にあたる部分である。トレンチ北端（墳丘側）から 1～2 段の石垣状の石積みが発出されたが、これが墳丘外周を示す石列か否かは不明である。

E トレンチ

墳丘西側の石室開口部にあたる部分である。トレンチ東側から玄門立柱石と羨道側壁が発出され、内側は礫が充満する状況であった。トレンチ西側は既に削平されており、墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。

F トレンチ

墳丘北側の谷側にあたる部分である。トレンチ南端から石列が発出された。この石列は C トレンチで確認され

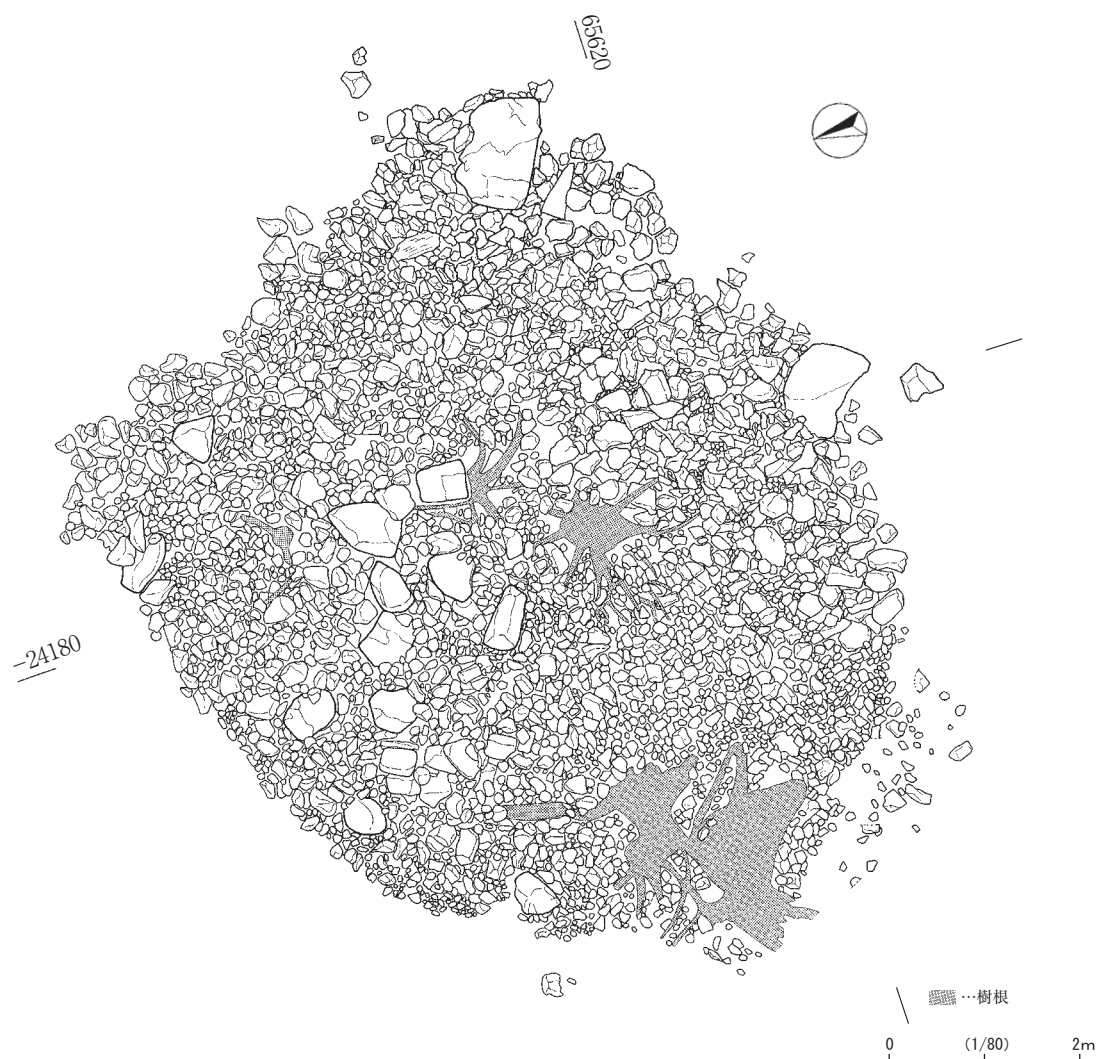


図 66 B 号墳積石実測図 (1/150)

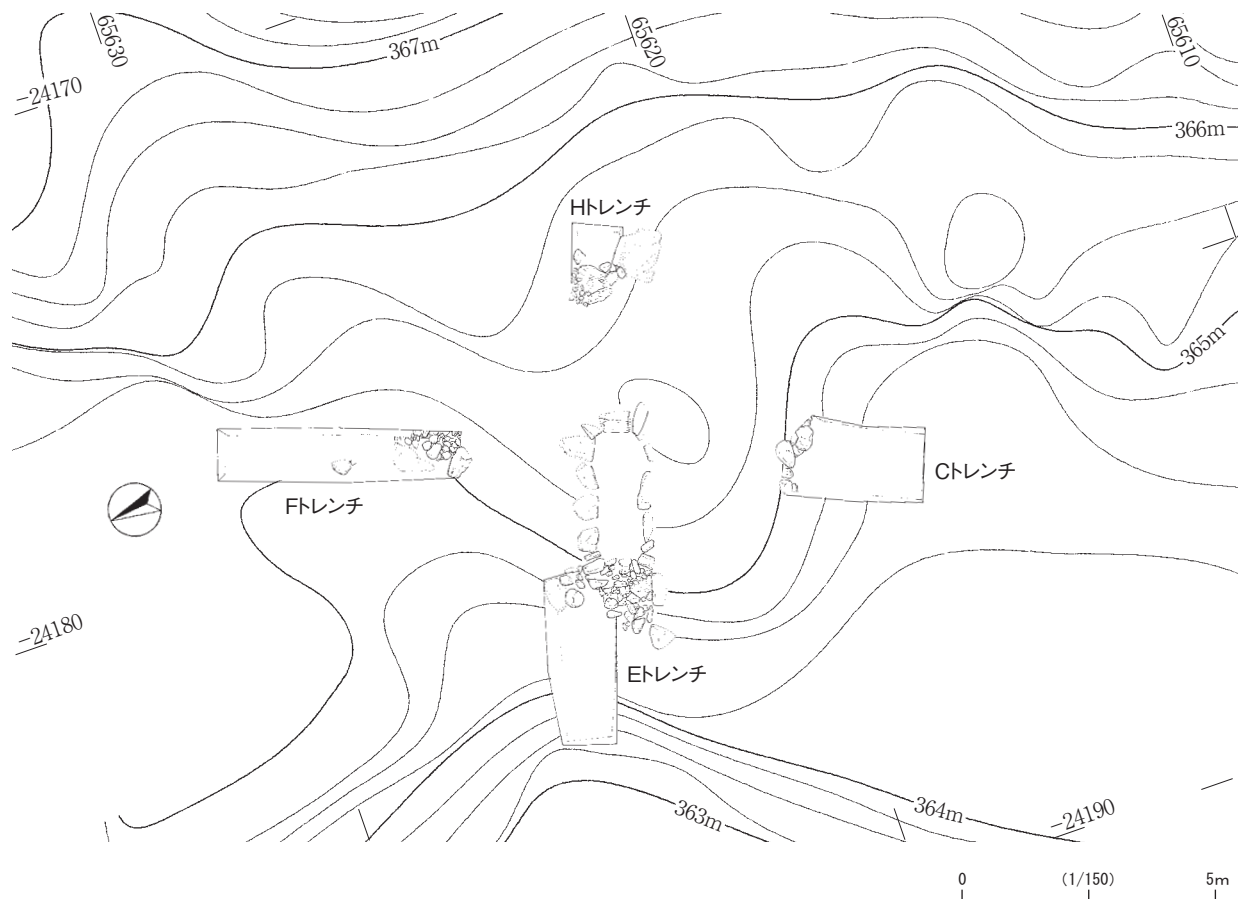


図 67 B号墳調査成果図 (1/80)

たものや、Hトレンチで確認された内側の石列と同じ列に連なるものと考えられる。本石列の外側にも墳丘を構成していたものと考えられる礫群が検出されていることなどから、本石列とこれに連なる石列は墳丘内の埋め込み石列であると考えられる。

Hトレンチ

墳丘東側の石室裏側にあたる部分である。トレンチ西端（墳丘側）からCトレンチやFトレンチで検出されている石列に連なる石列が検出された。このさらに外側にいま一列の石列が検出された。本石列は一部で地山に含まれる自然石を利用する形で設置されている。現段階ではこの石列を墳丘外周に並べられた石列であると考えている。

上記の調査結果から、本古墳は直径約7m内外の規模の小さい円墳であると考えられる。

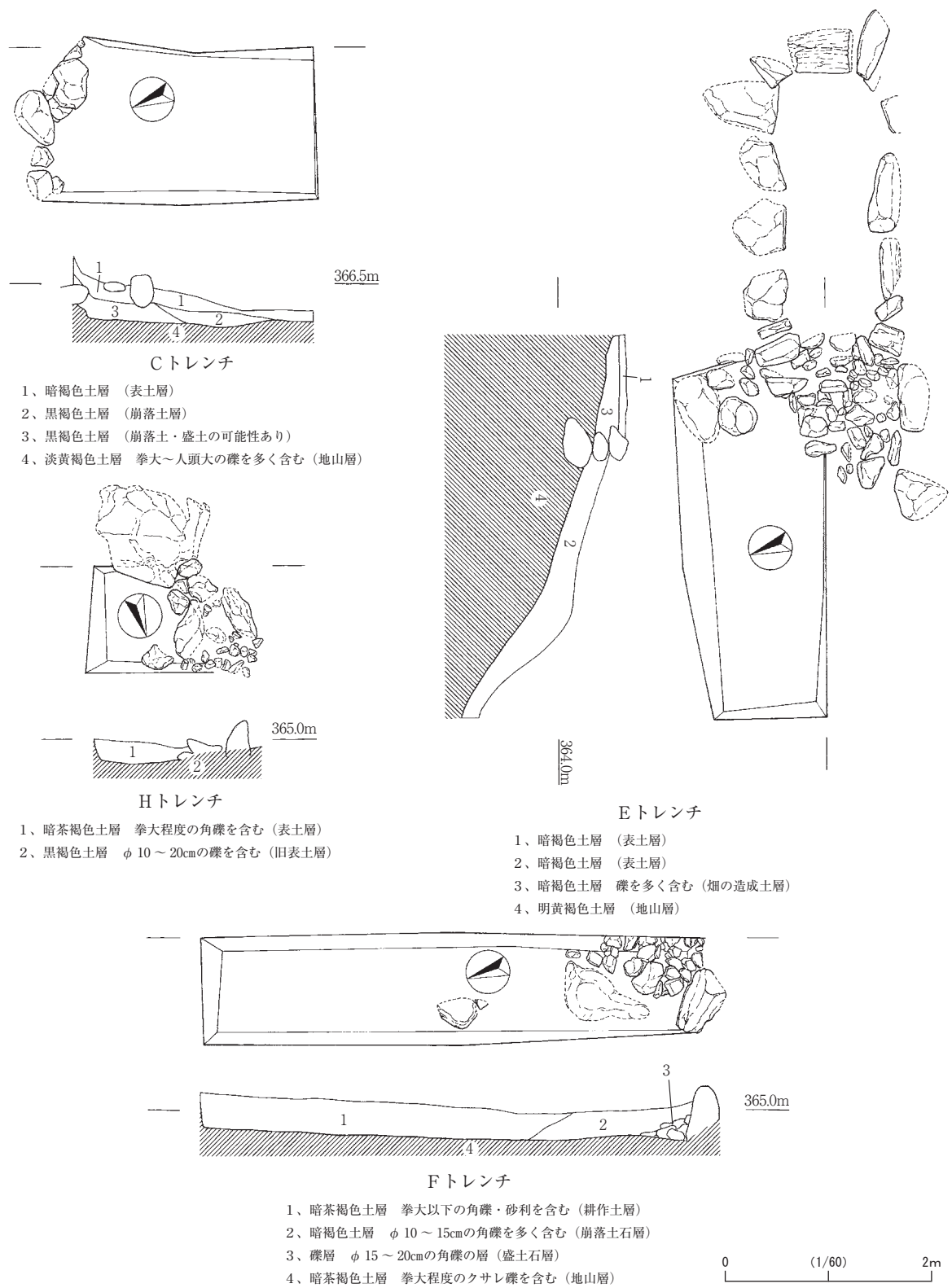


図 68 B号墳トレンチ個別図 (1/60)

第17節 C号墳

1 立地と現状

C号墳（26-C号墳）は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約363mに立地する。北約18mにはD号墳、北東約14mにはB号墳、南東約15mにはハ号墳が近接している。本古墳は、墳丘の北西側をはじめほとんどが削平されており、横穴式石室の奥壁や側壁の一部が露出していたことで古墳であることが判明したものである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。調査着手時において、墳丘の外周を廻ると思われる石列などは確認できなかった。

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。削平にともない天井石は失われ、側壁上部も破壊されていた。石室内部



図 69 C号墳墳丘測量図 (1/150)

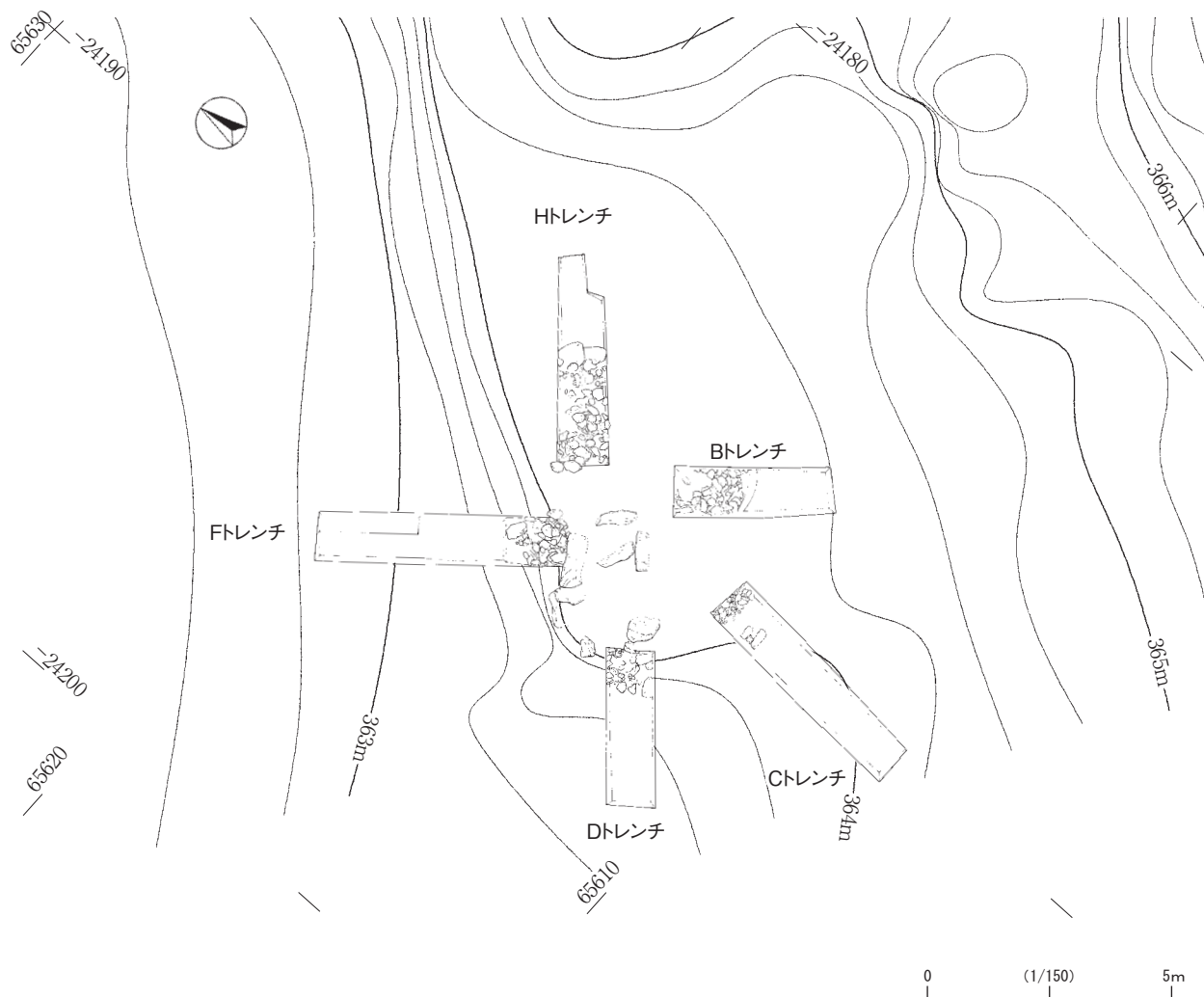


図 70 C号墳調査成果図 (1/150)

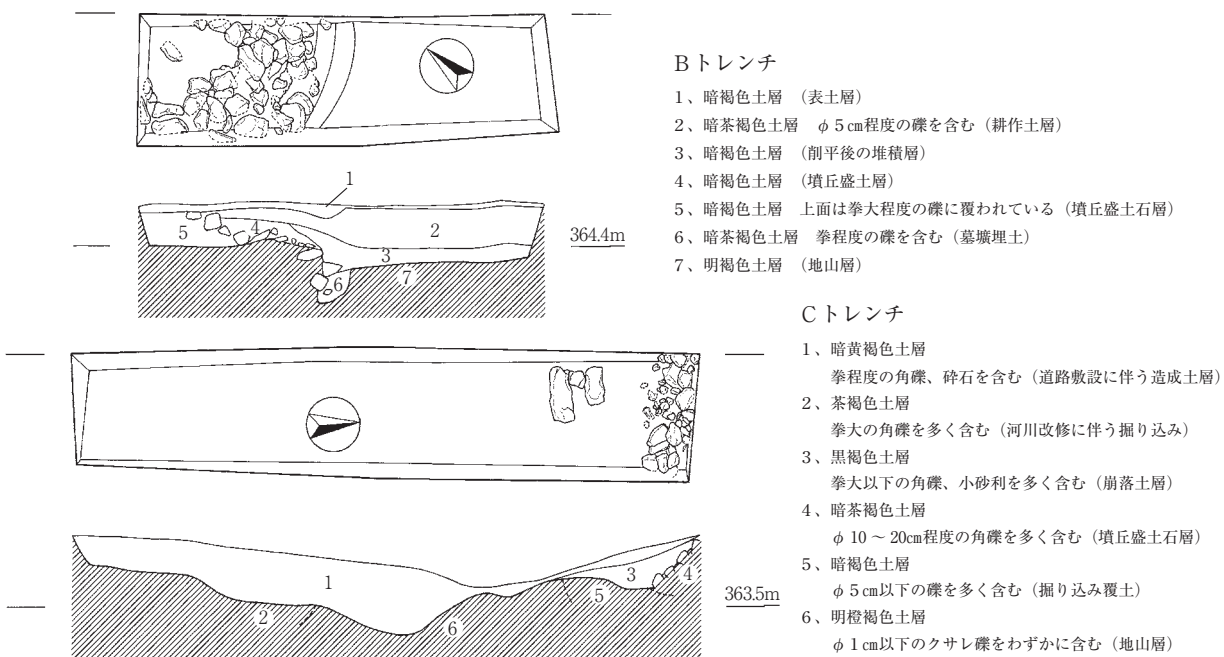


図 71 C号墳トレンチ個別図① (1/60)

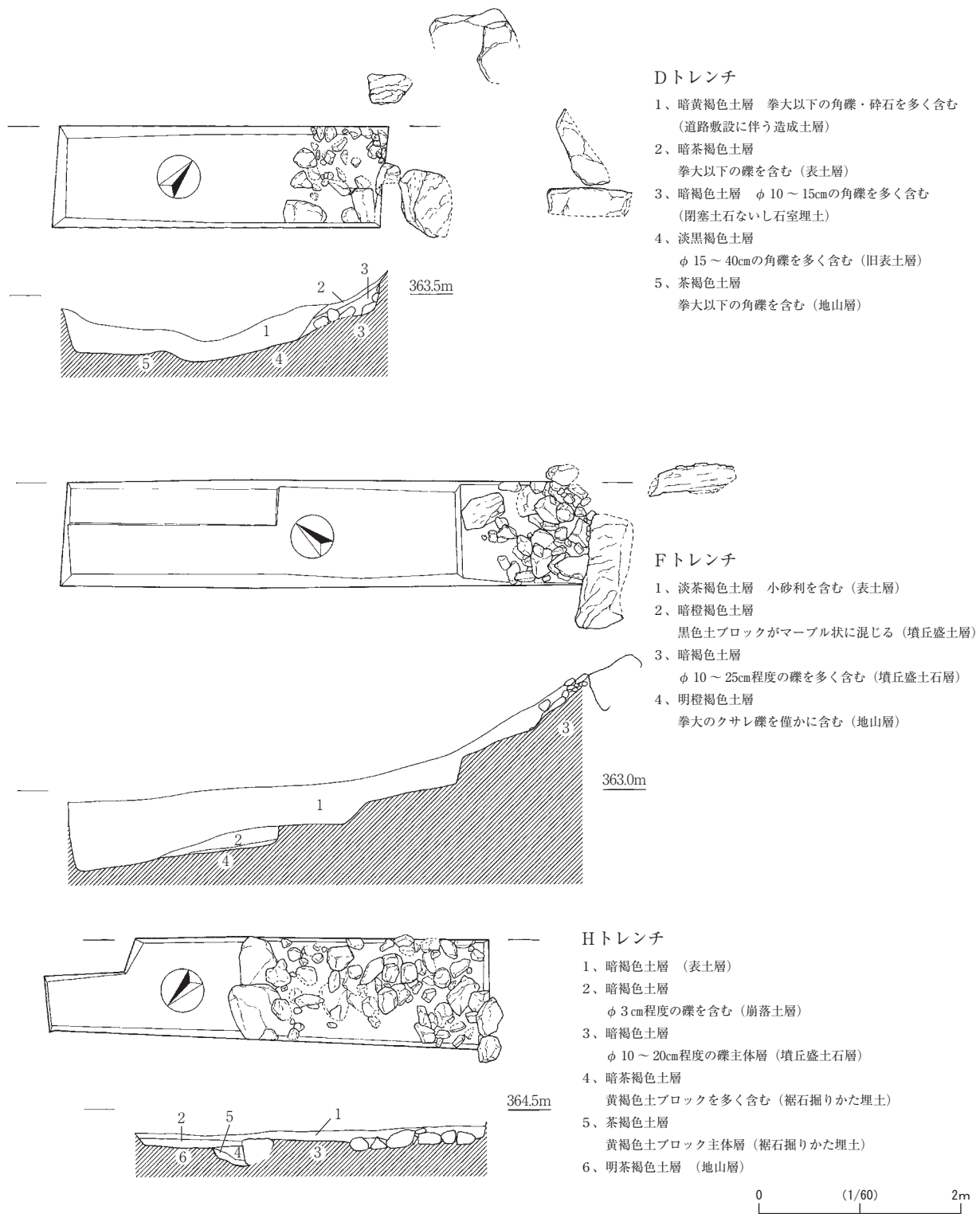


図 72 C号墳トレンチ個別図② (1/60)

が埋没しているため詳細は不明であるが、小型の胴張り横穴式石室であろう。石室の主軸はN - 49° - Eを測り、南西方向に向けて開口している。石室の規模は現状で、奥壁から残存している玄門部まで 2.63 mを測る。

4 調査概要

本古墳は、1999（平成 11）年度の予備調査で新たに発見された古墳（新号墳・26-C 号墳）で、同年度に墳丘測量と試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。試掘調査では、墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にトレンチを設定した。

B トレンチ

墳丘の南東、山側にあたる部分である。外周の石列など墳丘の範囲を示す遺構は検出されなかった。主軸より南東側約 3 m のところで、石室構築にともなう掘り込みが検出された。山側のみの、半円形の掘り込みと考えられるが、大室古墳群では初の確認事例となる。この掘り込みの中から、人頭大程度の礫を石室の控え積みとして積み上げている。

C トレンチ

墳丘南側の道路敷設により削平された部分にあたる。トレンチ北端で、人頭大程度の石室控え積みの石材が検出されたが、墳丘範囲を示す遺構は既に削平されていた。トレンチ南部からは音無川改修時のものと思われる攪乱が検出された。

D トレンチ

墳丘南西側の開口部にあたる部分である。トレンチ北東部分で玄門立柱石と羨道側壁と思われる石材が 1 個検出された。南西部分は地山層まで削平されており墳丘範囲を示す遺構や羨道部分は検出されなかった。

F トレンチ

墳丘北西側の谷側にあたる部分である。トレンチ内の墳丘側からは石室控え積みの石材と、若干の盛土層が検出された。墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。

H トレンチ

墳丘北東側の石室裏側にあたる部分である。トレンチ中央付近から比較的大型の石材を用いた石列が検出された。土層の観察などからこの石列が墳丘外周を廻る石列であると考えられる。本石列より内側の墳丘部分には、人頭大程度の石室控え積みの礫が多く積み上げられた状態であった。

上記の調査結果から、墳丘構築に礫を多用した、直径約 8 m 内外の円墳であったものと考えられる。

第18節 D号墳

1 立地と現状

D号墳（?号墳）は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約362mに立地する。南東約23mにはA号墳、同じく南東約23mにはB号墳、南約28mにはC号墳、が近接している。本古墳は、墳丘の西側と上部のほとんどが削平されていた。ケヤキの巨木の根元に横穴式石室の奥壁や側壁の一部が露出していたことや、人頭大程度の石材が集積されていたことで古墳であることが判明したものである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。調査着手時において、墳丘の外周を廻ると思われる石列などは確認できなかった。

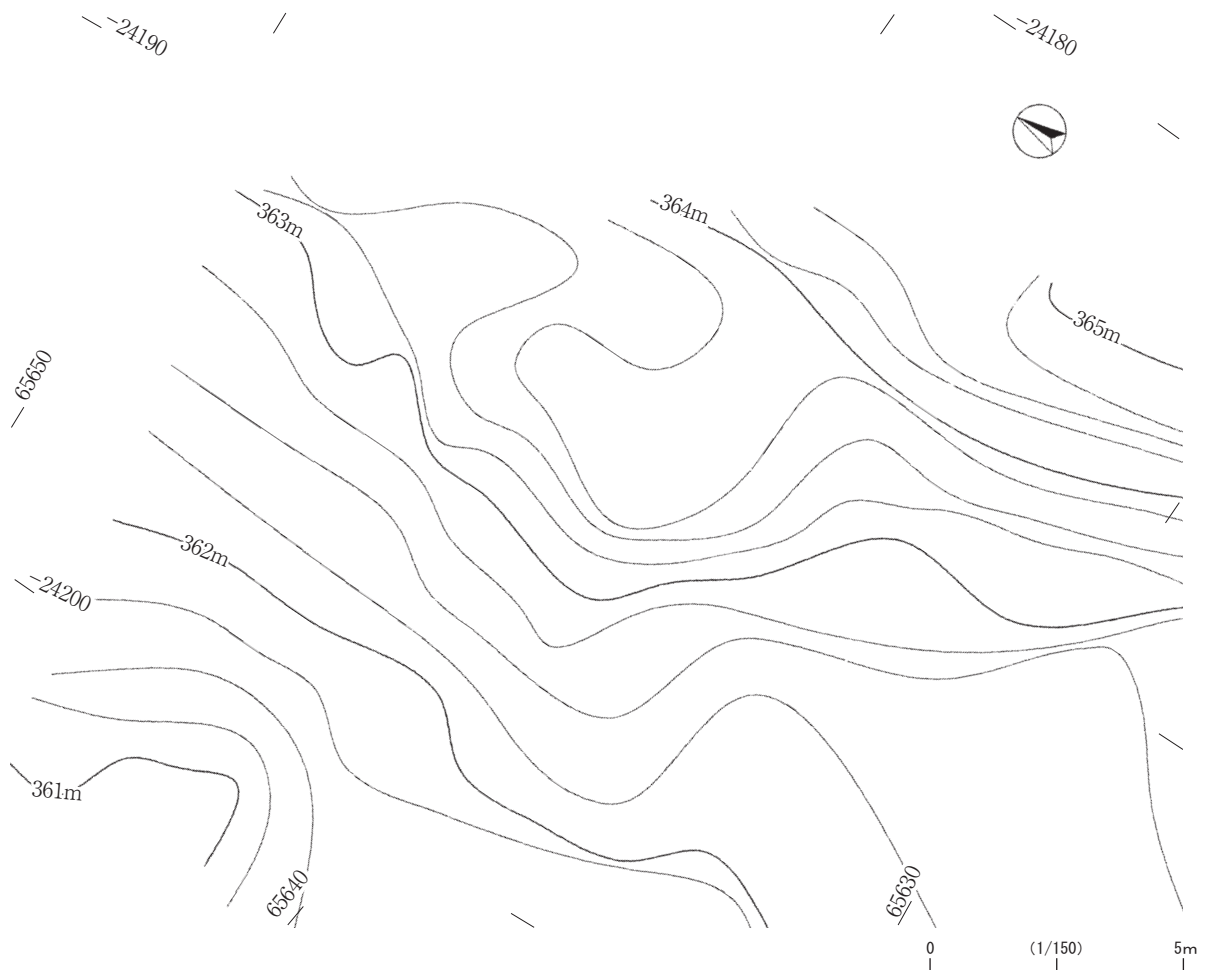


図73 D号墳墳丘測量図 (1/150)

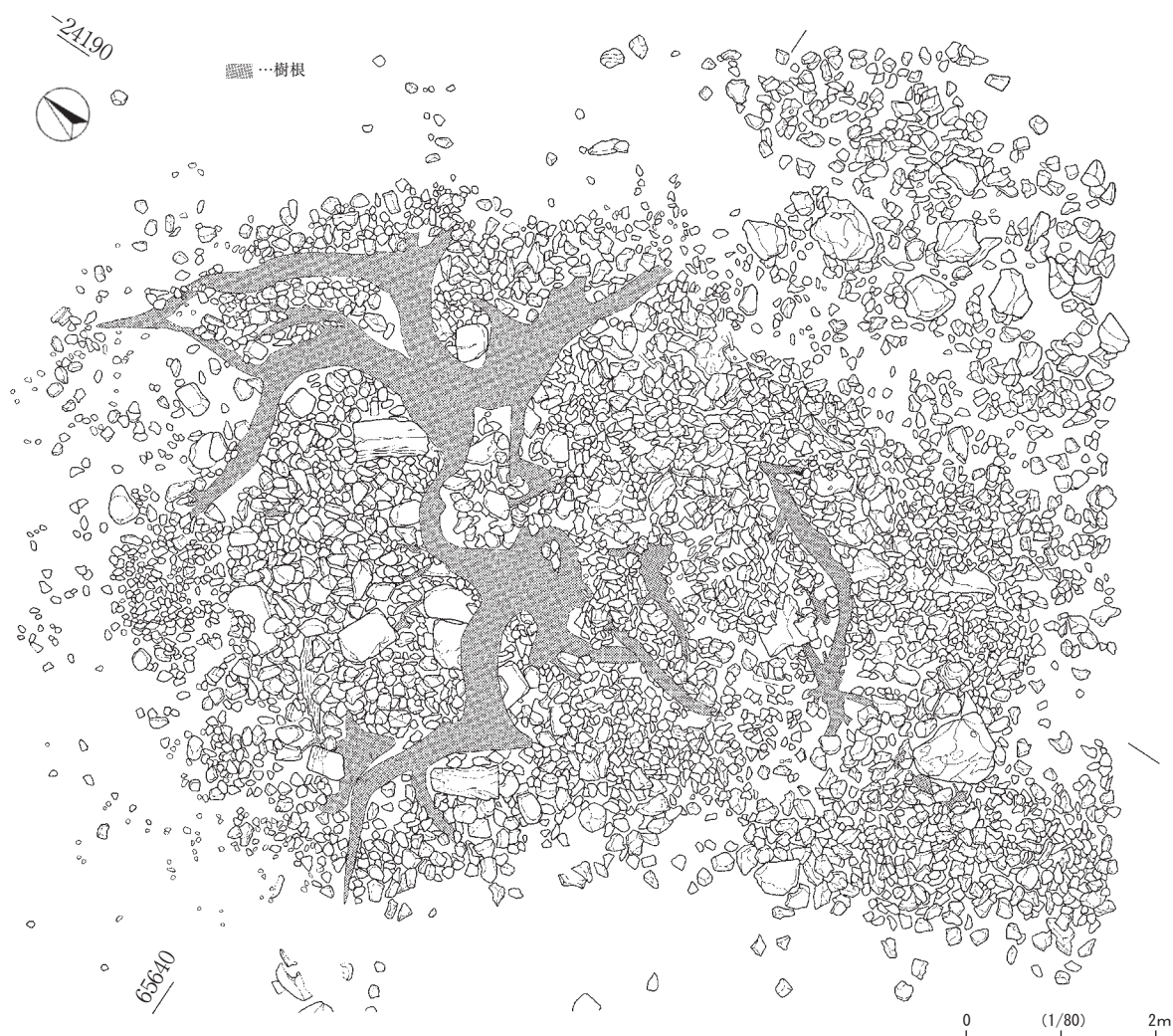


図 74 D号墳積石実測図 (1/150)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。削平にともない天井石は失われ、側壁上部も破壊されていた。石室内部が埋没しているため詳細は不明である。南西方向に向けて開口している。石室の規模は現状で、奥壁から残存している羨道部まで5.73 mを測る。壁体最下段の石材は、大型の板石を横位に立てているのが特徴的である。上部構造は不明であるが、残存している壁体は板状の石材を平積みしている。

4 調査概要

本古墳は、1998（平成 10）年度の予備調査にて新たに発見された古墳（？号墳）であり、2000（平成 12）年度に試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りにA～H区として必要箇所にはトレンチを設定した。

B トレンチ

墳丘南東側の山側にあたる部分である。掘り下げの結果、トレンチ南東部分から古墳の外周を示すと思われる石列が検出されたほか、墳丘内部に埋め込まれた土留めの石列が2列検出された。墳丘中心は礫を積み上げて構築されていた。なお、遺物の散布状況などから、本トレンチの南東側の高まりが古墳である可能性が浮上してきた。

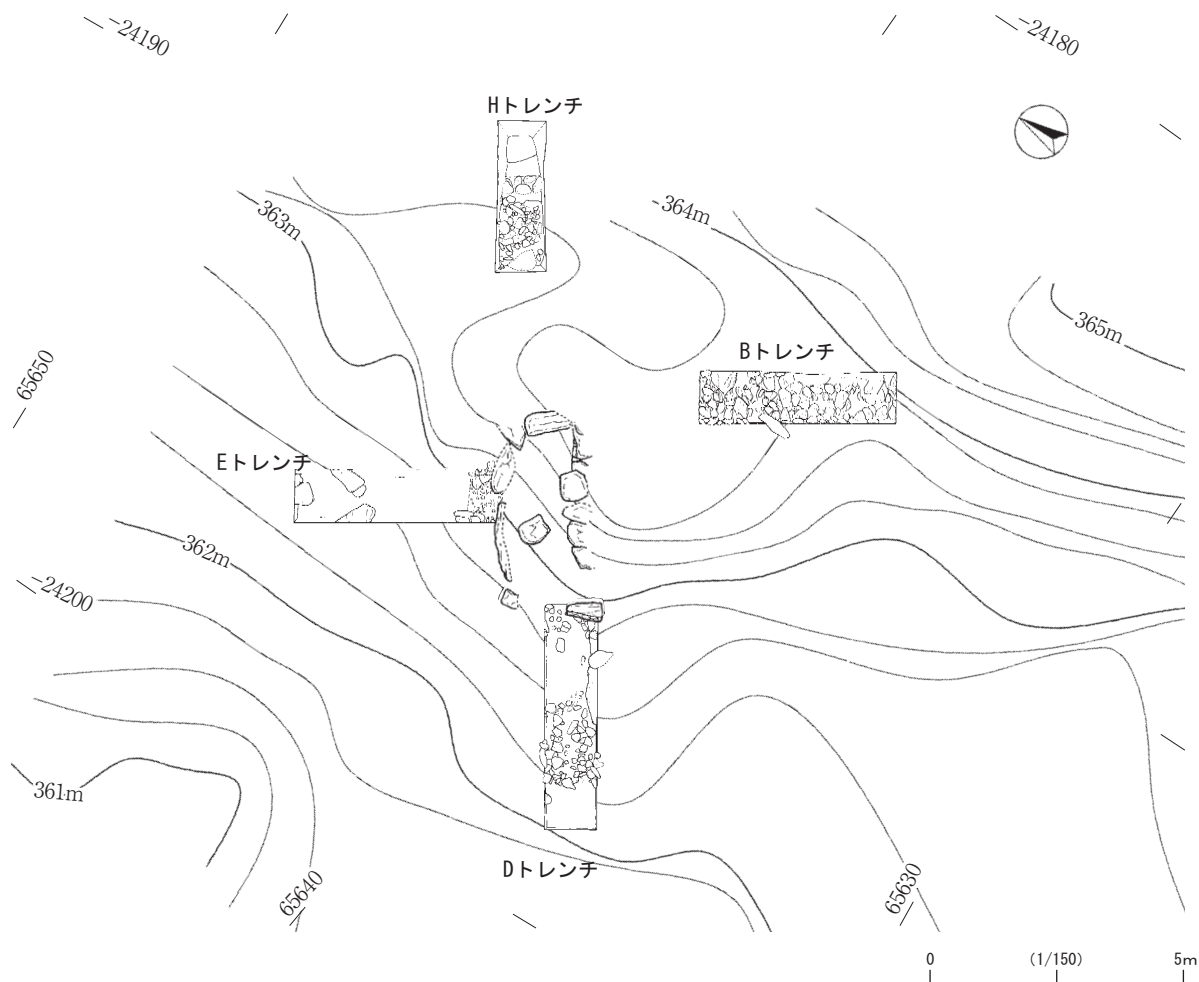


図 75 D号墳調査成果図 (1/80)

Dトレンチ

墳丘南西側の石室開口部にあたる部分である。トレンチ南端から玄門立柱石と羨道側壁が検出された。この側壁前面が羨門部にあたる。羨道内側からは閉塞施設の残欠と思しき礫が検出された。また、開口部に近いことから土師器や須恵器の破片が多く出土した。

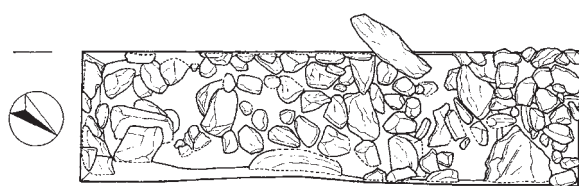
Fトレンチ

墳丘北西側の谷側にあたる部分である。トレンチ北西側のほとんどは開墾によって削平されており、墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。トレンチ南東端（墳丘側）からは、石室側壁最下段石設置のための掘り込みと、これに充填された控え積みの礫が検出された。

Hトレンチ

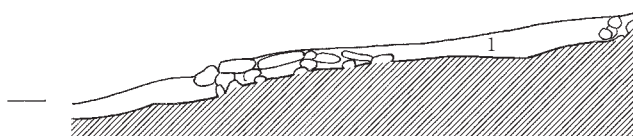
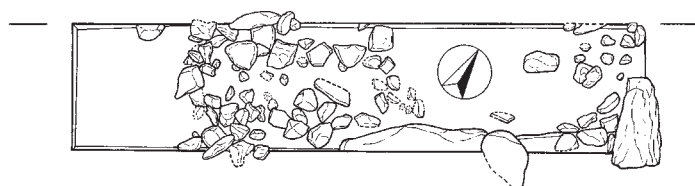
墳丘北東側の石室裏側にあたる部分である。トレンチ南西側から墳丘内埋め込みの石列が検出された。トレンチ北東側は、開墾にともなう攪乱が深くおよんでおり、墳丘範囲を示す遺構は検出されなかった。墳丘本体は礫を積み上げて構築されていた。

上記の調査結果から、本古墳は墳丘構築に礫を多用した、直径約 12 m内外の円墳であったものと考えられる。



363.5m Bトレンチ

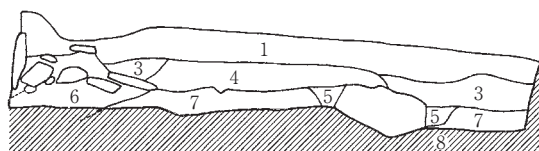
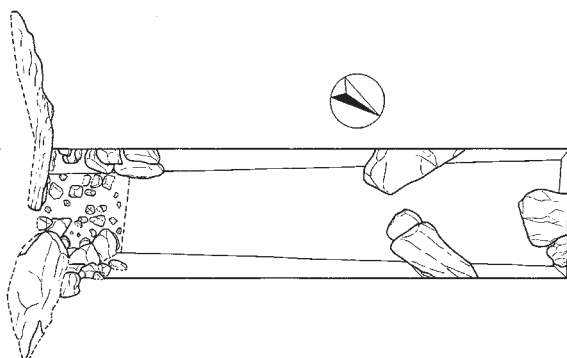
- 1、茶褐色土層 ϕ 15 ~ 20cmの角礫を主体とする（崩落石層）
- 2、暗褐色土層 ϕ 15 ~ 30cmの角礫を非常に多く含む（墳丘盛土石層）
- 3、黒褐色土層（旧表土層）



Dトレンチ

- 1、暗茶褐色土層
部分的に ϕ 15 ~ 20cmの角礫・平石を多く含む（表土層）

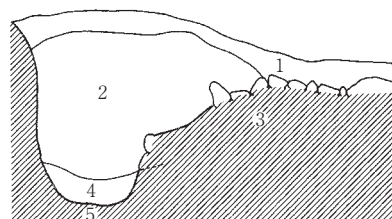
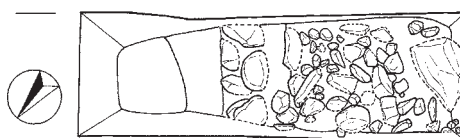
362.0m



362.0m

Fトレンチ

- 1、黒褐色土層（表土層）
- 2、暗茶褐色土層（攪乱）
- 3、暗茶褐色土層（畑造成土）
- 4、茶褐色土層（畑造成土）
- 5、暗茶褐色土層（石材抜き取り痕）
- 6、黄褐色土層（墳丘盛土石層）
- 7、黒褐色土層 縄文土器を含む（旧表土層）
- 8、黄褐色土層（地山層）



363.0m

Hトレンチ

- 1、暗茶褐色土層 拳大以下の礫を含む（表土層）
- 2、石ガラ層（畑造成に伴う礫層）
- 3、暗褐色土層
 ϕ 15 ~ 20cmの角礫・平石を非常に多く含む（墳丘盛土石層）
- 4、暗橙褐色土層 ϕ 15cm以下の角礫・砂利石を含む（地山層）
- 5、黄褐色土層 クサレ礫を多く含む（地山層）

0 (1/60) 2m

図 76 D号墳トレンチ個別図 (1/60)

第19節 ハ号墳

1 立地と現状

ハ号墳は、大室谷の入口に位置する村東単位支群の音無川右岸、北西から南東に上っていく傾斜面（大室谷扇状地）の標高約 365 m に立地する。北約 13 m には B 号墳、北東約 16 m に 26 号墳、南東約 20 m には 242 号墳、北西約 15 m には C 号墳が近接している。本古墳は、墳丘の東側は道路造成により削平されており、墳丘上部も削平されていた。横穴式石室の奥壁の一部が露出していたことで古墳であることが判明したものである。

2 墳丘・外部施設

墳丘は土と多くの石を用いた構造である。調査着手時において、墳丘の外周を廻ると思われる石列などは確認できなかった。



図 77 ハ号墳墳丘測量図 (1/150)

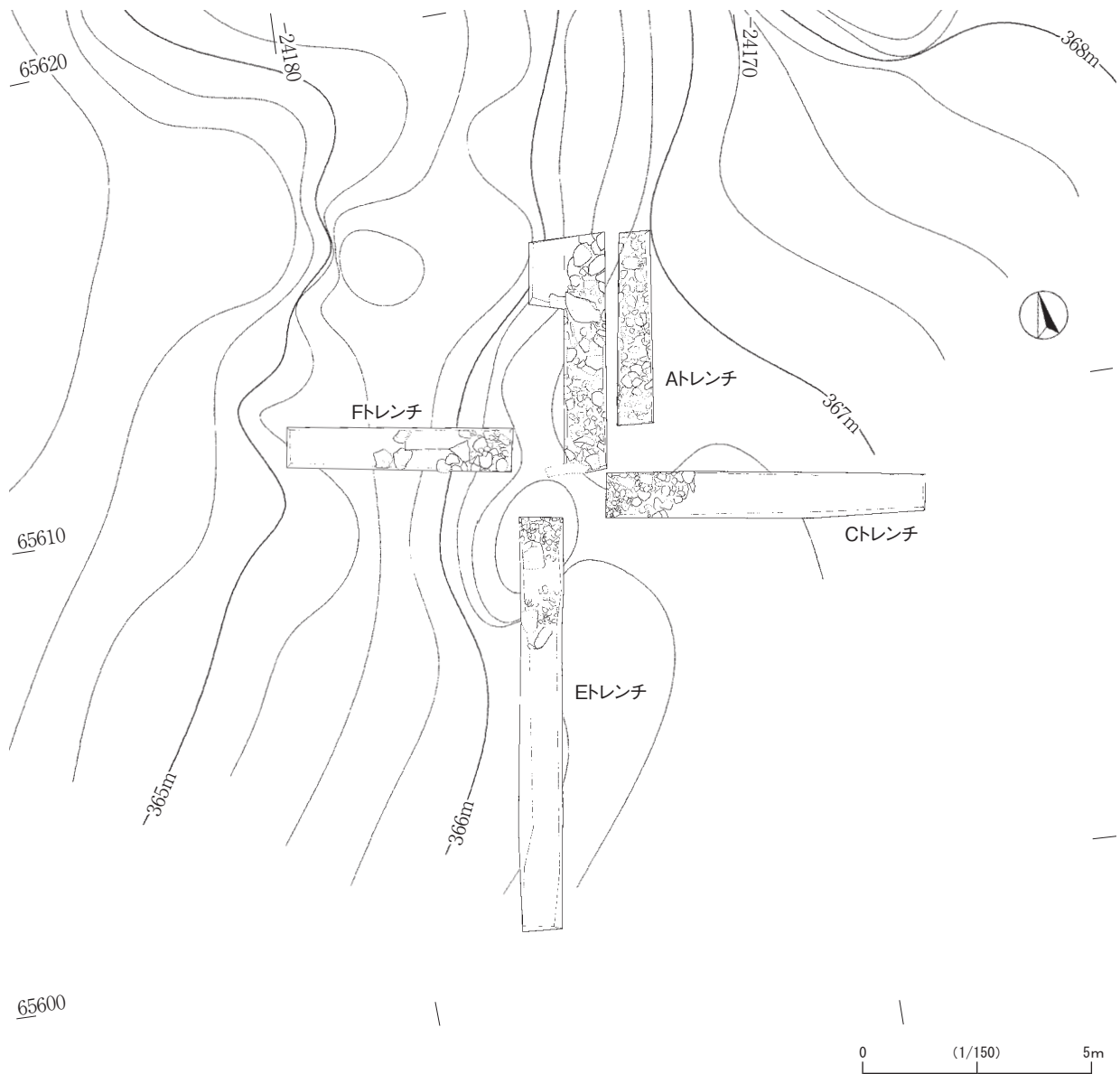


図 78 ハ号墳調査成果図 (1/150)

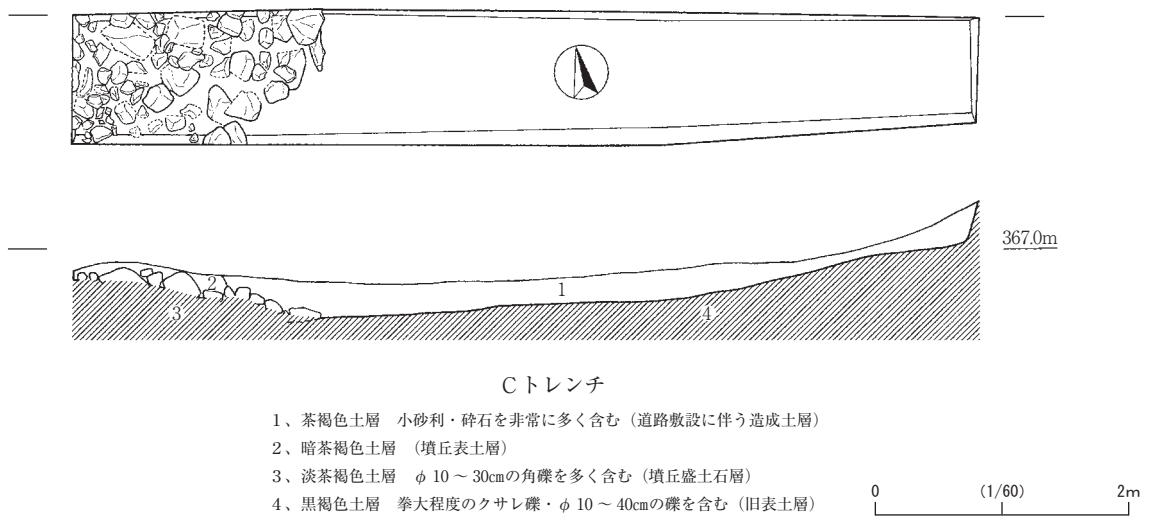
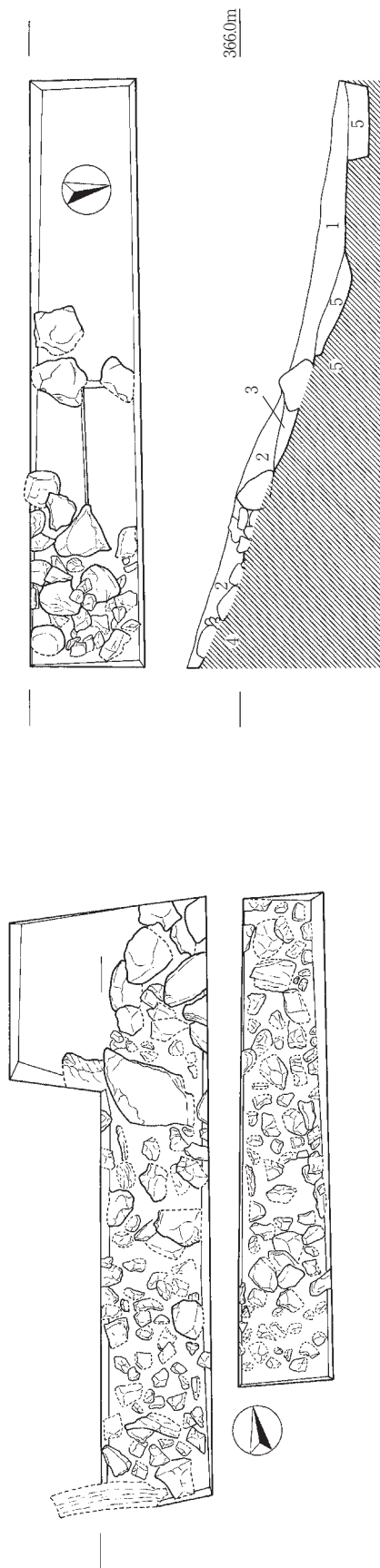


図 79 ハ号墳トレンチ個別図① (1/60)

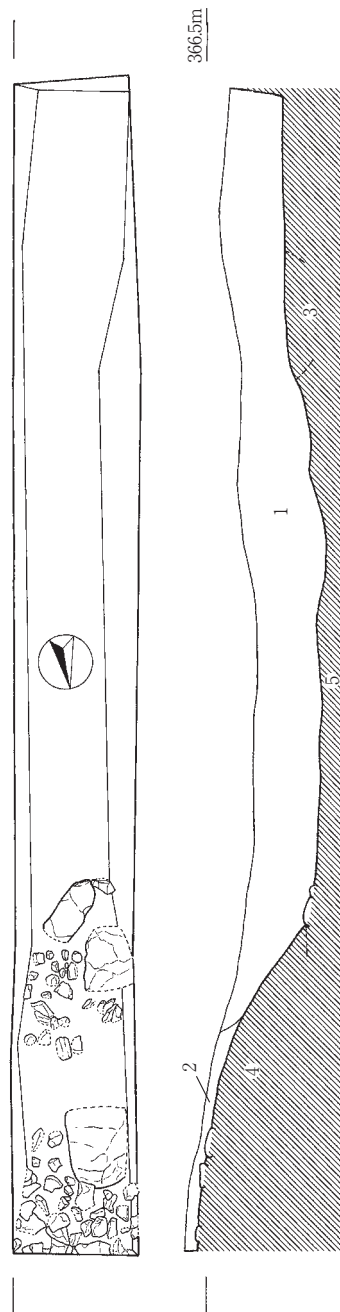


F トレンチ

- 1、暗茶褐色土層 拳大の礫、ビニールゴミを含む (表土層)
- 2、暗褐色土層 拳大の礫を含む (墳丘表土層)
- 3、暗褐色土層 拳大程度の礫を含む (墳丘盛土層)
- 4、暗茶褐色土層 φ 10～40cmの角礫を非常に多く含む (表土層)
- 5、黒褐色土層 拳大のクサレ礫・φ 10～40cmの角礫を含む (旧表土層)

A トレンチ

- 1、暗褐色土層 (表土層)
- 2、暗黄褐色土層 拳大～人頭程度の礫を多く含む (畑の石垣裏込め礫層)
- 3、暗褐色土層 10～25cm程度の礫を多く含む (墳丘盛土石層)



E トレンチ

- 1、暗茶褐色土層 小砂利・碎石を多く含む (道路敷設に伴う造成土層)
- 2、暗茶褐色土層 拳大の礫を含む (墳丘表土層)
- 3、暗茶褐色土層 拳大の礫・小砂利を含む (攪乱層)
- 4、淡黒褐色土層 拳大の礫・茶褐色土ブロックを含む (石室覆土)
- 5、黒褐色土層 φ 10～40cmの礫を多く含む (旧表土層)

図 80 ハ号墳トレンチ個別図② (1/60)

3 主体部・石室構造

本古墳の主体部は横穴式石室である。削平にともない天井石は失われ、側壁上部も破壊されていた。石室内部が埋没しているため詳細は不明であるが、小型の横穴式石室である。おおむね南方向に向けて開口している。

4 調査概要

本古墳は、1998（平成 10）年度に墳丘の測量を、1999（平成 11）年度に試掘調査を、2005（平成 17）年度に発掘調査を実施した。墳丘を石室主軸を中心に八等分し、奥壁側から時計回りに A～H 区として必要箇所にトレンチを設定した。

A トレンチ

墳丘北側の石室裏側にあたる部分である。掘り下げを行ったところ、トレンチのほぼ全面から礫群が検出された。墳丘中心側は礫が密であったが、外側は粗であった。密である部分は本来の墳丘部分、粗な部分は崩落部分と考えられるが、今回の調査では明確な境を認識することはできなかった。なお、トレンチ北西側は削平されていた。

C トレンチ

墳丘東側の山側にあたる部分で道路敷設のため既に削平されている部分である。トレンチ西側で、拳大程度の石室控え積みの礫群が検出された。これより東側は道路敷設の際に地山面まで削平を受けており、墳丘の範囲などを示す遺構は検出されなかった。

E トレンチ

墳丘南側の石室開口部にあたる部分である。トレンチ北側から石室を構成していると思われる石材が検出された。内部は礫が充満しているが、開口部相当部分に閉塞施設に関わると思われる板状の石材が検出された。

G トレンチ

墳丘西側の谷側にあたる部分である。トレンチ中央付近で石列が検出された。ほかのトレンチでは同様の石列が検出されていないため確定的ではないが、現在のところこの石列を古墳の外周を廻る石列であると考えている。トレンチ東側では石室控え積みの礫群が検出された。

上記の調査結果から、本古墳は直径約 8 m 内外の、墳丘構築に礫を多用した小規模な円墳であると考えられる。

第Ⅳ章 結 語

大室古墳群、とりわけムジナゴロ単位支群を訪れた見学者は、不思議な感覚にとらわれるという。日照時間の限られる、尾根にはさまれた狭い谷間という立地条件にあって、戦後植林された杉木立の鬱蒼とした景観条件が付加され、累々と石が積みあげられた異様な墓が密集している寒々しい空間は、あたかも「賽の河原」や「根の国」などの異界を彷彿とさせるからであろうか。

実際、それまでの日本における伝統的な古墳築造のあり方とは、明らかに異なっている。ゆえに、考古学的な検証作業よりも、渡来人墓制説対環境自生説に代表される被葬者論争が優先的に展開されてきた。しかしながら、第一印象とも言うべきこの異様さは、これまでの先達の血と汗によって、近年考古学的にも論述できるようになってきている。

他の多くの古墳の例に漏れず、大室古墳群でも現存する古墳のほとんどが盗掘を受けている。明治20年代の塚掘六兵衛に代表される盗掘ブーム、そして戦後の植林事業と庭石ブームが、景観を含めて大室古墳群を大きく改変させた。しかし、大正時代初め頃に地元有志による大室史蹟保存会が発足するなど、大室古墳群を守ろうとする地元の動きは、今も継続しているのである。大室古墳群保存会の地道な活動は、草刈りなどの環境整備にとどまらず、明治大学や長野市教委の発掘調査に対する支援や、研修会・見学会の開催など多岐にわたっている。

大室古墳群全体の約500基のうち、記録が残っていない過去の調査を含め、これまでに100基以上が発掘された。そのうち明治大学による学術的な発掘調査は32基であり、徐々にその実態が解明されてきている。被葬者論争に終始していた大室古墳群に対する評価は、こうした先達の努力を基礎として、科学的根拠をとともう学術的な評価へと変質してきたのである。

長野市が実施する大室古墳群の史跡整備事業は、息の長い事業である。史跡指定範囲内に限っても、古墳総数166基のうちの39基を調査したにすぎない。仮に年間5基ずつ調査したとして、史跡指定範囲の残りの古墳を調査するには25年以上、古墳群全体だと80年という時間が必要になってくる。大室古墳群の史跡整備事業が他と異なる最大の理由がここにある。

ならば、あえて発掘調査の終了を待つ必要はないのではないだろうか。発掘調査そのものも一種の展示コンテンツととらえる、体験型の野外博物館としての位置付けが可能であろう。学術的な価値付けに必要な各種調査に参加・体験できる史跡公園として、新たな利活用の方向性を提案していくことができるはずである。2011（平成23）年までの予定で実施している短期計画の整備が終了したとき、真の意味での史跡整備事業がスタートできるよう、ハード・ソフト両面から十分に検討し、文化庁および長野県教育委員会、整備委員会、関係各位のご指導を得ながら、その準備を進めていきたい。